
新歯界展望

辻 史

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新歯界展望

【Nコード】

N1509V

【作者名】

辻 史

【あらすじ】

医療都市イーストで歯科医師として働くコウは、麻酔科医師ハルが400年前に禁じられた医療について研究していることを知ってしまう。禁忌の研究を続けるハルに巻き込まれ、400年前の真実を追い求める二人旅が始まる。医術と魔術が交錯する医療系ファンタジー。

第一話 旅立ち（前書き）

初めて書いた小説です。お見苦しい点が多いかとは思いますが、頑張って書きますので、読んで頂ければ嬉しいです。

第一話 旅立ち

木曜11時の診療室はいつもの薬品の匂いの中に焼きたてパンの香りが飛び込んでくる。

「おじさん、コウくん！こんにちは」

街全体を一望できる高台に、この街一番の歴史的建造物であり敷地面積を占める帝国大学附属病院がある。その大学病院正面玄関から続く桜並木が美しい石畳の坂道を下り10分、大通りに面した交差点の一角に、イワサキ歯科医院は佇んでいる。

「おっ、ユキちゃん。いつもありがとう。今日はお母さんの調子はどうだい？」

ユキはこの歯科医院に隣接した、赤い屋根と煙突が目印のパン屋の娘である。茶髪のカブを今は一つにまとめ、店の名前が入ったエプロンをつけている。大きな瞳と愛くるしい笑顔の17歳の看板娘だ。「今日はすごい元気！朝からベッドから起きて来てるよ！」

「ユキー、めっちゃいいにおいじゃん！今日はカレーパン？腹へったー」

診療所の一人息子であるコウは、清潔感のあるケーシー型白衣に身を包み、栗色の猫毛に人懐っこい笑顔が印象的で、患者にもファンが多いという。歯型の模型をチェックしていた手をおろし、マスクを外しながらユキの手にあるパンの入った紙袋に手をのばした。

「アホか。お前は今日はあと11時から麻拔が二人と11時半から埋伏抜歯が二人だ。全員15分以内でやれよ」

麻拔とは麻酔抜髄の略であり、要は麻酔の注射をしてから歯の神経を抜くことである。未熟な若い歯科医師にとっては苦手とする者も多い。

「マジかよー。ぜってー無理だし。てか今日昼から大学なんだけど。大体親父の予約の入れ方がさー」

「院長と呼べ。そしてやれ。ユキちゃんは奥でパン食べながら一緒

にお茶でも飲もうかー！珍しい紅茶の葉っぱが手に入ったんだ。今日もこれから大学にパンの配達だろ？コウが早く終わらせんと行けないよねー」

その時、ガランという音と共に診療所入口の扉があき、予約患者が来院した。

「…やりやいいんだろ。くそっ、カレーパン残しといてよ…」

およそ三千年前、大陸には武術、医術、魔術に特化した三つの独立国家が存在した。二千六百年の間、それぞれの国家は全く異種の、独自の文化と歴史を発展させてきた。

しかし四百年前、三大国家の支配、統一を目指し、大陸全土で争いが繰り広げられた。後の世に戦国時代と呼ばれるこの時代を経て、二百年前、武術国家により大陸全土の統一が成し遂げられた。

それから二百年間、現在に至るまで武術国家はノースと言われる鉄壁な軍事都市に姿を変え、独裁的な政権が続いている。ノースは魔術都市ウエストと医術都市イーストに、先端技術の提供の義務、十代から二十代の男子の三年間の兵役の義務を課し、表向きの自由と絶対的な服従を強いることにより強大な支配下に置いた。

三大国家の統一が成されたにも関わらず、ノースは他の二都市の共謀を恐れ、都市間での交流を著しく制限したため、各都市は今日まで閉鎖的に文化の発展を遂げてきた。

大学病院研究棟2階の西の端に、コウの所属する歯科口腔外科の医局がある。

「すいませんっ、遅くなりました！あっ、マキさん」

「コウ、遅い。午後から外傷の緊急が入ったわよ。オペ室入室まであと15分あるから、症例把握しといて。」

「はっ、はい」

紙カルテの束とエックス線写真のフィルムを受け取る。

「お姉ちゃん」

マキは声のする戸の方に目をやると、20センチ程度の隙間からユキが申し訳なさそうに覗き込んでいた。

「ユキ、どうしたの？」

ユキの姉、マキは長い金髪、通った鼻筋、意思の強そうな二重の瞳で、強烈な美人という言葉が似合う。そして広く深く多岐に亘る医療の知識、繊細な外科の技術を兼ね備え、歯科口腔外科医局長を勤めている。

「忙しそうなのにごめんね。病院の売店にパンを届けるついでに、ハル先生に会いに来たの。実験で若い女の子の血液がいるんだって、いつでもいいから来てくれって言われて」

医局へのお土産のパンがたくさん入った紙袋をマキに手渡す。

「ああ、ハルね。全く、まだあの研究を続けてるの。・・・残念ね、緊急オペの麻酔、ハルが担当よ。今頃もうオペ室じゃないかしら」研究という単語を聞き、不快感を露わにした。ユキは理由は分からなかったが、それを察知し深くは追求しなかった。

「そっか、じゃあ仕方ないね。また来るって伝えて」

そう言って、病院売店のパンの宅配のカゴを片手に医局を後にした。

麻酔モニターから無機質な電子音が一定間隔で流れている。

手術室9ルームの無影灯の下で、ドレーンを留置し終えたマキが手を降ろした。

「コウ、閉創頼んだわよ。」

「はい」

マキは血液のついた手袋をはずし、手術用の青色のガウンを脱いで手術室を後にした。

「ハルさん、医局長がちょっと怒ってましたよ。ユキに研究のために血液がいるって言ったんですよね？」

器用な手つきで吸収糸で創部の内部縫合しながら、コウは麻酔モニ

ターの前であくびをしているハルに声をかけた。

「ああ、マキにばれちゃった？」

「ハルさんが怒られるんはかまわないんですけど、ユキに変なことしないでくださいよ……。一体何の研究してんすか」

ハルは大学病院麻酔科指導医であり、マキの同期にあたる。ひときわ整った顔立ちと高い身長に長い手足、飄々とした雰囲気纏い、底抜けに人当たりがよいため、院内でもちょっとした有名人だ。

「はいはい、お前の大事なユキちゃんに手え出したりしねーって。」ハルは学生時代からマキの実家のパン屋の常連であり、ユキもハルのことを兄のように慕っている。

「なっ、そんなじゃないですよ！大事な妹みたいなもんです」真っ赤になって否定するコウを見て、ハルはマスクの下でにやにやする。

「あー、はいはい。いいから縫合に集中しなさい。そこ、吸収糸じゃないだろ」

「あ……」

コウは焦って取り乱し、持針器を落としそうになりながら黒絹糸に持ち替えた。しかし基本的に平均レベルより群を抜いて器用であり、一息ついて落ち着くと、あとはもう正確かつ迅速に創部の閉創を終わらせていた。

「は……。もうすぐ明日になるじゃんか……」

今日はやけに星が綺麗だった。

結局あの後も急患が相次ぎ、やっと病院を後にできたのは日付変更十分前というところだった。

「疲れた……。親父とマキさんの人使いの荒さはそっくりだよなあ。木曜は地獄だ……」

日頃大学病院口腔外科に勤務しているコウだが、木曜は半日実家の歯科医院を手伝っている。

ユキの焼き立てパンの差し入れを差し引いても帳尻があわない。

「あれ、あの電気ついてる部屋はハルさんの研究室だっけ？こんな時間まで研究してんのかな。ユキは・・・来てないよなあ」

そう思いつつ、なんとなく部屋に立ち寄ってみることとした。

研究室は5階の奥の部屋であり、あまり人が立ち入らない。ノックをしようとした寸前で中から話し声が聞こえて、寸でのところで手を止めた。

「――困るんですよ。先生ほどの方がこの禁忌をご存じないとは思えられないのですが。」

「へえ。全っ然知らなかったですねー。ボク無知なんで、スミマセン。」

「態度と口のきき方に気をつけなさい。君程度のドクター一人消えるくらいくらい、この国ではよくあること・・・かもしれませんよ？」

「おー怖いっすねえ。それで？じゃあどうすればいいんですかね」

「今、目の前で、研究データを全て渡しなさい。そしてこの場でコンピュータ内のデータを全て消去しなさい」

「・・・はいはい。逆らわない方が身のためってね」

「さすがに理解はしているようですね。それと、今後の監視が厳重になることは覚悟しなさい。そして、この研究データの内容によっては・・・わかりますよね」

「身柄の拘束？それとも暗殺しちゃう？その権力振りかざす感じ、クライじゃないですよ。まあ、大したデータは出てこないんで、ご安心を」

（なんだ？誰と、何の話をしてるんだ？）

盗み聞きをするつもりはなかったが、なんとなく息をこらして扉の前で会話を聞き入ってしまった。そこで内側からドアノブが回され、コウは急いで柱の陰に飛びのいた。

そして部屋から出てきた人物を見て、思わずあげそうになった声を必死に噛み殺した。

（―――大学長?! えーっ! まさか。ハルさん、どんなやばいことしてるんだよ）

長身の黒い服に身を包んだ護衛風の二人の男を引き連れ、学長は暗い廊下へと消えた。

「・・・ハルさん」

なんとなく気まずいなか、パソコンの前でタバコをくわえ頬杖をついているハルにそっと声をかけた。

「おあっ! なんだ、コウか・・・。びっくりさせんなよな。」

おもわず銜えタバコを落としてしまったが、タバコに火はついていなかった。

「ハルさん、どういうことなんすか。さっきの、学長でしょ? なにしてるんですか? ユキが関係してるんですか」

この帝国大学学長ということは、すなわち医療都市イーストのトップである。もちろん普段から人前に現れるような人物ではない。コウも新聞や講演でみたことがある程度だ。

「ああ、もう、いっぺんに色々言うなよ。」

ハルはタバコを拾って日をつけ、頭をボリボリ搔くと、観念したように話し始めた。

「―――お前、禁忌の医療って知ってるか?」

「禁忌って・・・400年前以前、の?」

医療人であるなら、大概の人間が一度は耳にしたことがある。400年前、つまりは統一国家となる前、医療都市が独立国家であった時代に行われていた医療技術が存在したという。統一国家となった際に禁止され、以来教科書にも歴史書にも載ることなく抹消されたらしい。そのため、コウが知っている知識も、語り伝えられた噂程度の曖昧なものである。

「そう、400年前には、現代とは全く異なった医療技術が実際に存在していた」

「全く異なった・・・医療・・・」

もはや誰もがおとぎ話のように考えている、言い伝え。そんなものを本気で研究していることにも驚いたが、先ほどの学長の行動、状況が把握できない。

「ハルさんは何でそんな、禁忌といわれる研究をしたんですか。さっきの、学長でしょ？ 相当ヤバいっすよ、マジで」

「それは、まあ、内緒だ。とりあえず、ここじゃもう研究できねーな。」

机の上に足を投げ出し、タバコの煙を吐き出す。その態度にコウは事態が重大かどうかよく判断つかなくなりそうだ。だがもともとそういう人間なのだ、ハルは。

「研究を続けるも、さっき全部消去されて、データも持っていかれじゃないですか。大体そんな危ないこと辞めたらいいじゃないですか。一体何のために」

言い終わる前にハルが黙り込んでいることに気が付いた。俯いているため前髪で表情がよくわからない。ハルの考えが理解出来ずに焦っている、ハルはふっと笑って話し出した。

「・・・さっきのは、ニセモノ。こんな事くらい予想済みだったの。」

「ええっ」

「どの道、こんな政府の監視下で真ん中で研究続けられるなんざ思っ
てねーよ。前々から考えていたんだけどな、とりあえずウエストを
目指そうと思う。魔術都市のなかに、研究の手掛かりがあるはず
なんだ。そうだ、お前も外の世界を見ておいた方がいい。」

「――オレ？」

「お前んち、訪問診療用の車があったよな。アレなら都市間の移動も
問題ない」

そう言ってニッと笑ってみせた。

こうして、歯科口腔外科見習い、コウの、つらくて過酷で理不尽な
二人旅が始まった。

北の空には相変わらず星たちが輝き、北斗七星は嫌味な位光を放ち、北の方角を自己主張しているようだった。

第二話 白竜と西の男

「すっげー雨・・・」

フロントガラスに叩きつける大粒の雨粒で、ワイパーを最速で稼働させても視界は最悪だ。

話は一週間前に遡る。

医療都市イースト中心機関である帝国大学の歯科口腔外科3年目の歯科医師コウは、忙しくも充実した生活を送っていた。しかし先週木曜日に麻酔科医ハルが400年前に抹消された禁じられた医療について研究を行い、大学長より脅迫じみた嚴重注意を受けている場面に遭遇してしまった。それから研究の継続のために魔術都市ウエストを目指すことを決意したハルは、何の思惑があつてか、コウを連れていくために四方八方に根回し、手続きを行い、週明けの月曜日にはコウの実家の歯科医院訪問診療車でイーストを出発するにまで至った。

各都市間の交通は軍事都市ノースが整備した鉄道のみであり、ウエストへ直接行くことは出来ない。そして車自体も、医療用車などノースに認可された車両しか使用が認められないため、道路の交通網が発達していなかった。

だから二人はイーストでは数少ない車に乗り、ノースとイーストを繋ぐ線路沿いの道なき泥道をひた走る。

「――ホントに大変だったんすよ、この一週間。引き継ぎやら何やら、マキさんにはめっちゃ嫌味言われたってゆうか、殺されそうだったし。」

視界不良の中でハンドルを握っているコウの横で、ハルはダッシュボードに足を乗せ、今日何本目かわからないタバコに火をつけた。

「そういえば、ユキちゃんが泣いてたらしいな。マキが言ってた」

「え？行ってらっしゃいって、お土産よろしくってゆってたけど・

」

「かーわいいねえ。強がりだけど本当は弱い女の子って最高――
―痛っ」にやにやしていたハルは急ブレーキによって思いっきり腹部に衝撃を受けた。

「・・・っなあにすんだお前！ちゃんと前見て・・・っておい」

「ちよっとすみませんっ」

コウはシートベルトを外して車外に飛び出した。

土砂降りに一瞬ひるんだが、コウの後を続いてハルも降りて行くと、
コウが車の前でしゃがんで何かを抱えていた。

「何だ・・・？って、それ、ドラゴンの子供か？」

「どうしようハルさん！オレ、当たったのかな？！ぐったりしてる
し・・・ハルさん麻酔科医でしょ、なんとかしてよ！」

コウの腕の中には小型犬くらいの大きさの、ゲームに出てくるドラ
ゴンのような小動物だった。

「うーん・・・俺の専門は人間なんだけどな。ちよっと見せてみる」
そう言って小さなドラゴンを車に運ぶと、人間にするのと同様に外
観を観察し、脈をとり、呼吸、心音を確認した。

「バイタル安定、外傷なし。衰弱が激しいな・・・腹でも減ってんじ
ゃねーの？点滴は、難しいか。何かないか・・・ミルクと・・・ツ
ナ缶でいいか」

そう言って毛布でくるんでやり、車に積んでいたミルクとツナ缶を
やると、少しずつ元気を取り戻してきた。

「あー、よかった・・・。わっ、舐めるなって！あれ、お前、右目
が見えないの？だからお母さんとはぐれちゃったの？」

わかってるのかいないのか、キューッと鳴いてばかりだ。

「なあ、オレ、この子連れて行きたい・・・」

胸から肩へとよじ登る隻眼のドラゴンの子供を抱きしめ、コウは縫
るような目で見てきた。

「まあ、ここに置いてくわけにもいかないか。街に着いたらうまく隠せよ」

「マジで?! よかったな、マサムネ!」

「マサムネ?」

「独眼竜のマサムネ、当然じゃん! お前カラダが白いのな。ほら、マサムネ、食後の歯磨きだぞ」

ああ、独眼竜の伊達正宗かと妙に納得してしまった。

相変わらずバケツをひっくり返した様な雨と、小児用歯ブラシ片手に嬉しそうにはしゃぐコウを見て、ハルは少し笑うと座席のシートを倒した。

「よし。ちょっと早いけど、今日はここで泊まるか。明日には街が見えてくる頃だしな」

かれこれ四日間、コウは食事と睡眠以外はひたすら運転を続けていた。

明日こそはベッドで休みたいと期待しながら、二人と一匹は眠りに就いた。

翌日、眩しい太陽光と心地よい振動でコウは目が覚めた。

「あれ、ハルさん・・・?」

「なに寝惚けてんの。もう街が見えてきたぞ」

「えっ、ホント? てか運転できないってゆってたじゃないですか!」

「そんなん本気にしてたのかよ。俺だって兵役行っただから運転くらいできるに決まってんだろ」

コウは兵役にはまだ赴いてなかったためその点で無知であり、簡単に騙され馬車馬のように運転させられていた。

「じゃあこの四日間、オレばかり・・・」

「まあそう深く考えんなって。ここらか先は俺が運転した方が色々とうまくいく」

そう言って高いレンガ造りの塀で囲まれた軍事都市ノースの最南端の入口に向かった。

頑丈な鉄製の門には衛兵が常時待機しており、来訪者全員に対し検問が行われていた。

「通行手形を拝見します」

どうしようと青くなっているコウを横目にハルはダッシュボードからゴソゴソと一枚の紙切れを取り出した。

「空軍大佐イワサキ ユイの署名捺印のある通行手形だ。通してもらえるかな」

「確認します」

そう言って併設された詰所に入り、五分後に戻ってきた。

「すべて確認されましたのでお通りください」

「どうも」

平然とタバコをくわえハンドルを握るハルの横で、コウは状況を飲み込めず嘔然としている。検問所が十分に遠ざかった所で、コウはまくし立てた。

「え、え、ええっ?! イワサキユイってオレの母さんじゃん! なんで?! さっきのってホンモノ?! しかも空軍大佐ってなに?!」

「バーカ、んなわけねーだろ、さっきのは真っ赤なニセモノ。ユイさんに会いに行く暇なんかないだろ。てかお前知らなかったの? お前の母さんはノースのお偉いさんよ?」

コウの父と母・ユイは、父の兵役時代に知り合ったと聞いている。ノースにより都市間の移動は規制されており、さらにこの十年規制に拍車がかつたためコウ自身がユイと出会ったことは数えるほどしかない。

「なんでハルさんがそんなこと知ってんの? オレばっか何も知らないじゃないですか」

ちよつとふてくされてコウが助手席で胡坐をかいて大きめのポストンバックの中に入ったマサムネをカバンごと抱きしめた。

「そうやさぐれるなって。俺も色々あんだよ。それよりまず今日の宿を探すか。そっから今日中にユイさんにも会っておきたい」

そう言ってハルはタバコの火を消してポケットから皺の寄った地図

のようなものを出し、宿泊施設が立ち並ぶ一角に車を進めた。

一つ通りを入った路地裏に車を一時停車させ、目的地を探すため車から降りた。

「この辺か？ あれ・・・」

その時突然、赤い屋根が連なる家並みの間の石垣から、薄汚れた白い布を身体に巻いた褐色の肌の男が塀を越えてハルの前に現れた。

「あんた・・・」

お互い驚きで言葉を失っているところに、数人の足音と怒声、罵声が聞こえてきた。

「探せ！ 怪我をしているからそう遠くへは行っていないはずだ！」

「こっちだ！ 絶対捕まえろ！」

ハッと我に返った褐色の肌の男は周りを見渡し、塀伝いに逃げようとした。右脚から出血していることに気がついたハルは、塀の上の男の腕を引いた。怪我した足をかばうようにバランスを崩して落下した所を塀の下で抱きとめた。

「ちよつと・・・はなして下さい。逃げなきゃ・・・」

「早くこっちへ」

戸惑う男をお構いなしに、後から助手席より出てきたコウが後部座席へと押し込み、上から毛布を被せた。

騒ぎ立てる衛兵が通り過ぎるのを待ってハルは後部座席へと移動した。

頭から纏っていた汚れた布を取り払うと、褐色の肌の男は尖った耳、絹糸のようなダークブラウンの髪、美しい碧眼の痩せた若い青年であった。彼は身体の内側に擦過傷があるだけでなく、右前腕と右下肢に20？程度の裂創を認めた。

「大丈夫・・・です、ので・・・」

腕を掴まれて動揺する男にお構いなしに、ハルは創部の洗浄後、裂創周囲に局所麻酔を行った。手際良く縫合に取り掛かる横でコウはハルの指示通り抗菌薬や破傷風トキソイドといった様々な薬品の準備をしていた。

「はい、出来上がり。ちよつと痕は残るだろうけどな」

「ハルさん、やっぱりすごい。こうゆう時って歯医者は役に立てないなあって思いますよ」

「何言ってるの。俺らは歯が痛いって言われたらお手上げよ？」

ニツと笑いながら清潔ガーゼを当て、包帯をくるくると巻いていく。

「すごい。痛みも血も止まった・・。あなたたち、東の人ですか」

「ん？東って？あつ、痛みは麻酔が切れたら痛くなるから、ちゃんと痛み止めを飲んでよ」

コウが質問にポカンとしながら鎮痛薬の準備をしている横で、ハルが口を開いた。

「確かに俺らは医療都市イースト、東から来た。・・・あんたのその耳と肌と、眼。魔術都市ウエスト、つまりは西の人間なんだろう？詳しく話を、聞かせもらいたいんだけど」

驚いてコウが振り返った。

強張った面持ちで、男は頷いた。

強い日差しが照り付ける夏の暑い日、ノース到着一日目のことだった。

第三話 薬屋

イーストから出たことがないコウにとっては、初めて聞く話ばかりだった。

イーストの人間が外科や内科、小児科、歯科などの専門を持つように、魔術都市ウエストでは各々が生まれながらにして水、火、風、大地、光、闇の六つの属性に分かれているということ。

ウエストでは医療は発達しておらず、各属性それぞれにおいて異なった形の治癒促進術が存在すること。また治癒だけでなく、生活全般の様々な分野において魔術が発達していること。

ウエストの人間は皆、尖った耳に褐色の肌、碧眼を持つこと。そして彼の名が、フェイトということ。

「はいはい、そのくらいにしとけて」

興味津津に質問を畳み掛けるコウをなだめて、ハルが口を開いた。

「さて本題。フェイトは何で追われてたんだ？俺らは別にノースの人間じゃねえし、話してくれてもいいと思うけど。力になれなかったら、尚更ね」

フェイトはしばらく口を閉ざしていたが、やがてポツリポツリと躊躇いがちに話し始めた。

「ノースへの不法侵入です」

「え？」

意外な答えに二人は目を丸くした。

夏の強い日差しにサラサラの前髪が透き通り、碧眼にかかる。膝に手を置き俯きがちなため表情が読み取れない。

「――ウエストには献上品という義務があります。ノースが指定した魔術の産物を提供するというものです。

でも献上というのは名ばかりで、逆らう事の出来ない略奪です。各

居住区の担当のノースの軍人が好き放題奪っていくんです。

・・・ウエストにはドラゴンがたくさんいて、それぞれが己が認めた魔術師の主を持ちます。私と妹には幼いホワイトドラゴンの双子がいたんですが、今回の献上の際に、二匹とも無理矢理捕らわれて。どうしても助けたくて、それで」

それを聞いてハルとコウは顔を見合わせ、急いでボストンバックを取った。

「なあ！そいつって、こいつ？ここに着く前、雨の中で衰弱してグツタリしてたから、そのまま連れてきたんだけど」

コウがカバンのファスナーをあけると、マサムネが顔をひよこっと出した。

「マサムネ！捕まったのにどうして・・・」

フェイトの言葉を聞いて、ハルが口をあぐりとさせた。

「――マジでそっちでも“マサムネ”なのかよ。じゃあもう一匹は？」

その問いに二人の声が揃った。

「コジュウロウ！」

片倉小十郎景綱。伊達氏家臣で、伊達政宗の近習となり、のち軍師役を長年務めた。

二百年間続いた戦国時代に、現代まで伝承されるたくさんの武将と呼ばれる人間がいた。ただ、どこの国の人間でどのような歴史的功績を残したのかは、語り継がれていない。その強さ、憧れのみが漠然と語られるのみなのである。

イーストでは親から子へ、目指すべき人間の象徴として話し、ウエストでは敬意を込めドラゴンに名をつける。

伊達政宗の名を借りたドラゴンはフェイトと再開できたものの、コジュウロウの行方が掴めない。

フェイトの決意は揺るがなかった。

「すみません、見ず知らずの人間を助けて頂いて、手当てまでして

もらって。本当に有難うございました。私はコジュウロウを探しに行かなければいけないので、これで」

狭い車内で一礼すると、ドアレバーに手をかけた。

コウは慌ててフェイトの腕を掴み、まくし立てた。

「ちょ、ちょっと！そんなケガしてどこ行くんだよ！それに探すアテだってあんのかよ！お前そんなんで自分もマサムネも守れんの？怪我だってしてんのに！そんなにオレら信用できない？そりゃあハルさんは胡散臭いところあるけど…。でもさあ」

「おいおい、お前勢いに任せて何言うのよ。まあでも多分、一人より三人の方がコジュウロウ奪還しやすいんでない？ほらっ、コウもケガした腕を掴まない。主治医はオレよ？患者は主治医の言うことを聞くこと」

そう言ってハルは運転席に戻るとイグニッションキーを回した。

「あの、ノースへの不法侵入で死刑になった仲間もいます。あなた方が初対面のよくわからない人間の、そんな大変なリスクと一緒に背負う必要はないです！」

助手席のコウが運転席との間のスペースからひょいと頭を出し、得意げに笑った。

「じゃあ尚更、一人で行かせらんねーじゃん。それによくわからない人じゃないよ。マサムネのご主人サマだもん。大丈夫、一緒にコジュウロウ助けようよ」

「でも・・・」

フェイトは膝の上のマサムネをきゅっと抱いた。バックミラーで見ながらハルが口を開いた。

「お前もコウと同じで強情だな。じゃ、こうしよ。オレら、ノースでやることやってたらウエストに行こうと思ってるんだけど、フェイトが連れてって案内してよ。交換条件ってヤツ」

フェイトが顔を上げると、バックミラー越しにハルと目があつた。

「でも・・・」

「詳しいことはあと！まずは今日泊まるところに行くぞ」

「ハルさんどつかアテあんの？」

「まかせなさい」

アクセルを踏み込み、三人と一匹を乗せた車は路地裏を進んでいった。

綺麗に舗装された石畳の道から、砂利道になって十五分程度走った少し町外れにその家はあった。

赤い屋根と白い漆喰の壁が夏陽に眩しく、正面の扉上部の壁と軒先の看板には“薬、道具”を意味する言葉が書かれていた。

「あれ、薬局？宿じゃないの？」

コウの問いには答えず、ハルはドアを開け、ガランという扉についた鐘の音と共に入った。二人はハルに続いて少し薄暗い室内へと進んだ。

「いらっしやーい！あら？！ハルじゃない！ああ、何年振りかしら。会いたかったわ」

暗い照明に似つかない明るい声の女性がカウンターから出て来て、ハルと再会の抱擁をした。

コウはエプロンで店番をする彼女の姿を一瞬ユキと重ね合わせてしまい、まだイーストを出発して一週間も経ってないのに寂しさと懐かしさを覚えた自分に驚いた。

（・・・そうか、オレが生まれた時から隣の家には八歳年上のマキさんがいて、いつも遊びに来るハルさんがいて。オレが四歳の時にユキが生まれて、ずっと一緒に育って。ユキとは一週間と離れたことはなかったんだ。だからこんな変な感じするのかな。ハルさんとマキさんは兵役行ってたから何年も離れたことはあったからなー）

「コウ？」

ハルの呼びかけで、回想に耽っていたコウはハッと我に返った。

「あっ、えっと、はじめまして。イワサキコウって言います」「こんにちは。コウくんの話はちょっとハルから聞いたことあるわよ。あたしはミナミカエデです。ハルはねうちのお父さんの命を助けて

くれたことで知り合って、しばらくここで一緒に住んでたのよ」

「えっ、ハルさんと同棲?!」

「バーカ、家族ぐるみだっただけ」

「でも一つ屋根の下じゃないですか」

「はあ?」

カエデは二人のやり取りを聞き、カラカラと楽しそうに笑った。明るくよく笑い、長身でショートカットにボーイッシュな出で立ちで、コウの回りにはいなかったタイプの美人だ。

「あら、そっちのキレイな顔の子は?」

フェイトがマサムネを肩に乗せ、居づらそうに入口付近に立っていた。

「カエデさん、フェイトって言うんだ。さっき知り合って友達になった」

コウはまったく人見知りをしない。歯医者としても有利に働く長所だ。反対にフェイトは人見知りなのか緊張しているのか、三人と距離を保ったまま俯いている。

「・・・はじめまして」

「ウエストの人ね。今回は色んな人がいて楽しそうだわ。今回もしばらく泊まってくんではよ?」

「さすがカエデ、話が早い。しばらく厄介になる。コウは歯医者だから、思う存分使ってやって」

それを聞くとカエデは目を輝かせた。

「歯医者さんなの?! この地区、歯が痛くて困ってる人が多いのよ。おかげで薬は売れるけど、あたしは歯の治療は出来ないから根本的な解決にはならないし。ってかノースに歯医者さんなんてほとんどいないからね」

そう言うとカエデは歯痛に使用する薬を出して見せた。

「痛み止めなんだけど、こっちが飲み薬でそっちが虫歯に詰める薬よ」

コウは薬を手にとると匂いを嗅いで口に含んだ。

「鎮痛薬と・・・こっちは酸化亜鉛ユージノールかな。確かにこれじゃホントに対症療法の応急処置しかできないね。オレ、訪問診療車で来てるから治療しよっか？」

「本当?! ありがとう! でも今日は疲れてるでしょ、部屋を案内するからゆつくりしてって。明日から期待してるわ」

そう言うとカエデは三人を連れて二階の一番奥の部屋へと案内してくれた。

木製のドアを開けると眩しい日差しが部屋いっぱい満ちていた。南東の方角に大きい窓があり、壁際にベッドが一つ、ガラシとしたフローリングの床にはエキゾチックな絨毯が敷かれている。壁には天井まで届く本棚にたくさんの書物が隙間なく並べられており、ハルが懐かしそうに手に取った。

「そういえばさあ、フェイトの属性っていうのは何なの? 火? 水?」
コウが車から運んできた身の回りの荷物を部屋の隅に置きながら尋ねた。

フェイトからウエストの人間が水、火、風、大地、光、闇の六つの属性に分かれていることは聞いたが、肝心のフェイトの魔術については聞き忘れていた。

「私は風です。でも同じ風の属性も、使い手によってまったく違う魔術になるんですよ」

フェイトは血で汚れた服を脱ぎ、カエデに渡されたシャツとズボンに着替えた。

「ふーん。実際魔術ってどんなの? 風を吹かせたり?」

「いろいろです。同じ風だって使い方によっては周りを切り裂く刃になったり、包み込んで守ってくれる鎧になったり、こんなことだって出来ます」

フェイトは床に敷いている薄手の絨毯に左手をつけると、右手で空に陣を描き、何かを唱えた。すると絨毯と床の間に五十センチほどの空気の層が作られ、絨毯はコウを乗せたまま宙に浮かんでいる。

「簡易ベッドです」

そう言ってフェイトは少し照れたように笑った。

「お前笑うとかわいいのな。俺らがついてるし、コジユウロウも大丈夫だから、お前は笑っとけよ。でないとマサムネとコウが心配する」

ハルはフェイトの頭をポンポンと叩いた。フェイトは驚いて、それから少し泣きそうになっが、頑張って笑った。捕われて死刑になる覚悟でノースに入り、追いかけられ斬りつけられ、コジユウロウの行方も分からず、不安と孤独に押しつぶされそうな状態だっただろう。

「――ありがとうございます」

「ん。」

「お昼ごはんの準備ができたわよー!」

下の階からカエデのよく通る声が家中に響いた。

「はーい!」

忙しくなりそうな毎日の、束の間の休息の昼下がりがりだった。

第四話 朝焼け

朝から快晴であった。

この日も、朝食後すぐにカエデを助手席にのせたコウの運転する訪問診療車が出発した。

連日朝から夕方まで身を粉にして歯科治療に勤しむが、噂が噂を呼び患者は増える一方だ。

しかも患者一人一人も、当然長期間放置した歯科疾患が多く、一回や二回の診察では到底終わらない症例ばかりである。

「コウくん、午前中は湖の東の沿岸地区よ。予約は・・・九時SP、九時半RCT、十時単純拔牙、十一時CR。SPって消毒だっけ？RCTって何？CRは？」

カエデは訪問歯科始めて急遽作成したコウの予約表をパラパラ確認する。

「RCTは根管治療。歯の神経、根っこの治療だよ。CRは白い詰め物。カエデさんが手伝ってくれるからホントに助かる」

「午後は水平埋伏智歯抜歯・・・親知らずね」

「正解！アシストよろしくね」

「まかして！初めて見た時は歯茎剥がしたり骨ゴリゴリ削ったり血が出たり、マジでゲロゲロって感じだったけどねー」

「そお？オレはアレが日常だもんなー」

まだ幼さの残る顔つきと人懐こい性格と無邪気な態度でついつい少年のように扱ってしまいそうになるが、一旦診療になると一人前のドクターの顔つきになり、しばしばカエデを驚かせた。

三人がカエデ宅の居候となり二週間、各々忙しく過ごしていた。

フェイトは歯科治療の手伝いをしているカエデに変わって、カエデの家族と店を手伝っている。耳まで隠れる帽子を被り薄い色が入った眼鏡をかけると、薄暗い店内のため簡単に素性は知れずにすむ。

むしろ整った容貌とミステリアスな雰囲気で、若い女性客が急に増えたという。

ハルはというと、毎日早朝からカエデの家の二輪に跨り外出している。

本当はフェイトが自ら行方が分からないホワイトドラゴンの片割れ、コジュウロウを探しに行きたがったが、前のように騒ぎになるのを懸念し、地の利があるハルが情報収集に繰り出しているのだ。

この日は急患が相次いだコウ達の帰宅が最も遅くなった。

「お帰りなさい」

「お帰り、お疲れさん」

ハルもフェイトも既に夕食を済ませ、リビングでくつろいでいた。二人の間にはチェスが置かれている。戦況はややハルが押しているか。

カエデの母が用意してくれた少し遅めの晩御飯は、フワフワのオムレツとチーズがたっぷりでコンソメがよく効いたオニオングラタンスープだった。夜は少し涼しくなり、薄着で冷えた身体にはホッとする優しい味だ。

ソファアに腰掛け、フェイトと熱戦を繰り広げていたハルが口を開いた。

「コウ、明日は訪問休みだよな？」

「うん。なんかあんの？」

最近ハルに対して敬語を使わなくなってきた。コウが言うには、今は職場でもなければ上司でもないじゃんとのことだ。元来幼少時からの付き合いであり、ハルが十五の時に兵役に赴くまでは兄の様に慕い後についてまわっていた程だ。

「明日、ユイさんに会うぞ」

「母さんに？てか訪問で忙しくって母さんのこと、すっかり忘れてた。でもオレ、居場所とかわかんないよ。向こうだってオレのこと、覚えてんのかな」

コウの母、ユイが大尉であった頃、兵役真っ只中であったコウの父と知り合い、コウが誕生したという。都市間での結婚は認められていなかったため、コウは父方に引き取られイーストで成長したが、当時は情勢も安定しており半年に一回程度はユイがイーストに訪れることができていた。しかし、コウが八歳頃から都市同士の小競り合いが増え、時には死者を出すほどとなり、ユイの訪問が困難となったのだ。

幼心に寂しくもあったが、自分を守ってくれる父と隣家のユキ、その家族に囲まれ、負い目を感じることもなくのびのびと成長することが出来た。

「子供を忘れる親なんではないですよ」

「フェイトの言うとおり。場所は俺が知ってるから」

「ハルさんが？てか母さんと知り合いなの？」

詳しく答えず、まあなと言ってコウとフェイトを二階に行くように促した。

三人が間借りしている部屋に戻ると、ベッドの上でマサムネが気持ちよさそうに眠っていた。

ハルは胡坐を掻いて床に座り、絨毯の上に真新しい地図を広げた。地図には何やらペンでたくさん書き込みがしてあるようだ。

「ここの赤丸がこの家。この大きい建物が太陽のパレス、政治的中心地だ。こっちの広い土地がある建物が月のパレス、軍事的中心地。兵役中はこっちにいることになる。この二カ所がノース、さらにはこの国を動かしてるって言うっていい」

コウは地図左下の黒い斜線に目があった。その周囲だけ特に細かく書き込みがしてある。

「それは通称、闇のパレス。表向きは展示物の少ないさびれた美術館。真の姿は非合法な催しが行われる施設。ブラックマーケットやオークションとかな」

フェイトはハッと顔をあげた。

「じゃあもしかしてコジュウロウはオークションに出品されるって言うんですか」

「ご名答」

「なんでそんなんが罷り通るんだよ。摘発とかされねーの？」

「できねーんだよ。軍人、役人が山程参加してるんだ。政府や軍隊にも金が動いてるって聞くしな」

「汚ねえよ、そんなの」

コウは眉根を寄せた。

「仕方ねえよ。世の中なんかキレイな事の方が少ないんだよ。」

「でも・・・」

「俺らの大学病院だって、上の方は真黒だ。学長筆頭にな」

「うーん・・・」

「まあ、そんでだ。今度ホワイトドラゴンが目玉のオークションってのが予定されてるらしい」

ドラゴン自体がウエストにしか生息しておらず、長寿であるため子供はほとんどいない。また、白色の動物自体が世界的に珍しく神聖なものとされている。そういった理由より今回のオークションは非常に注目されているというのだ。

「じゃあどうすんのさ。そんなデカイ組織相手にオレら三人で何ができるんだよ」

「そうですよ。お二人を危険な目にはあわせられません。あとは私一人で・・・」

両サイドからコウとフェイトに色々と言われ、ハルはバンッと地図を叩いた。

「だーかーらー！だからユイさんに会いに行くんでしょうが。あの人は必ず力になってくれる」

ハルは相変わらず自信満々でユイへの信頼も厚い。そんな様子を見てコウは唇を尖らせて不満そうに答えた。

「だって、何か作戦でもあるの？オークションなんかどうしようもないじゃん。そんなでかいところに手を出すのが無理じゃないの？落

札するお金だってないし」

「オークションは開催させない」

ハルには具体的な案があるようだったが、詳細はユイに会ってから決めるという事で、この日の話し合いは簡単な報告のみとなった。

翌日、コウは早朝に目が覚めてしまった。カーテンを開けると空が白んできたばかりで、鳥のさえずりが聞こえてくる。

そっと部屋を抜け出し、家の近くを流れる小川の河原にやってきた。朝の空気は澄み、気持ちのよい朝焼けであったのに、コウの心は晴れなかった。

自分もノースにやってきて遊んでたわけではないのだが、ハルだけがゴジウロウ救出の下調べを行い作戦を立て、ユイの居場所も知っている。

ハルの事は尊敬してるし、憧れでもある。自分にはないものばかり持っていて、敵わないと思う。実際この街でゴジウロウを助け出せと言われても、コウにはどうしていいか皆目見当が付かない。自分には出来ないとわかっている。ただ少しハルがうらやましかった。それから母、ユイだ。情勢が悪化し、都市間の移動が困難だったのは理解している。それでも、十五年も会っていないのは、会いたくないから？

何度も会いに行こうかと考えた。しかし怖かったのだ。そのため二十代という期限が迫っているのかかわらず、兵役に行けていない。生きている限り、会いたい気持ちさえあれば会えたはず。なのに会わなかったというのは。

グルグルと考え込んでいたら、後ろに立つ人の気配さえ気付けなかった。

「綺麗な朝焼けですね」

「あ・・・おはよ。マサムネも」

肩にマサムネを乗せたフェイトが横に座った。早朝で人がいないためか、帽子のみ着用しており、メガネはしていなかった。

マサムネは人に見つからないようにここのところずっと家の中にいたから、フェイトの肩から降りて河原ではしゃいでいる。

「あのさ・・・昨日、ゴメン」

「え？」

「オレ、なんか自分が情けなくて。ハルさんはコジユウロウ助けるためにめっちゃ頑張ってたて、でもオレはなんもできないなーって思ってた。どうしようもない、とか助けるの無理みたいな発言しちゃったけど、実際全然思っていないから！」

フェイトは目を丸くしたかと思うと、プツと吹き出した。

「あはは！そんなこと気にしてたんですか。私は全然気にしてなかったです。むしろ気にしてくれたことの方が嬉しいですよ」

「でも・・・オレ嫌な奴だった」

両足を抱え込んで座り、しゅんとしている。

「——お母さんの事も不安ですか」

驚いてコウはフェイトの方を見た。

「なんでわかるの？」

フェイトは答えず、黙って微笑する。

「・・・母さん、十五年会っていないんだ。小さい頃はよく会いに来てくれてたんだけどね。でも、いくら情勢が悪化したって、リスクがあったって、会いたいって思ってた会えない距離なんてないと思う。会えないのは、すっごく重病だとか、もしかして死んじゃってるとか、色々理由をつけて自分を納得させてたんだけどね。全然、普通に暮らしてそうじゃん。会うのが、怖いよ」

言い終わると、足元の小石を一つ拾って、水面に投げた。水切りをしたかったけれど、跳ねずに沈んでしまった。

「子供が大事じゃない親はいないです。ウエストの人間ってね、ノースやイーストと比べて短命なんですよ。だから十歳で成人して、家を出て自立します。私には親はもういません。大切な人が生きてるってだけで素晴らしいですか」

「・・・」

「――生きてて良かったですね」

コウは言葉を詰まらせた。母親に対する不安な気持ちの中に、生きてくれている喜びが存在していたことに、今の今まで気づかなかった。

「ありがと。なんか楽になった。ハラ減ったな、帰ろっか」

「はい」

立ちあがると、再び足元の石を拾い上げて投げた。今度は水面で三回跳ねて川の中ほどで沈んだ。

おいで、と言うと、川で遊んでいたマサムネが戻ってきた。

日もだいぶ昇ってきている。今日も暑くなりそうだった。

外伝一 十五歳

「あちい・・・」

茹だるような暑さの中、二輪では照り付ける陽射しが痛い。

「ヤバい、迷ったか」

石畳からも太陽光の跳ね返しを浴び、既に頭は働かない。

今日も朝から行方不明のホワイトドラゴン、コジュウロウの聞き込みに奔走していたのだが、何しろ路地裏の多い街だ。家の造りも全体的に似通っており、目印自体が少ない。

仕方なく路地を闇雲に走っていると大きな噴水のある広場に出た。

「もしかしてここって・・・うわ、懐かしい」

ハルは十五歳から二十一歳の六年間をノースで過ごした。

徴兵制度の為だ。

兵役は十五歳以上の男性に三年間の期間が義務づけられており、嫌な事は早く終わらせたいハルは十五歳になるとすぐに志願入営した。しかし大人に成りきれない少年には遥かに厳しい世界であった。

「イテテ・・・」

ノースに来て半年、早朝から晩までの厳しい訓練の毎日だった。

それに加えて先輩、上司からの容赦ない指導という名の暴力。

ハルの身体から生傷が絶えることはなかった。

自分の弱さを責め、逃れられない兵役という義務を受け入れようと努力はしたが、消化しきれない気持ちを抱え、夜遅くに宿舎を抜け出し夜の街を歩く事があった。

秋の風が火照った身体に気持ちよかった。

また、人がいないという環境も自分を安心させた。

当てもなく歩き回り、偶然たどり着いた噴水の広場があった。

当時のハルに医学の知識が少しでもあったなら、水中の微生物や細菌を考慮したかもしれないが、殴られて腫れた顔や腕を冷やしたくて、衣服など気にせず噴水の中に入った。

「何をしている」

声をかけられ、驚いて振り返った。

「・・・！イワサキ少佐」

ハルが配属された空軍の上司、イワサキユイである。ただ入隊したばかりのハルにとっては会話もしたことのない雲の上の人であったが、非常に珍しい若い女性の少佐であることから印象に残っていた。ハルは突然の出来事に呆然としてしまい、噴水の中で立ちすくんでしまった。

「怪我しているのか。お前、うちの隊の人間か？確かイーストの・・・」

「タカオカ・・・ハルアキと言います。すみませんでした」

「？何故謝る」

「夜間外出禁止令違反・・・です」

ユイはきょとんと眼を丸くしたと思えば、堰を切ったように笑い出した。

ハルが事態を飲み込めないと、条例違反には触れずに、ハルに近づき腕を引っ張り噴水から連れ出した。

「えっ、あっ、俺！濡れてるんで」

「かまわん。怪我をしているのだろう、見せてみろ」

そうしてそのままハルを自宅の屋敷に連れ帰ってしまった。

「あの、俺戻らないと・・・」

「私から連絡を入れておくから心配するな。第一、帰りたくないのだろう？」

何もかも見透かしてニツ笑ってくる。

「参りました」

その夜のハルはよくしゃべった。

生来人に弱みを見せることを極端に嫌う完璧主義者であるが、この時だけは十五歳の少年に戻っていた。

ユイの雰囲気がそうさせるのか、酷く弱っているところに受けた優しさのせいなのか。

「お腹すいてるんじゃないか？」

成長期の身体には軍の宿舎の食事では足りない。遠慮の言葉を口にしようとした途端に、代わりに腹が鳴った。

「わかりやすいヤツだな。何が食べたい」

「・・・硬いパン」

ハルは真っ赤になって答えた。

元来硬いパンが好きな訳ではなかった。

幼なじみのパン屋のマキがパン作りがとても下手くそだった頃、作るパンは大抵フワフワには程遠いものだった。落ち込むマキに、自分の好物は硬いパンだと言ったところ、喜んで毎日パンを届けに来てくれた。マキの得意料理がフランスパンになった頃には、ハルの生活に硬いパンが欠かせないものとなっていたのだ。

ユイが運んで来たのは、サーモンとオニオン、オリーブの入ったフランスパンのサンドウィッチだった。

それは半年ぶりに味気のある食べ物であった。

「・・・俺が弱いから悪いんです。理不尽に耐えなきゃいけないことがあるってのもわかってるんです」

お腹もいっぱいになり、ユイが打撲した腕を冷やす氷嚢を取り返えていると、ボソボソと話し出した。

「弱いことが悪いわけじゃないさ。私の権力で助けることだってできる。だけどそれじゃだめなんだ。自分で強くななくちゃ、だめだ。今のお前が弱い訳じゃないよ。でもお前は強くなれるから。今

日より明日の方が強くなればいい。——はい上がっかい」
そう言って悪戯をした子供のような顔で笑ってみせた。

「頑張ります。だから・・・行き詰まったら、時々硬いパン食べに
来てもいいですか」

「もちろんだ」

それからハルは、フラッと訪れてはフランスパンのサンドウィッチ
を食べて帰る。

中には酷く怪我をしている日もあるが、暴力に屈している様子は少
しもなかった。

たくさんの話をし、たくさんの話を聞いた。

ユイの息子がイーストにいることも、都市間の結婚が認められてお
らず、正式な家族ではないことも聞いた。

今日の情勢の悪化で、表沙汰になった際は息子たちにも危害が及ぶ
ため、最近は会うことも出来ないのだ。

ユイがあんまり儚げに笑うから、ハルの方がうまく笑えなくなった。

「そんなの、寂しいじゃないですか」

「ああ、寂しいさ。でも息子は大丈夫、父や周りの人間がちゃんと
愛してくれる。何より私の子だからな、強い人間だ」

「そりゃそうでしょうね。でもそれじゃ少佐が悲しすぎる」

「じゃあイーストに帰ったら、お前も息子を愛してやってくれ。私
の分もな」

返す言葉が思い浮かばず、俯いて手元にあったグレープフルーツジ
ュースをストローで啜った。好物のグレープフルーツの味がやけに
苦く感じた。

ハルは毎日努力を欠かさなかった。

おそらく人並み外れた才能もあったのだろう。

それ故に訓練の成績はどの項目においても首位を占めていた。特に
ユイの指導する航空機操縦訓練においては士官以下、並ぶ者が居な

い程とまで言われた。

それに比例し周囲の妬みも増していき、一年目の冬のある寒い日に事件は起こった。

初期からハルを暴力の対象としていた兵役三年目の先輩グループが、飛行訓練でハルが使用予定であった航空機のコントロールパネルに細工を行った。

当然操縦不能となり、墜落は免れたものの、不時着とは言い難い程の事故となった。

ハルが意識を取り戻したのは、事故から三日後であった。目を覚まして始めに飛び込んできたのは白い天井。次に意識したのは、起き上がろうとした瞬間の全身に走る強い痛みだった。

起き上がることを諦め、そのまま再びベッドに沈んだ。
「つつあー・・・あー、なんか思い出してきた」

制御不能の恐怖。

そして絶望と覚悟。

「俺、生きてんのな。しぶといよなー」

両手を見たくて天井に手を伸ばしたが、左手は思うように動かなかった。

右手で空を掴む。

犯人は大体予想はついたが、もう何をする気も起きなかった。自分なりに戦ってきたつもりだったが。

「今回は、相当キツイな・・・マジでイースト、帰りてえ」

そう呟いて、病院のベッドの頭側にある筈のナースコールを手探りで探した。

しかし目的の物は見当たらず、捜そうと頭を巡らした。

そんな時、頭上の壁に貼られた一枚の紙に気が付いた。

『ハルは今、飛行訓練中の事故で病院にいます。犯人はちゃんと捕まって、処分が下ってるから安心しろよ。また17時にくっから!』

白い大きな紙に書かれた、殴り書きの汚い文字を見て思わず笑った。笑っていた筈なのに、気が付いたら泣いていた。

「誰だよ・・・」泣いている自分に驚いたが、この日は涙を止めようとしなかった。

目元を右手で拭うと、重い上半身を起こした。すると、部屋には他にも紙が貼られているのが目に入った。

『マジで早く目を覚ませってば！また17時くらいに来るわ』

『書類とか連絡事項とか届けに来た。置いとくからちゃんと目を通せよ』

まさか自分を氣遣ってくれる人間がいるなんて思ってた。だから、本当に驚いた。

ぼーっと紙を眺めていると、腹が鳴った。生きている身体は腹が減るのだ。

「腹減ったなー。今何時だ？」

時計を見ると、もうすぐ5時になろうとしていた。

「朝なのか夕方なのかわかんねえし」

食べ物がないか部屋を見渡すが、栄養になりそうなものを腕に繋がる点滴くらいだ。

どっちにしろ5時であるなら、朝食か夕食まで我慢か、と溜息をつくと、廊下からバタバタと足音が聞こえた。

そして病室のドアが乱暴に開けられた。

「失礼しまーす！——って、うわ！起きてんじゃん！」

「シュウジ？！お前だったのか・・・じゃあ今は17時か」

それは同期で同い年のノース出身の少年だった。

シュウジは何度か夕食で食事の乗った盆を持ち、同じテーブルに来たり、二人一組の訓練で一緒にやろうと誘ってきたことがあった。

だがハルは自分に関わると不必要な暴力や嫌がらせ巻き込まれるからと、必要以上の付き合いを拒んできた。

「コレ、イワサキ少佐から預かった。」

シュウジは紙袋を手渡した。開けて見ると、フランスパンのサンド

ウィッチが二個、入っていた。

ハルは二個とも取り出して一つをシュウジに渡した。

「一個ずつな」

フランスパンを食べながら、シュウジは事故からのいきさつを簡単に話してくれた。

「ゴメンな。こんなデカイ事故が起こる前に、もっと力になれてたら」

ハルは一緒に夕食を食べた日などは、例の先輩グループからシュウジが嫌がらせを受けたりしたのを知っていた。

だからシュウジとの関わりを拒んできた。ハルが距離を置いてきたのに、シュウジの方が自分を責めてシュンとしている。

「でも、あいつら全員処分されて、もういねーよ。まあイワサキ少佐の力だけだな。オレなんも役に立ってねーけど。でもこれからはもっと頼らせてやるから、お前がウザいくらいにな」

そりゃウゼーよ、とか言ってやろうとしたのに、胸のあたりが詰まってうまく言葉に出来なかった。

窓の外を見るシュウジの横顔と茶色の短髪が、夕日に照らされて紅く染まっていた。

それからハルは義務付けられている三年の兵役期間の倍である六年間在籍し、シュウジと共に数々の輝かしい功績を挙げた。最終的にはイーストの人間では異例の中尉に抜擢されたが、その直後に退役を申し出て、二年間国中を放浪した後イーストに帰って行ったという。

「また、ここに帰ってきたんだなー・・・」

噴水はハルがノースを離れた八年の月日を経ても変わらずそこにあった。

噴水に手を伸ばし、太陽の熱でジリジリと焼けた肩や腕を冷やすと、殴られた腕を冷やした日が蘇る。

イーストに帰ってから、マキの家のパン屋の隣の歯医者が、ユイの家族である事に気が付いた。

（――早くあの寂しい人に、息子を逢わせなくちな）

思春期で兵役で、グラグラしていた時代に、支えられたあの家は今でもはつきり覚えている。

噴水の縁に両手をかけ、頭から水を浴びた。

すると、あの八年前の日と同じように、背中からハルを呼ぶ声が、聞こえてくるのだった。

第五話 旧友

「――なあ、コウ。いつまで拗ねてんの」

「・・・別に。フツーだよ」

コウは助手席っ胡座をかき、窓を開けてそっぽを向いている。

暗い空には雷鳴が轟きだした。

夏の風物詩だな、とハルが呟く。

「降り出さないうちに移動するか」

話は三時間前に遡る。

ハルは助手席にコウを乗せ、ユイの自宅へと向かっていた。ノースに来て偶然再開した時に今日の約束を取り付けたから、今は在宅の筈だった。

ユイの自宅は一人住まいには持て余す程の広さであった。

大きな外観に圧倒され緊張の面持ちのコウであったが、すぐに屋敷周囲の異変に気が付いた。

「なんかあったのかな」

好奇心旺盛な猫のようなクルクルした瞳で周辺を観察する。

たくさん衛兵が慌ただしく屋敷に出入りしていた。

「なんだありゃあ。もしかして・・・、コウ、ちょっとここで待ってろ」

ハルは何か察したのか、路地に入った目立たない場所に車を止め、一人で屋敷に向かった。

「・・・遅い。遅い。遅い！」

コウはイライラしながら車のハンドルに黒絹糸で結び目を連ねている。

集中力を高めたい時にいつも行っている縫合練習だ。

しかし今日はいくらやっても気分は落ち着かない。

「何やってんだろ。母さん、やっぱり会いたくないのかな」
車中に溜息が絶えない。

一方ハルはというと、堂々とした様子で玄関から入って行った。

「こんにちはー」

入るや否や両側から衛兵に腕を捕まれた。

「なんだよ。離せ」

「皆、離してやれ。ウチにいた、タカオカ元中尉だ」

エントランスから見える二階への階段からユイが降りてきた。

「大佐、何なんすかコレ」

「このところイーストの謀反が企てられているというハナシがあったな。私が昔、査察でイーストに訪れていた事実が疑われているようだ。イーストと繋がってるとか。その調査だ」と

コウを連れて来なくてよかった、とハルは自分の勘が当たったことを核心した。

「へえ。全くの濡れ衣じゃないですか」

「そうだろう。まあ気にするな、入れ」

そう言ってハルを連れて行ったのは私室ではなくキッチンだった。

「部屋でもガサガサとやってるんだ。悪いな」

「いえ大変っすね」

「全くだ」

これではオークション阻止の協力を仰ぐ所ではない。

それどころか一切の迷惑を掛けるわけにはいかない。

ましてやコウを会わせるなんてとんでもない。

（・・・出直すか）

「それじゃあまた来ますよ。忙しいとこ、すみませんでした」

「ああ、何のもてなしも出来なくてスマン。コレを持って行け」

「え?」

白い紙袋を渡された。すかさず近くにいた衛兵が中身を確認にき

たが、そこにはフランスパンのサンドウィッチと紙ナプキンが入っているのみであった。

「ありがとうございます。マジ嬉しい。大佐は変わらないですね」
ユイはニツと変わらない悪戯っ子の様な笑顔を見せた。

「お前はイイ男になったな」

そう言うハルの首に両腕を回して抱き着き、そして小声で囁いた。
(――コウに宜しく言ってくれ)

「だからコウくん？まだ拗ねてんの？話聞いてた？」

助手席でふて腐れてるコウを横目に隠れて溜息をつく、車を人がいない小さな公園へと走らせた。

「食べようぜ」

ハルは紙袋からサンドウィッチを取り出すと、一つをコウに手渡した。

ハルが懐かしい味にかぶりついていると、ふとコウには思い出の母の味が無いのだと気が付いた。

ちよつと可哀相になり、チラと顔色を伺うと頬にマヨネーズが付いていた。

「ほら、口の右んところに付いてる。紙あるからちよつと待て」

そう言うナプキンを取り出すために紙袋に手を入れたまま固まってしまった。

「ハルさん？」

「っ、あはは！やっぱりあの人には敵わねえな！コウ、見ろよ」

紙袋から紙ナプキンの束を取り出した。紙ナプキンだと思っていたそれは、紙ナプキンの間に挟まったたくさんの家族写真だった。

生まれたばかりのコウの写真から、家族全員の集合写真。幼いユキとコウが一緒に写っている写真も。

「軍に見つかって没収される前に俺らに託したってトコだな。大事にされてるじゃねーか、お前」

「こんな昔の写真まで・・・ボロボロじゃなか。母さん、オレらを忘れた訳じゃなかったんだ」

一枚一枚捲っていく。裏側にはどれも撮影した日付と一言が添えられていた。

十五年ぶりに触れた母の温もりに、涙がこぼれた。

格好がつかないと思い、涙を止めようと目じりを拭いても、あとからあとからあふれ出してくる。

泣き止むまで、ハルは黙ってコウの頭をクシャクシャと撫でていた。

公園の蛇口で濡らしたタオルで、コウが腫れた瞼を冷やしている。

その横でハルが徐に紙ナプキンを広げると、ユイの殴り書きに気が付いた。

「おっ、コウ、次の行き先が決まったみたいだ」

コウはタオルを外してハルの手にある紙ナプキンを覗き込んだ。

『今からシュウジに会いに行くといい。力になってくれる。それから陸軍のマツイ大佐には気をつけろよ。』

文字の横には手書きの汚い地図が添えられていた。

ドンドンと木製の重いドアをノックする。しばらく待ち、留守かと思ひ帰ろうかとした時、ドアが開けられた。

「はいはい。どなたですか」

よく日に焼け無駄な脂肪のない締まった身体の短髪の男は、気怠そうなくびをしながら出てきた。

「よ。久しぶり」

短髪の男は一気に目が覚めたかの様に目を見開くと、満面の笑みを浮かべ、ハルに飛び付いた。

「ハルー！？何年振りだよ！相変わらずデカイな！ちょっと痩せたか？」

「筋肉が落ちたんだよ。シュウジこそ相変わらずだな」

キャッキヤとハルに抱き付いてはしゃいでいたが、側にいたコウに気が付いた。

「ありゃ、そっちの青年は？」

「コイツはコウ。イワサキコウ。例の大佐の愛息子で、一応歯医者さん」

コウの代わりにハルが答えた。

「一応って！あ、は、はじめまして。イワサキコウです」

「おー、はじめまして。そうゆう事なら、早く中に入れよ」

二人はリビングに通されソファーに腰掛けると、奥からエプロンをつけた女性がコーヒーを運んできた。

「何、シュウジ結婚したのかよ」

「おう。娘もいるぞ。ミーちゃんこっちおいで」

入り口の所から覗いていたらしい女の子が走ってきて、シュウジの膝に座った。

「あ、ちようどよかった。ミーちゃんの歯って全体的に隙間あるんだけど、コレって問題ない？ちよっと見てくんねえ？」

ミーちゃんを膝に乗せ、縋る様な目でコウを見た。

「いいですよ。ミーちゃん、あーんして？・・・今いくつ？」

「たんたい」

「べーってして？」

「べー」

口腔内を一通り観察すると、ミーちゃんをシュウジの膝に戻した。

「どうだった？」

「隙間は乳歯の歯列弓として正常です。虫歯もないです。ただ・・・」

「ただ？」

「舌小帯強直症です」

「というと？」

「舌の下の小帯っていうところが強く引っ張られてるって事です。ちよっと舌っ足らずでしょ？今が発語の発達の時期だから、切った方

「がいいかもしれませんね」

「切る?! ミーちゃん、絶対暴れまわるぞ」

驚いたシュウジの肩をハルがポンと叩いた。

「俺が鎮静かけてやるよ」

そうして急遽、リビングで鎮静下舌小帯切除術が開始された。

30分後、無事終了し、ミーちゃんは寝室に寝かされた。

「ありがとな。ノースに歯医者っていないから、本当に助かったよ」

「いえ、役に立てて嬉しいです」

「治療費はどうしたらいい?」

「シュウジ、治療費は要らないから、頼みがあるんだ」

そうしてハルはホワイトドラゴン、コジュウロウの奪還とオークシヨンの阻止の企てについて説明した。

シュウジは目を丸くして話を聞いていたが、話が一段落つくと長い長い溜息をついた。

「・・・お前はまたそんな危ない橋を」

脱力して情けない顔をするシュウジに、ハルはウインクを飛ばす。

「シュウちゃん、お願い」

「で、俺は何をしたらいいの?」

「さすがシュウジ、話が早い。頼みたいのは爆破装置の調達と闇のパレスの見取り図の入手、あとは陸軍大佐のマツイの参加の有無を調べて欲しい」

「はいはい、任せなさいよ。三日あればなんとかなる。――けど、お前がノースに来たのは、その友達のドラゴンを助けるためじゃないだろ? 何をする気なんだ?」

「ちょっと本職の方でね。どうしても治したい難病の治療法探してるのよ」

コウにも初耳だった。そういえばハルの研究内容についても、前にはぐらかされたまま詳しく聞いていない。

「そっかあ、そっちじゃ俺は協力出来ないからなあ。ドラゴンの方は任せなさい。俺は十五歳の時から、これからは何があってもお前

に俺を頼らせてやる、味方になってやるって決めたんだからよ」

「頼もしいな」

ハルが十五歳の時、飛行訓練中に嵌められて墜落事故を起こした。ハルが意識を取り戻す三日間、シュウジは友人を守れなかった己を責めた。ハルにとっては、その後のシュウジとの信頼や友情を思うと、あの事故も悪くないなと思えるのだが。

「オークションの予定日が来週末だ。前日に出品される品物が闇のパレスに運ばれる所を狙って襲撃する。非合法の催しだから向こうも表沙汰にはしないだろう」

「だと良いけどな。油断するなよ」

「ああ。じゃあ三日後また来るから」

ハルが冷めたコーヒーを飲み干し立ち上がると、コウも慌てて立ち上がった。

「あつオレ、明日ミーちゃん診にきますんで」

シュウジと奥さんに見送られて、家を後にした。

「お帰りなさい」

玄関を開けると、首を長くして二人の帰りを待っていたフェイトが駆け寄ってきた。

家の中はカレーの匂いでいっぱいだ。

「コウくん、お母さんには会えましたか」

「あー、会えなかったんだけどね。もうダイジョーブ」

「え・・・」

「なんか、ちゃんと愛されてたみたい、オレ。今朝はありがと」
具体的な内容はわからなかったけど、フェイトは状況を察して安心した。

「あー、腹減ったー！メシメシ！」

照れた自分を見せたくなって、食卓に走って行ってしまった。
残されたハルとフェイトは顔を見合わせて笑い出した。

「まあそういうことだ」

「一安心ですね」

「ほんじゃ、メシ食って打ち合わせと行きますか。今日はカレー？」

「カエデさん特製夏野菜カレーです」

机にはカレーとレタスとミニトマトとゆで卵のサラダ。デザートはスイカだ。

流れているテレビでは、相変わらずイーストとノースの情勢悪化、各地の小規模の紛争が取り上げられている。

風鈴が涼やかな音色を奏でる。

平和な夏の夕暮れだった。

そして、決行の日を迎える――。

第六話 夜風

生暖かい夜風が肌をなぞって通り抜ける。

夜闇に紛れる為に全身を黒服で包んだコウは大きく深呼吸をした。

先ほど再確認したハルの計画をもう一度頭の中で繰り返す。

高まる鼓動が煩い。

（・・・ハルさんと違ってオレはこんな物騒なことしたことねーも
ん）

今度は深呼吸の代わりにため息が出た。

ハルやシュウジと違って細い腕。薄い胸板。

フェイトの様に魔術が使える訳でもない。

武術ではマキにも敵わないだろう。改めて自分が情けなくなった。

恐怖で震える下肢に叱咤し、闇のパレスの外接している非常階段の

三階部分から通りに目を光らせる。

世間は寝静まった無音の世界に、白色のバンが排気音を立てて侵入
してくる。

（来たっ！）

コウは手の中のスイッチをぎゅっと握りしめた。

一方ハルも長い溜息をついていた。

コウと同じく黒い衣服に身を包み、隣の建物の陰で二輪に跨りタバ
コを銜えている。

シュウジに頼んであった物資を取りに行った際に、陸軍マツイ大佐
が今回のオークション主催者であることを知った。

（あの汚ねえタヌキが。マジで腐ってんな、この国は）

裏社会で幅を利かせる権力者である。そして表舞台でも意のままに
連隊を動かす地位を持つ。

敵に回したら厄介であることは百も承知。

しかしそうでもしないとコジュウロウは救出できない。

万が一でも捕まるわけにはいかない。まして素性が知られるなんてとんでもない。そんなことになったら無関係の周囲の人間さえも報復の対象になるのは目に見えている。

この計画が理性的な行動と言い難いが他に方法がない分、仕方がない。

（くそ、何迷ってんだよ、俺は）

計画に抜かりはないはずだが、一抹の不安が消えてくれない。

そうしているうちに白色のバンが向かってきた。

黒いマントを頭から被ったフェイトは、隣接した建物の屋上にいた。ハルからは必要最低限の魔術しか使用を許可されていない。

とにかく素性を知られてはいけないのだ。

ただ、三回。失敗してはいけない瞬間が、来る。

（集中しなくては）

ここまで何も役に立てなかった。救出の本番でも力になれることがほとんどない。

（風の神よ。コジュウロウと、二人の友をお守りください）

夜風がフェイトを取り巻く。

白色のバンが視界に入るのを合図に、両手で印を結び、異国の言葉を唱え始める。

バンがスピードを落とし、闇のパレスの表門に差しかかった時点が開始合図だった。

コウが手元のスイッチを押すと手前の門柱に仕掛けられた爆破装置が起爆した。バンはブレーキを踏み操作性を失って奥の門柱に突っ込んでいき、ぶつかる寸前でこちらの門柱も同様に起爆し吹き飛んだ。

爆破自体は小規模なものであったが、爆風でバンが横転するには十分な威力である。

「よっしゃ、オレ才能あるかも！次はフェイトか、うまくやれよ・・・」

ガッツポーズを決めて、予定通り非常階段を駆け上がった。

バンが横転した衝撃にあわせ、魔術を始動させた。

魔術と言えど徹底的に自然を装い、爆風に合わせてトランクを開放させ積まれていたたくさんの箱や布に包まれた物品を道路中に散乱させた。

それは明日のオークションに出品される品々であった。ハルの下調べ通りである。

二回目の魔術は、どの箱にコジュウロウが入っているかを予想し、傷つけないように箱を壊し、尚且つコジュウロウ自ら壊して脱出した風を装わなければならない。

箱にはコジュウロウの目印はない。フェイトは集中力を最大限に高め、箱の中のコジュウロウの翼の羽ばたきを感じる。

迷いはなかった。衝撃と同時にコジュウロウが飛び出してくる。

三回目の魔術は、コジュウロウを大空へ飛翔させること。まだ幼く、長期に閉じ込められて衰弱しているコジュウロウの跳躍を可能な限り助け、非常階段上のコウの方角に向かって飛ばす。

（よし、二人ともよくやった！あとはコジュウロウを追わせないように足止めするだけだ）

二輪で通行人を装いバンの傍に停車させる。

「どうしましたー？大丈夫ですかー？」

ハルがバンの運転席を覗き込もうとすると、横転したバンの上側の助手席より黒スーツの男が降り立つや否や拳銃を構えコジュウロウの翼を的確に打ち抜いた。

「！！」

三人が息を呑んだ。

右の翼から血を流しパニックに陥ったコジュウロウを、フェイトは五階の非常階段の踊り場に降ろすのが精いっぱいだった。

「何を・・・！アンタ、まさか・・・」

ハルが銃を持った男を直視して氷ついた。短く切りそろえ撫でつけられた黒髪の初老の男。年の割に非常に筋肉質であった。

「マツイ・・・大・佐・・・」

初老の男はハルを一瞥すると、運転席側で伸びている若い男の胸倉を無理やり掴み後頭部を窓に叩きつけた。

「起きろ。後を追え」

無機質な声で命令し、意識を取り戻した若い男はすぐさま非常階段へと走った。

（・・・マズイな。こんな大物が出てくるとは想定外だ）

平静を装って、マツイに向き合った。

「お前は私を知っているのか」

「ええ。自分は昔、空軍に所属していたタカオカと言います。もう退役しましたが、当時は中尉でした。大佐の事は勿論よく存じております」

それは事実だった。そして第一発見者の通行人を装い、必要があれば名乗り出ることも計画の内だ。

「それよりこの騒ぎはどうされたんですか。爆発音が聞こえました。一応周辺住民を起こして人を集めるようにさせました」

相手にとって立场上騒ぎになることが最も不都合であることは分かっていた。そして地面に散らばった非法法の商品の数々。

そんな状況が最悪の中、平然としているばかりか、気味悪く笑い出した。

「何が目的か知らんが、なんと好都合な事をしてくれた。誰でもいいのだよ、騒ぎの首謀者なんて」

「なっ・・・」

ハルは底知れぬ悪い予感がしたが、今確かめる術はない。

「さあ、こっちはそろそろ閉幕でしょう。オトモダチは生きて出ら

れるかな。この、深い闇から」

ハルが集めた野次馬よりも一足早く、マツイの息のかかった衛兵らが現場を取り囲んでしまった。

ハルは建物内に入るどころか、この場に留まる事さえ困難となった。

（落ち合う場所は・・・あの、河原）

コウはきつと上手くやる。フェイトも力を貸すだろう。

仲間を信じようと決意し、ハルは二輪で闇のパレスを後にした。

コウは一旦屋上に上がり、コジュウロウを待っていたが、銃弾を受けた所を目撃して急いで五階の非常階段に駆け付けた。

「ひでえ・・・なんてことしやがる」

コウは来ていたシャツを破いて、銃創を縛り止血を施した。

「なんつー射撃の腕だよ。動脈外れたのがまだ幸いか」

コジュウロウはパニックのまま、コウの腕のなかで暴れる。

「コラ、動くなって！出血するだろ！」

そしてタイミング悪く、非常階段を上ってくる足音が響いてきた。

「マジかよ！ハルさん足止め失敗してんじゃん」

暴れるコジュウロウを抱えて階段を上りきり、屋上にたどり着く。

「あとはアレで逃げれば勝ちだ！！」

コウは隣の建物とを繋ぐ渡り廊下へと一目散に駆けた。屋上同士をつなぐ通路にはドアが二つ取り付けられている。予めハルがカギを開けておいている段取りだ。

そちらの屋上には暗くて良く見えないが、フェイトが控えている筈だ。

「コジュウロウ、落ち着けて！オレは味方だから！・・・アレ？」

コウがドアノブを回すが、一向に開く気配がない。押しても引いてもびくともしなかった。

「ええ?! 開かねえんだけど！オイー！」

「そこまでだ。ガキが」

コウが気が付かないうちに、すぐ後ろまで人影が迫っていた。

振り返りコジュウロウを抱えて後ずさったが、すぐ後ろにドアがあり逃げ場がなかった。

「そいつを渡してもらおう」

「んな訳いくかよ」

（・・・って言っても、どうやって逃がしたらいいんだ。せめてコジュウロウだけでも）

男はジリジリと間合いを詰めてくる。

（どうしたらっ・・・）

「抵抗するなよ。こっちにはコレがあるんだ」

男は懷から銃を取り出し、コウに向けた。

「そんなの使って、こいつに当たったらどうすんだよ。大事な商品なんだろう」

コジュウロウを盾にする気はないが、希少価値を逆手に取ろうとした。

「ただの商品だよ。さあ、早く・・・」

男に怯む様子は見られなかった。

もう一步近づいた瞬間、コウは重心を低くして脇をすり抜け走った。それと同時に銃声が轟いた。

左腕から血を流したコウが、屋上の冷たい床に倒れこんだ。

コジュウロウの鳴き声が響き渡る。

「わかったか！逆らうところなるんだよ！次は何処を撃たれたいんだ？！」

ますますパニックになり暴れるコジュウロウの元に、美しい光が接近した。一瞬月が空から降りて来たのかと思った。

月と見紛うそれは、月の光を浴びたマサムネであった。

「マサムネ！早くコジュウロウを連れて逃げろ！」

その声に反応し、マサムネは怪我を負った翼を庇うように支え、二匹が一体となり、夜空へ飛んだ。

「――どう責任とってくれるんだ、クソガキが！」

男はそう叫ぶとコウに馬乗りになり、殴りかかった。

（顔を見られる訳にはいかない・・・！）

必死に受け身を取るが、みぞおちを強く殴られ一瞬息がとまった。激しくせき込むコウを更に蹴る。

「やられっぱなしじゃカッコ悪くて帰れねえよ！」

叫んでコウは倒れた体勢のまま、男の脛を思いっきり蹴った。

衝撃でうずくまっている隙に男から逃げ、屋上の柵のない片隅にまで走った。

今いる場所は九階に位置している。普通に飛び降りて無事に済む高さではない。

ここからは隣の建物がよく見えるが距離は5メートルはあり、飛ぶのも不可能だ。それに隣に逃げたところで、屋上にいるはずのフェイトに危険が及ぶのは避けなくてはいけない。

（オレがもつと強ければ）

その時、目を凝らすと隣の建物に人影が見えた。

夜目が利くフェイトからはコウの姿はもう少しははっきり見えていたが、コウからは人物まで判別はつかない。

脛を強打され、しゃがみ込んでいた男が立ち上がる。

コウはフェイトであるだろう人物に、両手で手を振るとジェスチャーで下を指差した。

その瞬間、再び銃声が鳴る。

コウが屋上より落下した。

いつもの河原に、いつもの夜明けがやってきた。

河原に座り、たくさんの吸い殻を散らかしているハルの姿があった。座るハルの上に人影が落ちて来た。

「コウ・・・！」

振り返るハルの瞳に写るのは、パジャマ姿のカエデの姿だった。

「・・・なんだ」

「ハル、家に入ろう？そんな格好じゃ身体冷えるよ」

ハルは黙ったまま動かない。

コウ、フェイトと落ち合うはずの河原には、一晩待っても二人は現れなかった。

カエデは何も事情は聞かされていなかったが、何かを察したのか、何も聞かなかった。

「ハル・・・」

「もう少し、ここに居させてくれ」

ポケットから煙草を取り出し、おもむろに火をつける。

「わかった。ご飯作って待ってるね」

カエデはそう言うと言と家へ戻って行った。

こんなに不味いタバコは久しぶりだった。初めて吸った十五の時を思い出した。アレもクソ不味いタバコだった。あの時は自分の身を守る事ができなかった。今度は自分の身を守るのに精一杯で、守るべきものを守れなかった。

ハルはそのまま後ろに倒れこみ、河原に背中を預けた。

（・・・早く帰ってこいよ）

第七話 絆

どこまでも続く暗闇だった。

銃を持った男に追いかけられ、必死に逃げるがいくら走っても脚が少し前へ進まない。

次第に脚が縛れ、前のめりに倒れた。男が追いつき、銃口を向ける。撃たれたと思った瞬間、双眸には自分を庇ったハルが胸から血を流しているのが映る。

茫然自失となるコウの前でフェイトもマサムネもコジユウロウも、次々に撃たれていく。

そしてユキも・・・。

また、大事な人を守れなかった。

「――っ、うわぁっ」

「コウくん！そんな急に落ちたらダメですよ」
大きく肩で息をする。

「ゆ、夢？オレ生きてんの？」

「ギリギリ、生きてますよ」

枕元でフェイトが困った様に笑う。

「そうだ、オレ。撃たれて屋上から落下して・・・」

だんだんと記憶が鮮明になってきた。

「そうですよ。コウくん、私に合図してそのまま屋上から飛び降りたじゃないですか」

勿論そのような事態は想定外であり、コウの咄嗟のカケだ。

コウは飛び降りる自分を風の魔術で支えろと言わんばかりに、迷いもなくダイブしてしまったのだ。

「あんな事したの、初めてなんですよ。もし出来なかったら、失敗したら、コウくんはどうなってたか分からないですよ！」

フェイトがちよっと怒ってみせると、コウはさざりと言ってみせた。

「だって信じてたよ。実際助けてくれたじゃん」

実際、本当にギリギリだった。魔術の発動が一瞬遅れ、落下速度が加速した。空気の壁を作ってしまった場合、コウが衝突し無事ではすまない。しかし少なすぎる空気抵抗では、そのまま地面に叩きつけられてしまう。奇跡的な絶妙な力加減を要した。

「あー・・・イテテ。アイツ、マジでむちゃくちゃ殴りやがって。鉄砲もちよっと当たったし」

そう言って撃たれた左腕を触ると、包帯が巻かれていることに気が付いた。そして、自分は見覚えのないベッドで寝ている事に、今更ながら気が付いた。

「あれ、そういや、ここどこ？」

キョトンとするコウを見て、フェイトが笑い出した。

「本当に覚えてないんですか？コウくんが落ちた道路に、軍人とか野次馬とか一杯いたんですけど、助けてくれたんですよ」

「え、誰が？」

「コウくんの患者さん達です。事情はわかんないけど、今度は自分たちが力になりますって。それであの場所から脱出出来たんですよ、コウくん怪我してましたし、ハルさんと約束した河原まで行けそうになくて。自分からここから近いから連れて行けって言ったんですよ」

「どこに？」

そのとき、部屋の入口がボタンと開けられた。

「ウチに決まってんだろ！ほら、スープ飲めるか？」

暖かいコンソメスープを持って入ってきたのは、ハルの友人であり今回の作戦に協力してくれたシュウジであった。

「シュウジさん！すみません、オレ・・・」

「いいって。怪我也大したことない」

そこに娘のミーちゃんと一緒に、マサムネとコジユウロウが入ってきた。

「無事だったんだ！よかった・・・そう言えばハルさんは？」

「ハルさんは、一緒じゃないです。おそらく先に河原に着いてると思います」

「先につて・・・今何時!？」

時計を見ると昼の十二時半を少しまわった所である。

「マズイよー! フェイト早く行こう!」

本来、遅くても夜明け前には合流している予定だった。

「シュウジさん、ホントに有難うございました。またお礼は改めてお邪魔しますんで、帰ります! 急ですみません!」

「おー、期待してるわ。気をつけてな、ハルによろしく」

傷が痛かったが、構ってられず急いで帰り支度をした。

「じゃあミーちゃん、またね!」

「まーたーねっ」

玄関で見送りをしてくれるシュウジ一家を振り返り、コウは大きく手を振った。

一方ハルは河原で何本目かわからないタバコに火をつけた。

「アイツら、何処で何してんのよ」

頭を掻きむしると、ふと自分の周囲に投げ捨てた沢山の吸い殻が目にとまった。

「――コレは医療人として終わってるよな」

こんな神にも縋りたい時にバチあたりな事をしている自分に気が付き、渋々拾い始める。

照り付ける日差しが暑い。

「アチイんだよ。雨でも降れっての」

そう呟いているとハルの上に影が落ちてきた。曇ったかと空を仰ぐと、視界いっぱいに見慣れた顔が二つ飛び込んできた。

「何こんな所でゴミ拾いしてんの?」

「ハルさん、お待たせしました」

そこにはマサムネとコジウロウを連れ、目に隈を作ったフェイト

と、かたや顔色はすこぶる良いが傷だらけでボロボロのコウが並んで笑っていた。

「・・・おせーよ」

コウがくしゃつと笑って、犬のようにハルにじゃれついた。

「ハルさん！ずっと待っててくれたの？」

「すごい限ですよ」

「お前もだよ！」

ハルはホッとしたのと嬉しいのと何か悔しいので、そっぽを向いた。それでもコウもフェイトも嬉しくてハルに纏わりつく。

「ハルさーん」

「ハルさん」

マサムネもコウもハルの肩やら頭やらに登る。

「うるせーよ！帰るぞ」

ハルは立ちあがって、カエデの家を目指した。律義に吸い殻も持ち帰って。

「マジでー?!」

コウが声を張り上げた。

三人はカエデ宅に戻り、少し遅い昼食を取ったあと、ハルがコウの腕とコジウロウの翼の治療を行っている。

今回の一件に深く関わっているマツイ大佐の話よりもコウが激しく衝撃を受けている事実があった。

「じゃあ、あの扉はハルさんがカギを開け忘れたんじゃないかって、スライド式のドアだったってこと?!」

「当たり前だ。そんなミスをするか」

「じゃあ押しても引いても開かないわけじゃん！スライド出来なくて死んでたら、オレ浮かばれねー！」

「むちゃくちゃしやがって。本当に死んでたらどうするんだ」

そう言ってハルはコウの腕の消毒を始める。幸いにも掠った程度で、

重要な神経血管組織の損傷はなかった。すでに止血もしている。

「いだだだだ！もっと優しくしてよ」

「命知らずにはこれぐらいやらんとわからん」

「・・・ハルさん、怒ってる？」

「ちょっとな」

「ゴメン、心配かけた。反省してる」

ん、と頷くと、コウの腕の治療を続けた。

「だけどオレ、完全にキャパオーバーだった。弱っちい。もっと強くなりたいよ」

「強くなったよ、今回でな。人間ってな、キャパシティー内で頑張ったって成長しねえんだよ。キャパ越えて初めて小さい自分が見えるんだ」

「・・・ハルさんってイイ男だよな」

「まあな。ほら、治療終わり！」

コウの治療を終え、続いてコジュウロウの傷跡を診た。すると驚くべきことに、創部は既に塞がりかけていた。止血のために縛ったコウのシャツにはおびただしい血液が付着していたのに反して。

「すごい再生力だな。血液を詳しく調べてみてえな」

「またハルさんの研究？400年前の？」

「まあな。なあフェイト、コイツの採血・・・」

ハルがフェイトを振り返ると、フェイトは本棚に頭を預けて気持ち良さそうに寝息をたてていた。コウが申し訳なさそうに頭をポリポリと掻く。

「昨日、多分寝ずにオレに付いててくれたんだ」

「コジュウロウも戻って来て安心したんだろ。寝かせてやろう」
そう言ってハルはフェイトをひよいと担いでベッドに運んでやった。布団を肩まで掛けてやると、絨毯に腰を下ろし、ベッドに背中を預けた。すると頭の上に枕とタオルケットが降ってきた。

「ハルさんも寝なよ。オレいるから」

「俺は別に・・・」

言いかけて、コウの真剣な表情を見て続く言葉を飲み込んだ。

「――夕飯には起こせよ。明日にはノースを発つから、やり残しが無いようにしとけ」

ぶっきらぼうに言うのと、背を向けタオルケットを頭から被った。

「おやすみ」

コウは静かに部屋をあとにした。

日差しがまだまだ厳しい昼下がり、コウは車で出掛けることにした。まず訪れたのは、ノースで診察を行った家、一軒一軒だった。コジユウロウ救出計画の前に、全ての治療を一段落させてはいたが、今を逃したら次はいつ診察出来るかわからない。

主治医として非常に無責任だというのは解っている。ただ願わくば、都市間のいざこざなど無くなって、皆が自由に十分な医療を受けられる日が来ることを。

そんな思いを込めて、最後の診察をしてまわった。

闇のパレスの屋上から落ちたあの時、自分を助けてくれた人達へのお礼も兼ねて。

診察が終わったあとは、三時間程前に世話になった家の戸をノックした。

「コウ！どした？もう大丈夫なのか？」

「シュウジさん、その、いろいろありがとうございます」

伝えたい感謝の気持ちが沢山あって、上手く伝えられない。

「もう、出発するの？」

「はい、明日には」

そっか、とシュウジは少し寂しそうに笑った。

「ハルってな、人を頼るとか甘えるとか、すっげえ苦手なんだよ。

本当は求めてるのに。だからコウ、助けてやってな。俺はいつでもお前らの力になるから」

「オレじゃ役不足かもしれないけど、頑張ります。」
強くなろうと決めたから。ハルに頼られるくらいに。

「あっ、あとコレを・・・」

コウがカバンをガサガサと漁った。自分なりにシュウジに出来る恩返しを考えたのだった。カバンから取り出したのは一本のチューブだ。

「フッ素ジェルです。ミーちゃんの歯磨きの後に使ってください。歯を丈夫にしますよ。オレのお勧めのバナナ味です」

シュウジのよく日に焼けた顔がくしゃっと笑った。

「ありがとな！お前がハルの傍に居てくれたら安心だよ」

フッ素ジェルが無くなる頃にまた来ますと告げ、シュウジの家を後にした。

あと一カ所。

来るかどうかとても迷った場所があった。

どのみち、もうすぐ夕食時なので余り時間がない。

そこは、前回訪れた際は沢山の衛兵と物々しい雰囲気でも近寄れなかった、母、ユイの自宅だった。

この間程ではないものの、今も二人の衛兵が玄関に待機しており、訪問は叶わなかった。

近くに車を止め、仕方なく家の周囲を歩いた。

玄関と反対側に位置する二階の窓が開いているのが目についた。

（母さん、いるのかな）

ドラマの様に窓に小石を投げてみようか。でも中にも衛兵がいたら。母がいても自分がわからなかったら。迷惑だったら。

いざとなると、また思考がぐるぐると交錯してしまう。

諦めて帰ろうかと踵を帰した時、抑えた声で自分を呼ぶ懐かしい声が降ってきた。

「母・・・さん・・・」

見上げると、何年も思い描いていた母の姿が変わらずそこにあった。

しかし明るく気丈な筈の母の顔は、涙でぐしゃぐしゃになっていた。
「コウ・・・」

お互い伝えたい事は沢山あるのに、長い時間を埋める言葉が見つからない。

時間もなかった。衛兵達に見つかれば非常に厄介な事になる。

コウは満足だった。母が元気で、自分の名を読んでもくれた。

（生きてたら、また会えるよ）

コウは踵を返して歩き始めた。

そして一番止まると、振り返り、全開の笑顔と両手でVサインを送った。

ユイは瞳に溜めた涙をこぼすと、抑えた声だがはっきりと、伝えた。
——コウ、愛してる。

「ただいまー」

コウは家の外にまで夕食のいい匂いが漂うカエデ宅に帰ってきた。

「コウくんお帰りなさい。ハルとフェイトを起こしてきてくれる？」

ゴハンにしましょ」

「はい！」

階段を登って戸を開けると、既にハルとフェイトは起きており、何やら楽しそうに話をしていた。

「お帰り。その顔は、いい事あったな」

「まあね」

ハルは柔らかい表情で目を細めて笑った。

「本当にハルさんはコウくんが大事ですね」

「え？」

「オイ、フェイト！」

「なになに！？」

「コウくん、後で話してあげますよ」

「オイコラ！余計な事言うんじゃないねえ」

じゃれあっていると、階下からカエデの声が家に響く。

「スーッ冷めるわよー!」

三人は顔を見合わせ、声を揃えて返事をした。

「はーいっ」

こうしてノースでの最後の夜が更けていった。

この時は誰も、悲しいこの国の歴史と、待ち受けている残酷なこの国の行方を知る由もなかった。

外伝二 夕日

まどろんでいた意識が一気に現実へと引き戻されたのは、顔の上で激しく暴れるソレのせいだった。

「マサムネ！駄目ですよ、寝てる人の上に乗ったら」

薄く開かれたハルの双眸に飛び込んで来たのは、己を踏み付けているホワイトドラゴン達だった。

「あ・・・起こしちゃいました？」

「寝てられるかよ」

気怠そうに頭を掻きながら身体を起こす。

「どれくらい、コイツに乗ってた？」

「んー・・・十分くらいですかねえ？」

「マジでか」

脱力感を覚える。そもそも人前で熟睡とか、どれくらい振りだろうか。こんな短期間にすっかり気を許してしまったようだ。ハルはいつも他人との間に壁を作って接してきた筈の、自分自身の変化に驚いた。

「マサムネ、コジュウロウ。お前らのご主人様、少し借りるぞ」

「え？どこか行くんですか？」

予想外の流れに戸惑うフェイトにお構いなしに、ハルはニツと笑って立ち上がった。

「ノース観光に連れてってやるよ」

コジュウロウの救出に辛くも成功した今はノースに長居は無用だった。明日には発った方がいい。しかしその前に、フェイトにノースの美しい一面も見せてやりたかった。

二人乗りの二輪がノースの石畳を駆け抜ける。

ハンドルを操るのはタンクトップにデニムといった身なりで、サングラスを掛けたハルだ。ノースに来てから日中はずっと二輪に乗っていたため、ハルはフェイトと変わらないほどよく焼けた肌になっていた。

少し伸びた襟足が風になびいて、ワイルドな雰囲気醸し出している。

「ハルさーん！」

「なんだ？」

早い速度とガタつく道の振動で会話はしにくいだが、それでもフェイトは沢山話しかけた。

「ハルさんの肌の色、私より黒いですね」

「だろ？そしたらお前、あんまり目立たずに済むからな」

フェイトは目を丸くさせ、ハルさんには叶わないやと言って笑い出した。

ハルはよく笑うようになった。これが彼本来の姿なのであろう。

風に煽られ途切れ途切れになる会話を一時間程度続けている間に、ハルはノースの東に位置する人気の無い小高い丘の上までバイクを走らせた。

「見ろよ。スゲーだろ」

まさに見渡す街全体が紅く染まり、太陽のパレスに向かい日が沈まんとする瞬間であった。

赤い屋根も白い壁も緑の草木も透明な河も、全てが深紅に姿を変えた。

「綺麗ですね」

「そうか？俺が初めてコレを見た時は、あのまま太陽がパレスに突っ込んで街ごと爆発してしまえって思ったけどな」

ハルは十五歳の自分を思い、笑った。

今は素直に美しいと思える。

「綺麗って思えるのはココロが健康なんだと。コレはコウの母親の

受け売り」

沈みゆく夕日を眺めながら、ハルはずっと気になっていた事を口にした。

「なあ、お前、どうやってノースに来たんだ？」

その問い掛けにフェイトが一瞬息を飲んだのがわかった。

「・・・マサムネ達の母親のドラゴンに乗せてもらいました。彼女もマサムネ達を助けたかったんでしょ」

「――じゃあ、どうやって帰るつもりだった？」

ハルの表情が厳しくなる。

「それは・・・」

「無事に帰れるつもりじゃなかった、だろ」

ハルが一層厳しい顔つきになり、フェイトは黙って俯いてしまった。長い沈黙を破ったのは、ハルの溜め息だった。

「・・・ああ、もう。無限に広がる明るい未来を持った若者の考える事か？」

「元々私たちは短命ですし、それなら長寿であるドラゴンを救いたかったんです。私にはもう親はいないし、結婚もしていないから守るべき家族もいない」

「・・・前に妹がいるって言ってただろ」

確か以前、マサムネの主がフェイトで、コジュウロウの主が妹だと言ってたのを思い出した。

「あの子は大丈夫です。もう自立もしているし、それにウエストでは少し特別な存在なんです」

「特別って？」

「生まれながらに光と闇の両方の属性を持っていたんです。光や闇の属性自体も珍しい上に、二つの属性を同時に持つことは不可能だと言われきたので、妹はウエストで最も神に近い人だと崇められています」

フェイトがそこまで話すと、ハルは草むらに腰を下ろしてフェイトに背を向けた。

「命を大事にしろとか、お前がもし死んだりしたら悲しむ人があるだろ、とか、そんなくだらない事を言うつもりはねえよ」

「ハルさん・・・」

「俺が嫌なんだよ。お前に死なれたり、死ぬ覚悟なんか持たれたりしたら。コウも嫌がる。それは覚えておいてくれ」

「・・・ありがとうございます」

胸の内が熱くなった。何年振りにこんな感情を持ったのだろうか、とフェイトは思う。命を粗末にしてはいけませんと徳の高い偉人から何千何万回言われるよりも、自分が嫌だから死なないでくれと懇願される方が、ガツンと殴られた様にダイレクトに胸に響いてくる。

ハルはそれ以上は言わなかった。立ち上がり、裾に付いた草を払う。
「よし、帰るか。夕飯の時間だ」

「はい」

二人は再びバイクに跨がると、夕日の街を走り抜けた。

帰り道は言葉を交わすことなく、フェイトはハルの背中に頭を預け揺られていた。

“ 私たちを、助けてくれてありがとうございます ” と一言だけ言う
と、ハルはいつもの調子で “ ん ” とだけ返した。

すっかり日が沈んだ頃、二人はいつもの見慣れた薬屋に帰ってきた。
フェイトが家の周りを見渡し、訪問診療車が戻ってないことに気が付いた。

「コウくん、まだ帰ってないですね」

「バカだけど一応いい大人だからな、大丈夫だろ」

二人が部屋に戻ると、マサムネとコジウロウが飛び付いてきた。
ひとしきり構ってやった後、今度はフェイトがハルに切り出した。

「ハルさんがイーストから来たのは、研究のためにウエストに行きたかったからでしたよね」

「ああ。よく覚えてるな」

「じゃあ何でコウくんを連れて来たんですか」

「あー・・それな。まあ、アイツを母親に会わせてやりたいってのが一番かな。あとは、コウの目で世界を見たらどんな風に写るのか知りたかった」

「世界ですか？」

話が漠然とし過ぎて理解が出来ず、フェイトは詳しく説明を求めた。「コウはガキの頃から知ってるけど、いい大人になって先生って言われる様になっても、ガキでバカで涙もろくて純粋なんだよな。でも母親の事があって、他人や世界に対して臆病なところがあるから、だから外に出して凄いいもんを色々見せたいんだよ」

「コウくんが大事なんですね」

「俺が国を放浪してた時は、すっかり捻くれたガキだったからな」ハルは六年間の兵役の後、二年程医学を学びながら国中を旅した。その日の寝食にも困ったり、悪人に騙されたり、暴漢に襲われかけたり、苦労は数えきれぬ程であったが、カエデを初めとするかけがえのない人々との出会いや出来事は数々の苦難を差し引いても十分余りある程であった。

「まあ、やっとイースト戻って来てみりゃ、コウは思春期で俺にどう接すりゃいいかわからん感じで敬語とか使い始めるし。俺をフランスパン好きにした幼なじみは兵役に行っちゃって聞くし」世の中上手くいかねえなと笑って見せた。

「私も、ハルさん達に会えたことを思うと、決死の覚悟でノースに來たのも悪くないですね」

「ばーか、それでも危ないことはするなよ。長寿でも短命でも人生は一回だ」

ハルがそこまで言うと、ふと真顔になって口を開いた。

「そういえば、短命って実際のどのくらいなんだ？」

フェイトは外見は二十歳前後に見える。十歳で成人となると、自分の半分の半分だから・・・と考え込むハルを見て、フェイトは笑い出した。

「ナイショにしときます。残りを数えだしたら人生つまんなくななり

ますから」

つられてハルも笑う。

「確かに。コウが昔、”平均寿命って言葉は変だよ”って言ったことがあるわ。”その人には一個しかない人生なのに、平均出しでも意味ねーじゃん”って。コウらしいよな」

「そうですね。――あ、帰ってきました?」

家の一階から、勢いよく戸を開け閉めする音と、ただいまの挨拶が家に響く。

「あの声の調子じゃ、なんかいい一日だったみたいだな」

ハルとフェイトは再び顔を見合わせて笑った。

こうして、ノースに来て一番平和な一日は、それぞれの胸にどこか忘れられない暖かな記憶となり、夕食のいい匂いと共に幕を降ろしていった。

第八話 深い森

ノースがイーストとを繋ぐ道を荒野と表現すると、ウエストを繋ぐのは言うなれば深い森だ。

ノースを出発し周囲が林と呼べたのも束の間、半日も走ればジャングルと見間違えう程の壮観な光景である。

原生林の鬱蒼たる様、広く静観な湖、蛇行した激流の河川など様々な要因によって、イーストの様に列車での交通網は整備されていない。かろうじて車一台が通行可能な程度に切り開いた足場の悪い道が続いているのみである。

強い日差しが恋しくなつて三日、車酔いにも慣れた頃、比較的川幅の広く穏やかな小川にたどり着いた。

「泳ごうよ！マサムネ、コジュウロウ、行こう！」

真っ先に車から飛び出したのは、三日間ハンドルを握りっぱなしであつたコウだった。

ハルは反対しようにも車を停車させてしまわれては仕方がない。それに三人と二匹がノースを出発してから、宿泊場所どころか民家一つなかったため、確かに水に入りたい気持ちはあつた。悩む間もなくコウは既に服を脱ぎ捨て水の中、それを見てハルはフェイトを車外へ促した。

「しょうがねえな。フェイト、行くか」

実際の所、この暑い夏に三日も身体を洗わないのは耐え難い。運動部の部室みたい、とコウがぼやいていたのも納得いく。

「オイ、コウ！てめえ何水かけてんだよ」

「ハルさん、汗臭いからねー。キレイにしとかなきゃ」

「お前なあ・・・」

少し足を浸す程度にしようと、裾を膝まで捲り上げただけのハルは、コウによって頭からずぶ濡れになっていた。

フェイトも裾を捲り上げて川の中ほどにある石に腰かけていたが、二人の巻き添えを喰ってかなりの水浸しだ。

「フェイト、笑ってないで応戦しろよ！」

腹を抱えて大笑いしていたフェイトは、じゃあ、と言うと左手を手首まで浸し、右手の人差指で空を切り、印を結んだ。

すると穏やかだった川の流れが左手を中心に急に渦を巻き、空中に跳ね上がるとコウとハルの頭から水を注いだ。

「・・・お前なあ」

ハルは拳を握りしめプルプルと震える。逆にコウは心底楽しそうにフェイトの元に走ってきた。

「すげーよソレ！今のは水の魔術なの？」

「いいえ、風ですよ。ていうか風しか操れないです。風で水を巻きこんだけです」

えへへと照れ笑いをしてコウとはしゃいでいると、コウもフェイトもハルの両手によって水に沈められたのだった。

ひとしきり汗を流すとハルとフェイトは先にあがり、タオルで身体を拭いた。

コウは、もう少しと言いマサムネ達を洗ってやっている。すると木々が今までになかったように音を立ててなびきだした。

「何か来ます！」

「え？」

コウが音がした方を振り返ると、深い森の中からプテラノドンを彷彿させる2メートルはあるであろう翼を持った生き物がコウに向かって飛び出してきた。

「うわあっ」

咄嗟だった。近くにいたマサムネ達を両手で庇い身を低くしたが、プテラノドンの爪がコウの背中をかすっていった。

「コウくん！」

プテラノドンは一旦通り過ぎると再びコウを目掛けて飛んできた。コウは両手の中にマサムネ達を庇っており、逃げる事が叶わない。

「コウ、屈め！」

ハルが車の助手席に積んでいた、護身用にとノースで入手した剣を手にし、プテラノドンの爪を受け止めた。

「ハルさん、そのままです！」

右手で印を結んだフェイトが、魔術で作られた風の縄でプテラノドンを縛り上げた。

フェイトはプテラノドンに近づき、睨みつける。

「私たちはお前のテリトリーを侵していない。それにこの人はお前が傷つけていい人じゃない」

フェイトが凄むと、興奮状態であったプテラノドンが途端におとなしくなった。

「次にこんな事をしたら、晩御飯のオカズにしますよ」

ニッコリ笑ってプテラノドンを解放してやると、怯えよろめきながら飛び去って行った。

「コウくん、大丈夫ですか」

コウにフェイトが駆け寄ると、呆気に取られていたハルが剣を降ろし、笑いながらつぶやいた。

「・・・お前、こえーよ」

コウとハルは、怒らせたら怖いのが誰なのか心底思い知った。

川べりに座り、コウの背中 of 傷を見ると、傷自体は浅く大事には至っていなかった。フェイトが傷を負ったコウの背中に左手を当て右手で印を結ぶと、滲んでいた血が止まり赤みが見る見る引いてくるのがわかる。

「すげえな。これも風の魔術か？」

「そうですよ。風でヴェールを作るイメージってところです」

「痛みが取れて来た。すごいね。フェイト疲れない？」

「これくらいなら大丈夫です。少しくらい恩返ししなきゃ」

フェイトが嬉しそうに魔術を使う。傷口はもうほとんど塞がりかけている。

「こんな治療法があるんだね。ハルさんが研究してる400年前の禁忌の医療も、こんなすごい治療なの？」

虚を突かれたハルが一瞬躊躇したのをコウが察し、気まずそうにした。それを見てハルは何だか隠し通すのも妙な気分となってきた。

「いいか、それを聞くことは、禁忌の研究に関わるってことだぞ。前みたいに学長に脅されたり、知らん奴に狙われたりすることもある。それでも聞きたいか？」

どうせはぐらかされて終わると思っていたコウは、意外な答えに驚いたが迷いはなかった。

「当たり前じゃん。その覚悟がなかったら今一緒にいねーよ」

「ハルさんの負けですよ。私も巻き込まれる覚悟がありますので、大丈夫です」

フェイトが笑うと、観念した様にハルが話し出した。

「――400年前の医療は、イーストだけの話じゃなかった」

400年前、世が戦国時代を向かえるまで大陸は三国の独立国から成り立っていたという。各国は独自の文化を育みながらも、色濃く交流を深めていた。

交易も盛んで、足りない面を補い合い、友好的な国交と言えた。特にイーストとウエストは同盟を結び深く共存していた。唯一血の交わりだけを除いて。

「それぞれの国で医療があったってこと？」

「ちよっと違うな。医療は国の中だけでは完成しなかった」

コウもフェイトも話がイマイチ見えず、首を捻る。

「どういうことですか」

「ここからは俺の推測が入るけど、おそらく400年前までの医療は」

――イーストの医療技術とウエストの魔術が融合し、ある特殊な血液を用いた血液製剤による治療が主体となっていた。

「血液製剤？特別な血液？誰の？」

コウ達はますますわからない。

「それが鍵なんだよ。材料が何の血液なのかわからない。これほど徹底的に抹消される理由も」

普段は飄々とし、何事も軽くこなしているハルがいつになく真剣な顔つきとなる。

「そしてそこには隠蔽された歴史が、必ず存在している」

「隠蔽？なんか隠してんの？」

きょとんとするコウを見てため息をつく。

「お前違和感とかないのか？徹底的に禁止されたウエストとの交易。歴史の教科書には戦国時代後の200年前以降の歴史しか書かれていないことや、歴史研究の禁止。あまりにも不自然だろ」

「確かに。ウエストでもこんなに歴史が消されたりしてるの？」

「うーん……。ウエストでは伝承の仕方が教科書とかじゃないんですよ。魔術を用いて木や石など自然の一部に残すんです。だから運がよければ残ってるかもしれないですね」

ああ、とコウは納得して手を叩いた。

「だからハルさんはウエストに行くって言ったの？」

「ご名答。フェイトと出会えたのは予定外の出来事だったけどな。

俺の幸運の女神様ってワケ」

「私、男ですけど」

「でもなんでハルさんはそんな研究してんの？気になんのはちよつとわかるけど、あぶねーじゃん」

一瞬押し黙ったが、ここまで話したらもう隠す必要もないと考えたのか、ハルは口を開いた。

「治したい病気があるんだよ。今のイーストの医学では治せない難病を。400年前の医療ならもしかしたらってな」

意外な答えにコウは目を丸くした。

「コイビト？」

「ちげーよ。でも大事な人」

「ふーん・・・」

そこまで話すとハルは立ちあがった。

「ほら、今日はまだ早いからもう少し走るぞ。俺が運転してやるから、さっさと服を着ろ」

さすがのハルも怪我人には運転させないようだ。さっさと車に戻ると、エンジンキーを回す。急がないと置いていかれそうな雰囲気、コウは慌てて服を着て車に走った。

車は軽快にとまではいけないけれど、順調にウエストへと向かっていく。

地図もナビもないが一本道であるため、道に迷うことはなさそうだ。そもそも国全体が描かれた地図というものが存在していないため、ハルはノースで手に入れた地図の裏側に、大陸全土の地図を描き始めた。紙の上にノースを書き、右側にイーストが書かれている。そして今はノースから紙の左下に向かって曲がりくねった道が伸びている最中だ。この紙の残り半分の白紙が埋まるころ、何かが見えて来るのではないかという期待も込めている。

相変わらずガタゴトと揺れながら車は進んでいるが、助手席のコウはやけに静かだった。

「コウくん、傷が痛みますか？ やっぱりハルさんにちゃんと治療してもらった方が」

「痛くない、大丈夫」

「ああ、コイツまた自分が弱っちくてへこんでるだけだから」

「——わかってて言うなよ！ なあフェイト、オレにも魔術教えて！」

後部座席を振り返り、フェイトに向かって懇願する。

「うーん・・・ちよつと無理じゃないですかねえ・・・」

「・・・やっぱりそうだな。じゃあしょうがないからハルさんで

我慢する。ハルさん、オレに剣術教えてよ」

「しょうがないからって何だよ！我慢って何様だお前！」

ハルの突っ込みにもコウは気にしない。運転中のハルの腕を掴んで激しく揺らす。

「お願いだって。もう弱くてボコボコにされんのも嫌だし、オレもプテラノドンくらい倒したいんだよ」

コウはさらにハルの腕と肩を持って揺らし続ける。

「あぶねーって！わかったから離せ！」

「じゃあいいの！？」

お手上げと言わんばかりにため息を吐くと、コウの頭をボンボンと叩いた。

「一日の移動距離は変えねえからな。やるなら夜だ」

「やった！ハルさんありがとう！」

助手席から運転中のハルに飛びついた。その衝撃で思わずハンドル操作を誤り、道から逸れて深い森へと突っ込んでいった。

「おあっ！」

「ハルさーん、前見てくださいっ」

三人と二匹は順調に・・・ウエストに向かっていった。

第九話 手術室

「暇……。ヒーマー。暇、暇、暇。ヒマっ」

「うるせーよ！こっちはお前のせいで寝不足なんだ！少しはおとなしくしてろ！」

助手席で体力と時間を持て余しているコウをハルが一喝した。

様変わりすることなく深い森を走ること更に七日。

プテラノドンに怪我を負わされてから、運転はハルが変わっている。その上、剣術を教わりたいたいというコウの申し出のお陰で、毎晩三時間から五時間程度の激しい運動付きだ。

一方コウはと言うと、日中車内で爆睡しているため心身ともに絶好調である。

「ハルさんハルさん、私が運転しましょうか」

後部座席からフェイトが身を乗り出し提案する。

「もうそれだけは絶対しねえ」

ハルが渋い顔で断った。

「この間はちょっとアクセルとブレーキを間違えただけですって」
運転席のヘッドレストに手をかけてフェイトがケラケラ笑う。

「それで車ごと水没しかけたのを忘れたとは言わせねえぞ。ったく、浦島太郎が竜宮城行く気かってんだ」

その言葉で、暇を持て余してバタバタしているコウがひらめいた。

「オレ魚喰いたい！」

「はあ！？」

また更なる頭痛の種が生まれて、ハルはハンドルを握りながら頭を抱える。

「竜宮城と言えば鯛や鰯の舞い踊りだろ？もう保存食飽きちゃった

よ」

「・・・あのなあ」

「いいですね。海がないから鯛や鮓はいませんが、その辺の鮎やあめごかなんかが捕れたら最高ですね」

「だろっ！やっぱりフェイトは話がわかるな」

最近ハルはこの二人が結託したら手に負えない事が解ってきた。

三人を乗せた車はそんなタイミングで、長く続いた薄暗い林の道から、太陽の光を乱反射させた広く美しい湖へと開けた。

ハルに二人の視線が突き刺さる。

「・・・停めりゃいいんだろ」

喜んだコウとフェイトはすかさずハイタッチをして車外に飛び出した。

「サスガ話がわかる！マサムネ、コジユウロウ、湖だぞ」

「ハルさんは休憩してください。晩御飯を獲ってきますよ」

騒々しく皆が湖へと向かい、ガラんとした車内にハルが一人残った。実際の所、連日の寝不足が祟り、身体は睡眠を欲して悲鳴をあげそうだ。

「・・・ふあ、眠い」

大きな欠伸をすると、運転席の背もたれを倒し、吸い込まれるように眠りについた。

「――ル、ハルっ！」

「うわっ！あれ、ここは・・・」

いつの間にか丸椅子の上でウトウトしていたようだ。

見慣れた麻酔科用の術衣、麻酔器のモニター、少し向こうを照らす無影灯。そしてこの部屋の造りは9ルームか。

「何寝ぼけてんのよ。出血止まらないんだけど、血圧大丈夫なの？」

「当たり前だ、誰が麻酔かけてると思って・・・」

言いながら麻酔モニターを横目で見ると、患者の血圧は220/110 mmHgという高値を叩きだしていた。

「おおっ！悪い、今下げるわ」

シリンジポンプの早送りボタンを押し、末梢ルートの側管に接続している鎮痛薬を投与した。

（全然気付かなかった・・・。落ち着け、オレ。えー・・・このオペは・・・）

慌てて手元の麻酔記録を見返す。どうやら十分位前まではちゃんと記載しているようだ。

（十七歳女性、A型Rh+。既往歴は特記事項ナシ・・・）

次の欄を見て、思い出した。

――左下顎エナメル上皮腫、開窓術

（ああ、あの子か）

エナメル上皮腫。十代から二十代に好発する歯源性腫瘍で、腫瘍の増大により顎骨の膨隆や変形を伴う。

ハルは歯科領域の疾患はあまり詳しくないが、この病気の治療法としては顎骨の切除が必要で、再発しやすく悪性化する場合もある事は知っていた。

（昨日術前の回診で部屋に行った時、コウが大泣きしてるこの子をなだめてたんだっけ）

コウはいつもそうだ。全力で患者にぶつかり、全力で答えようとす。感謝や信頼の気持ちだけでなく、焦燥感や挫折、苛立ちなどの負の感情も受け止めねばならない。それでも、どこまでも献身的なのだ。

主治医は客観的で在るべきだという意見があるかもしれない。しかし、毎日ベッドサイドで終末期患者の口腔ケアを行うコウの姿を見てしまつては、彼に意見する気など無に帰してしまう。

ハルは術野の方に目を向けた。

執刀医はマキだ。腫瘍が大きいため、まず開窓術により腫瘍の縮小をはかり、縮小後に再度手術で切除するという治療法だ。彼女の手技に無駄はない。正確かつ迅速で、尚且つ丁寧だ。

第一助手を務めるのはコウ。これがまた絶妙なのだが、一番それを知っているのはマキだろう。恐らく同じ経験年数で競えば多分誰にも劣ることはないのだが、ある種の天才であるマキを追ってきたためコウは奢ることなく努力を惜しまなかった。

（コウは自分の選んだ仕事が好きで、歯科口腔外科に誇りを持っているのがわかる。それに引き替え俺は・・・）

ハルが麻酔科に入局した時に、麻酔への思い入れなどは持ち合わせではいなかった。ただあの当時は、長い時間をかけて患者と病気、さらにはその人生と向き合う事が、とにかくしんどかった。その経緯を経て悩んだ末に出した答えが麻酔科だったのだ。

きっかけは何であれ、それでも想像していたより遥かに麻酔の魅力は大きく、ハルを夢中にさせるのめり込ませるには十分だった。それからは腕を磨き勉強を重ね、今では下を指導する立場になっている。（そんな自分が、ただ誰か一人を治したいなんて。虫が良すぎるというか、何の心境の変化かっていうか）

そこまで思い、治療をしたいのも所詮自分の為ではないかと、醜いエゴに苦笑する。

（――400年前の医療の研究さえ、エゴでしかない）

「あと十分程度で終わります」

執刀医であるマキの呼びかけでハルは我に返った。気が付くと閉創を行っている。

「お、おう」

気を引き締め、モニターを確認しながら麻酔薬を切っていく。手術は問題なく執り行われたようだ。マキは開窓部に抗生剤の軟膏を塗

したガーゼを挿入し、手術終了を告げると覆布を外した。

ハルは覚醒に備えるために患者の頭側にまわると、患者の顔を見て息を止めた。

（これは、俺じゃねえか・・・）

患者がゆっくりと目を開ける。

運転席から勢いよく飛び起きた。

周りを見渡すとそこには穏やかな湖と木々の間から差し込む柔らかい日差しがある。車の窓も開けておいたため涼しい風が流れているが、ハルのTシャツの背中は汗でびっしりと濡れていた。

「――ゆ、夢か」

随分リアルな夢を見た。なんとなくあの少女がどうなったのかが気になった。もうすぐ根治手術の時期だろうか。

「久しぶりに麻酔かけてえな」

寝不足が僅かに解消された気だるい身体で伸びをする。すると目に信じられない光景が飛び込んできた。

「はあ?! 何やってんだアイツ」

そこには車から100メートルばかり離れた所で、こないだのプテラノドンと剣を交えるコウの姿があった。そして少し離れてフェイトが傍観している。どういう経緯でこの状況に至ったのかが理解に苦しむが、急いで応戦しようと車のドアを開けるとハルに気づいたフェイトが手であげ、来るなど言うように制した。

ハルは仕方なく車のボンネットにもたれかけ、観戦することにした。戦況はよく言って互角、少しコウが押されているような様子であった。ただ、守りはよく反応しており、爪での攻撃を全て受け止めている。しかしそこから反撃に転じることが出来ない。しかも打撃を受け止めきれずふっ飛ばされることも多い。

「守ってばっかじゃ勝てねーよ」

ハルが呟くが勿論コウには届かない。フェイトは手ごろな岩に腰かけており手出しする気は全くなさそうだ。

その時防戦一方であった状況から、突然チャンスは生まれた。振りかざした爪をコウが受け止めた際にバランスを崩し、結果攻撃を受け流す形となった。勢い余ったプテラノドンは草むらに突っ込むと二、三步よろめき歩いた。

（チャンスっ・・・！）

ハルは思わず身体が動きそうな自分を抑えて、今畳み掛けろと念を飛ばす。

だがそこでコウのとった行動は予想だにしないものだった。

「コンっつのヤロっ！」

コウは地面に剣を突き刺すと柄の部分を踏み台にして高く飛び上がった。

「へっ!？」

呆気にとられるハルを余所に、そのままプテラノドンの背に飛び乗った。

「よしっ！」

コウはガッツポーズでプテラノドンの首根っこを掴んだ。当然プテラノドンは振り落とそうと必死に暴れながら空に舞い上がった。

「えええっ?! コウー？」

プテラノドンは木々にぶつかりながらコウを乗せたまま飛び去った。

啞然として見送っていたハルの所に、フェイトが同じような顔をしながら戻ってきた。

「コウくん、行っちゃいました」

手出しせずに見守ると決めたのはフェイトであったためか、どうしたらいいかわからない様な顔でポリポリと頬を掻いている。

「何なんだアイツは・・・」

ハルはげんなりした顔で肩を落とす。

「コウが勝手にやってんだ、気にすんな」

「でも・・・」

「ハラ減ったら帰ってくんだろ。ほっとけほっとけ」
そう言うところハルは興味なさそうに湖で釣りを始めてしまった。

夕暮れの湖の辺に食欲をそそる匂いが満ち溢れる。

「焼けたぞ。食えよ」

この日のメニューは焼き魚に白米、芋の味噌汁だ。カエデの店で揃えた簡単なキャンプ用品が意外に役に立った。

フェイトは白米の盛られた紙皿と箸を受け取ったが、なかなか手を付けられずにいた。

「コウくん、大丈夫でしょうか。もし何かあったら私の責任です」

「アイツはそんなヤワに出来てねえよ。それに自分でなんとかしなきゃ、アイツは強くなれない」

ぶつきらぼうに言うところ、ハルは飯を掻っ込んだ。

「コレ食い終わってまだ帰ってこなかったら見に行くか」

「はい・・・」

勢いよく食べるハルとは引き換えに、フェイトは箸の先で魚をツンツンと突いている。その周りではマサムネとコジュウロウが落ち着かない様子だ。

だんだんと日も暮れて来ており、二人の間の焚火が周りを赤く照らしている。

フェイトは傍にいた自分に責任を感じ、万が一の事があってはと居てもたつてもいられず、すくつと立ちあがった。

「やっぱり私が捜しに行って――」

言いかけたその時、強い風が二人の間を通り抜け、焚火の火が大きいく揺らいだ。

ハルもフェイトもマサムネもコジュウロウも驚いて空を仰いだ。するとそこには昼間コウを乗せて飛び去ったプテラノドンがすぐそこに接近してきていた。

コウの身を案じてフェイトが身構えたその時、プテラノドンの背中

からひよっこりとコウが顔を出した。

「コウくん！」

「ハルさーん！フェイトー！ただいまー！」

プテラノドンの背中から大きく手を振ると、ギリギリまで地面に近付き身軽にひよいと飛び降りた。そしてプテラノドンはコウを降ろしそのまま飛び去って行った。

「すぐえ腹減ったー！なんかコイツと仲良くなっちゃってさ……って、あれ、ハルさんなんか怒ってる？」

仏頂面で腕を組んでいるハルに気付き、コウがおずおずと尋ねた。

「その前に何か言う事があるだろ。フェイトがどれだけ心配したと思ってるんだ」

「えっ、いや、私は……」

突然話を振られて戸惑うフェイトの方にコウが向き直り、頭を下げた。

「心配かけてゴメン。反省してます」

必死な様子で謝るコウを見て、先ほどの心配も吹き飛びフェイトはクスツと笑った。

「本当に心配しましたよ。でも無事でよかった」

「勝手に悪かったと思ってる。でも手出ししないでくれて嬉しかった」

コウはチラッとハルの顔色を伺うと、もう怒っている様子はなかった。

「ま、やっつけるんじゃないかって仲良くなるっていうのがお前らしいけどな。だけど、剣の腕はまだまだだ。俺が教えてるのにあんな戦いじゃ許さねえ。今日から本格的に厳しくするから覚悟しとけよ」ハルは魚の骨を取りながらニツと笑った。

「ええっ！これ以上厳しくされたらオレ死ぬって」

「つべこべ言わずにさっさと喰え。喰わねえなら片づけるぞ」

「ちよちよちよ、ちよっと待ってよ。食べる！食べます！」

二人のやり取りを見て、フェイトが苦笑いしている。

「・・・魚焦げてますよー」

そうしてまた森での一日が過ぎて行った。

少しずつではあるが、一行は着実に西へと近付いている。それぞれが西への期待と憧憬、懐郷を胸に秘めて進んでいく。

ウエストはもうすぐそこだ。

第十話 修道院

しばらく細い登り道が続いていたが、坂を登り切った所で森が切れた。

森の出口からは目下に広がる太陽の光をいっぱいに浴びた大草原の中に、白い塀に囲まれた街が佇んでいる。

「あそこですよ」

後部座席の窓を全開にして、フェイトが嬉しそうに身を乗り出した。四方を深い森や険しい山に囲まれ、そこだけぽっかりと口を開けたような大草原の中に、魔術都市ウエストは存在していた。

町の入り口には外界と隔てるものはなく、ノースに見られた排他的で物々しい雰囲気は見受けられない。

住民は皆、物珍しそうに走る車を眺めているが、そこに警戒心や敵対心はなさそうだ。

「魔術都市って言うから、もっと仰々しくて末恐ろしいところかと思ってた！全然じゃん。町並みもスゲーな、異国ってカンジ」

コウは助手席の窓に張り付きキョロキョロと通りを眺めている。フェイトが言うにはこの辺りはウエストでも田舎に当たるらしい。

「みんな目が青くて耳が尖んがってんのな！」

スゲースゲーと連呼しているコウの隣で、ハルは住民を怖がらせないように徐行で車を進めていく。

「なあ、とりあえずどこ行ったらいい？」

「そうですね。まずはあの正面の山の頂上にある建物目指してください」

フェイトは運転席と助手席の間から乗り出し、町の外れに見える山の頂上にそびえ立つ城壁に囲まれた巨大な歴史的建造物を指差した。

「随分とデカくて古そうな建物だな」

「修道院です。西のすべてがあので場所決定します」

その場所は標高が高く巨大な為、町の入り口の対極に位置するにも関わらずよく見通すことが出来た。

山の麓まではゆうに三時間はかかっただろうか。

一言に修道院と言えど、跳ね橋を渡り楼門をくぐるとそこは小都市であった。城壁の中の町並みは様々な店が立ち並び馬車が行き交い活気が溢れている。その中でも一際目を引くのは山頂に位置し鐘楼を掲げ、見るものに畏怖の念さえ抱かせる荘厳な礼拝堂である。

「あそこにウエストのお偉いさんがいるの？」

コウが少し緊張しながら礼拝堂を見上げた。

「まあそんなところです。各属性それぞれのトップ六人があので全てを取り仕切ります」

フェイトが言うには、水、火、風、大地、光、闇の六つの属性の長がそれぞれの神に仕え、ウエストの人間は皆そのそれぞれの長の元に仕えるのだという。各属性の随一の能力者で尚且つ人格者として認められた一名が代表者として選出され、尚且つ神に選ばれし場合のみ長となるのだ。

「入りましょう。会って頂きたい方がいます」

フェイトは礼拝堂の重い扉を押しあけた。

大きなステンドグラスに西日が差しこみ、一瞬眩しさで目が眩んだ。程なく目が慣れて来た頃、部屋の前方に二人の人物のシルエットが見えた。

「やっと帰って来たか」

「遅かったじゃない、フェイト」

「――アーサーと、ジュリア？」

そのシルエットはやたらガタイのいい短髪の男と長いウェーブの髪の毛の細い女だった。双方ともフェイトと同じく褐色の肌、碧眼に尖っ

た耳を持っている。

フェイトの知り合いではありそうだが、どうやら穏やかな雰囲気ではなさそうだ。

「フェイト、この人達は？」

コウが気まずい中、そつと尋ねる。

「ええと、火の長のアーサーと・・・」

「風の長に選ばれたのにその立場を受け入れず、ウエストから逃げちゃった誰かさんの補佐役の、ジュリアです。そうよね？」

ジュリアと呼ばれた女は厳しい顔つきでフェイトに言い寄る。

「・・・逃げた訳じゃないです。行く時にアーサーには言いましたし。それに風の長にはジュリアがなればいいじゃないですか。私より素質も実力もある。私はそんな器じゃないです」

顔を背けフェイトが不満そうに言うのと、ジュリアがカツとなって力一杯壁を殴りつけた。

「甘ったれた事言わないでよ！実力なくたって選ばれたのはアンタなんだからね！無責任なこと言わないで！」

今にもつかみ掛からんとするジュリアの腕を、隣で聞いていたアーサーが引いた。

「オイ、落ち着けよ。ジュリアも言い過ぎだけど、フェイト、お前が悪い」

アーサーと呼ばれた男が二人を制して間に入った。ハルとフェイトは居心地の悪さに顔を見合わせる。フェイトもジュリアと再会してしまったことが予定外なのか、バツの悪そうな顔をしていた。そんな中、出るタイミングを失っていたマサムネとコジュウロウがコウの後ろからヒョコッと出て来た。

「マサムネ！コジュウロウも。そうか、お前上手くやったんだな」
ジュリアを抑えながら、アーサーは二匹のホワイトドラゴンを見て嬉しそうに笑った。一方ジュリアは話が読めずにいる。

「ちよつと、何の話よ」

明らかに苛立っているジュリアを余所に、フェイトは話を続けた。

「いや、無事に帰れたのはこのお二人のお陰です。——アーサー、この事を誰にも言わないでくれたんですね」

フェイトが嬉しそうに笑うと、アーサーは顎の無精ひげを触りながら斜め上を向いた。

「あ……スマン。一人だけ言った……」

「え？」

フェイトが尋ねようと声を発すると同時に礼拝堂の扉が勢いよく開いた。

「お兄ちゃん！」

フェイトの背後のドアから駆けて来たのは、まだ十代前半と思しきあどけない少女であった。少女は口をへの字に曲げ、瞳に涙をいっぱい溜めてフェイトに縋りついた。

「お兄ちゃん……。あたしを一人にしないでよ。お兄ちゃんまでいなくなっちゃったらあたしどうしたらいいかわからないよ」

「サラ……ごめん」

少女の頭を優しく撫でるフェイトの肩に、アーサーが手を置いた。

「フェイト、いいから少し二人で話して来い。サラがいくら魔術の能力が高くて、まだ小さい女の子で、お前はたった一人しかいないお兄ちゃんなんだからな」

「あ……でも……」

フェイトは気まずそうにハルとコウの方を振り向いた。するとハルはヒラヒラと手を振って見せた。

「行って来いって。俺らに気イ使ってる場合じゃねえだろ」

「すみません、すぐ戻ります」

そう言ってフェイトは泣きじゃくるサラを連れて礼拝堂から出て行った。その後ろをマサムネとコジュウロウが付いていく。

「——で、そのオトコマエのお兄さんと、爽やか好青年くんがフェイトを助けてくれたのか。本当に、心から感謝する」

フェイトらが出て行ったあと、アーサーはハル達に歩み寄ると、深

々と頭を下げた。ジュリアも先ほどの取り乱した自分を見せてしまった恥じらいで気まずそうにしながらも、一緒に頭を下げた。

「さっきはあんなどこ見せちゃったけど、あたしたちはどうしてもフェイトを失うわけにはいかないのよ。彼だけが自覚がないんだけど・・・本当にありがとう」

急に二人から頭を下げられ、コウとハルは再び顔を見合わせた。

「いや、オレら全然大したこととしてねえよな」

「ああ。だから頭上げてくれ。それより、アイツは”風の長”だったのか？」

ハルはフェイトらの会話からそのことが読み取れたが、未だ疑問符が残る。初耳もいとこだ。第一本人の口からそんな事は一言も聞いていない。

ああ、それか、とアーサーが頭を掻いた。

「アイツ自身がまだ認めてないんだよ。先代が最近亡くなってな、後継者として選ばれたんだが、受け入れられないんだと。そんな時にマサムネ達が拉致られて追いかけて行っちゃったってワケ」

「補佐役って、一人の長に対して一人ずついるのよ。アイツの補佐役にあたしが選ばれちゃったから、あたしはアイツを信じて付いて行って支えたいんだけど。でもあたしがアイツを信じたくても、アイツが自分を信じられなかったらどうしようもないじゃないの。もう腹立っちゃって、いつもこんな感じ」

だんだん話が読めて来たハルであったが、フェイトの考えが今一つ汲み取り切れず、それはコウにとっても同じであった。

「ふうん、よくわかんねえけど・・・。そういえばさっきの女の子は？」

コウの疑問に答えたのはジュリアだった。

「フェイトの妹のサラよ。まだ十二歳だけど、魔術で右に出るものは恐らく国中捜してもいないわ。光と闇の両方の属性を持つってことは、希望でもあり、脅威でもある。だから彼女を六人の長で守ることになっているの」

「守るって、誰から？」

「ノースなどの強大な軍事組織から悪用されないように守るのはもちろん、彼女自身を彼女の能力から守ることも、ね」

自分の生活とはかけ離れた常識をベースに新しい情報を次から次へと話され、話の内容はコウの理解を越えそうだ。許容量を超えそうなコウを横目に、ハルが話を切りだした。

「俺らは、戦国時代以前の消去されてしまった歴史と医療が知りたくてイーストから来たんだ。ノースでフェイトと出会ったのは偶然だけど、ウエストで俺ら医者が役に立てることがあれば協力させてほしい。だから、ここで研究することを許してもらえないか？」

二人は驚き、ジュリアがアーサーを仰ぐと、考え込んでいたアーサーが口を開いた。

「随分と厄介なことに首を突っ込もうとしてるんだな。俺も昔の歴史とか医療を知っているわけではないが、それなりのリスクもあるだろ」

どうやらウエストにおいてもタブーの一つではあるようだ。しかし、ハルは先ほどの会話で垣間見えたフェイトのアーサーに対する信頼を信じて話を続けた。

「それでも、俺には必要なんだ。迷惑をかけるつもりはない」

ハルの決意は固かった。その様子をみてアーサーは溜息を一つつくど、頼もしく笑って見せた。

「なんでも協力してやるよ。なんせフェイトの命の恩人だからな」

このアスリートのような体格で情に厚い心根の持ち主は、拳で力強く自分の胸を叩いて見せた。ジュリアも頷き笑っている。どうやら彼女も熱血漢で感情的ではあるが、本当のところ心底フェイトを慕っているようである。

「さあ、今日はもう疲れたでしょう。フェイトも暫く戻って来ないわよ。ウエストにいる間はこの修道院に泊まるといういわ。部屋なら山ほどあるから。案内するわね」

そう言ってジュリアはコウとハルに修道院内を案内しながら、部屋

まで連れて行ってくれた。アーサーがゲストルームと呼ぶその部屋は、広々と快適そうだった。アーサーとジュリアは、では夕食時にと告げると部屋を後にした。

「はー！疲れた！次から次へと違う世界の話で頭がパンクしそう」
コウはベッドに倒れ込んだ。ベッドは予想以上に柔らかく、疲れた体を優しく受け止めた。

「久しぶりのベッドだもんなー・・・もう、眠い・・・」
コウはそのまま吸い込まれるように眠りに着いてしまった。

「寝るならちゃんと布団被れて。コウ？・・・コウ！」

コウは掛け布団の上で俯せとなり、もう呼んでも布団を引っ張っても反応はなかった。昔から一度寝てしまえばしばらくは何があらうと起きないのだ。

「当直ではちゃんと起きてたのかよ・・・」

仕方なく、夕食まで寝かせてやることとした。しかし季節は晩夏、その上ウエストは他の都市と比較しても遥かに気温が低い。このままでは薄着のコウが風邪を引いてしまう。

コウの下敷きになっている掛け布団は引っぱり出せそうになく、仕方なくハルは自分の分の布団をコウに掛けてやった。

「感謝しろよ」

ハルは掛け布団のなくなったベッドに仰向けに横になり、頭の下で腕を組んだ。

何の疑問もなく、今までの生活を置いて自分に付いて来てくれたコウに対し、ハルの心中は複雑だった。

「コウ・・・ゴメンな・・・」

寝息を立てるコウに小さな声で呟いた。

夕食までの束の間の一時は、これまでの消耗を忘れさせてくれる柔らかな時間となった。

第十一話 智齒周囲炎

部屋をノックする音で目が覚めた。

「――俺まで寝てたか。知らねえ内に体力的に結構キてたんだな」隣ではコウが布団に包まり気持ちよさそうに寝息を立てている。一方ハルはコウに掛け布団を譲ってしまったせいで、何か肌寒い。再び部屋をノックする音が響く。

「はい、はい！ちょっと待って。コウ、起きろ」

呼びかけに無反応なコウに舌打ちしながら、部屋のドアを開けた。するとそこには気まずそうに笑うフェイトが立っていた。

「・・・フェイト！」

「ちよっとお邪魔していいですか」

「当たり前だ、入れよ」

フェイトを中に促し、ソファアに座らせた。

「あ、ちよっと待ってな」

ハルはそのままベッドに向かうと寝ているコウを床に蹴り落とした。派手な音を立ててコウは床に落下し、ようやく起きたようだが、まだ目が虚ろである。

「ハルさん?! 何してるんですかー!」

「・・・ん、ハルさん? もう朝?」

「寝惚けてんじゃねえよ。ほら、フェイト戻って来てる」

コウはまだ目を擦り反応が鈍い。ハルは無視して話を続けた。

「妹、大丈夫だったか?」

ハルは寝ぼけるコウを放っておくことにした。

フェイトは恥ずかしい所を見られたと照れ笑いした。

「大丈夫だと思います。かなり拗ねてくれましたけどね。私がアーサーに、火の長にしか言わずにノース行っちゃいまして。怒られました」

「・・・そりゃ怒るわ」

さすがのハルもフェイトの妹のサラが気の毒になった。サラはアーサーに事のあらましを聞いて、兄が帰って来れない覚悟で行ったあ
ることも悟っただろう。

「でも、サラのドラゴンのコジュウロウも戻って来たのもあって、
やっとな機嫌治ったところです」

「そうか。でもアレだな。普通の女の子って感じで、全然すごい能力
力持ってるなんてわかんねえよな」

ウエストでは成人している年齢とはいえ、まだまだ十を少し過ぎたばかりの少女だ。魔術を持たないハルには特別に能力などはわからない。まあ、フェイトが風の長って事も未だ信じ難いのだが。

「私たちは能力を高める為の紋様が入ったアクセサリーを身に着けたりしますが、サラは能力を抑制するアクセサリーをしています。それだけ危険な能力らしいです。でも、普通の女の子ですよ。さっきハルさんの事を格好いいってはいでたくらい。ナイショですけど」

フェイトは笑って唇に人差し指を当てた。そこによく目を覚ましたコウが話に入ってきた。

「ハルさんモテモテじゃん！でもフェイト気をつけなよー。ハルさんイーストじゃめっちゃ遊んでるって噂だから」

「遊んでねえよ。お前こそ少しは遊んでみろ」

ハルがしかめっ面でコウの頭を掴む。

実際コウもハルの女関係はよく知らないが、特定の彼女がいるという話は聞かない。

一時期マキと付き合っていたという噂もあるが、二人ともキャラクターが濃すぎて、コウにはそんな想像がつかない。

しかしハルはモテる。女の扱いにも慣れている。大学には密かにファンクラブが存在した程だ。その気になれば女遊び位いくらでも可能だろう。

一方、コウはそのような方面にはてんで未熟者であった。

コウに散々遊び人扱いされ、ハルがムツとしながらフェイトの両肩

を掴んだ。

「じゃあ、サラにエッチなこととしていいか？」

コウは一瞬目が点になったが、すぐに我に返って手元の枕で思い切り頭を殴った。

「何考えてんだよ、ド変態！年考えろ！」

「あはは。責任取ってくれるならいいですよー」

「冗談だよ、何コイツら・・・」

ハルはグツタリと肩を落とした。

くだらない話にひとしきり盛り上がった後、フェイトが今後の話を切り出した。

「滞在中はここを使ってください。私も他の部屋に居ますから。それから、他の属性の長にも会って頂いてもいいですか」

火の長のアーサーと、風の長のフェイトを除いた、水と大地と光と闇の長だ。

「長って爺さんみたいなイメージだったんだけど、みんなフェイトみたいに若いの？」

フェイトは二十歳そこそこ、アーサーもフェイトの兄貴分の様だが、年齢はハルとあまり変わらない様に見える。

「基本的に短命ですから。水の長は私とあまり変わりません。大地の長はアーサーのちょっと上くらいかな。歳だけは教えてくれないうです」

女心は難しいですからね、と笑った。

「光と闇の長は？」

「大分上ですよ。その分頭が固いんで、ハルさんの研究は言わない方がいいかもしれないです。禁じられてる訳ではないのですが、ウエストの中での暗黙の了解があります」

ハルは腕を組んで考え込んでしまった。

「了解。ただ、どうやって歴史を紐解くかだよな」

「私に心当たりがあります。ただ一つ問題が・・・」

フェイトが言うにはこうだ。ウエストにはあまり書物の文化が発達していないため歴史書は存在せず、先代から後世へ口頭での伝承という形式が取られる。故に不都合な事実は抹消されるという訳だが。しかし、時代に風化されない為に気が遠くなるほどの遙か昔より行われている方法がある。森の奥深くに存在する巨石に、その時代の記憶を魔術を用いて刻み込むのだ。代々その役目を担ってきたのが大地の長である。そのため印すのも読み解くのも大地の長でなくてはならない。

「じゃあ問題ってのは、大地の長が手を貸せねえとかか？」

このウエストの歴史の全ては大地の長にあるということだ。

「いえ・・・彼女は厳しい人ですが、考えは柔軟で理解のある方ですよ。ただ、一週間前より床に伏せている様です」

「どっか悪いの？」

「右の顔面が急に腫れたと聞いてます。治療に長けている水の長が治療に当たってますが、腫れ方が急で状態が悪いみたいで・・・」

コウとハルは顔を見合わせて頷いた。

「コウ、お前」

「うん、多分。フェイト、オレも力になれるかもしれない」

コウの専門の歯科口腔外科領域疾患である可能性も充分にある。幸い外に停めている訪問診療車の中にある程度の治療道具や薬は積んでいた。

「本当ですか！お願いします、早速部屋を案内——うわっ」

フェイトがドアノブに手を掛けた瞬間、外から勢いよくドアが開けられ、フェイトはそのまま部屋の外に投げ出された。

その開けられたドアの前に立っていたのは、フェイトとそう歳の変わらない女性であった。走って来たのか息を切らし、肩より少し長い髪を振り乱して、倒れ込んでいるフェイトに縋り付いた。

「フェイト！どうしよう、サマンサが！息がすごい苦しそうなの！呼び掛けても反応しないの！」

彼女の叫びにフェイトが答える前にハルが反応した。

「コウ、急いで救急カートを持ってこい。フェイト、部屋に案内を！」

四人が一斉に駆け出した。

ハルが大地の長、サマンサを一目見ると、一刻を争う容体である事を悟った。

「こりゃあ・・・」

右顔面から顎下部にかけて腫脹と発赤が著しい。体温も高く、意識が混濁している。何より腫脹により気道が非常に狭窄され、呼吸音がおかしい。

「挿管は・・・難しいか」

気管挿管、口から気管まで呼吸の為の管を入れる事だ。

直ぐさまコウが到着し、サマンサの状態を確認して事態を把握した。コウが救急カートから喉頭鏡と呼ばれる気管挿管の為に喉に入れる器具を出したが、ハルが首を横に振った。

「開口量がまるでねえ。ここにはファイバーもねえしな。気道がこれだけ閉塞してたら盲目的に挿管は困難だ」

口が開かないため、空気の通り道の管を入れられないのだ。

「ハルさん、智歯が原因の顎蜂窩織炎だと思う。これ以上腫脹が拡大したら、気道が完全に閉塞する。せめてCTがあれば・・・」

智歯、つまりは親知らずの周囲に細菌感染が生じ、組織が粗になっている範囲に炎症が波及したのだ。腫脹の方向によっては気道を閉塞し生命に関わる場合がある。CTスキャンがあれば膿瘍形成の確認も出来るが、今は設備も道具も時間も限られる。

「緊急気管切開だ」

二人の声が揃った。

そこからは迅速だった。

ハルが局所麻酔下に気管切開を執刀し、コウが点滴を取り抗生剤を投与した後、気管切開の機械出しに付いた。

「15番メス」

「はい」

「形成尖刀」

「はい」

「ガーゼ」

「はい」

二人がイーストで共に執刀することなどなかったが、長年チームを組んでいたかの様に息はピッタリだった。

「電気メス――は、ないか」

細血管の出血点を焼灼しようとして、その設備が無いことを思い出した。

「いや、ちょっと待って。アーサー」

遠巻きに見守っていたアーサーがコウに呼ばれて近寄った。

「なんだ？」

「この摂子・・・ええと、ピンセットの先端をピンポイントで熱する事って出来る？」

「ああ、やってみる」

さすがウエストで随一の火の使い手である、造作もなかった。

「すげえ。助かる」

ハルの合図に合わせ、アーサーが焼灼で止血をしていく。

「コウ、気管カニューレの準備は」

「出来てるよ」

「よし、入れるぞ」

気管の管を挿入して、気管切開は滞りなく終了した。

引き続きコウが膿瘍切開に取り掛かる。親知らず周辺から咽頭にかけて溜まった膿を出してやるのだ。

「口腔外から切開します。ハルさん、皮膚ペンを」

まず下顎のラインと顔面動脈の位置を印記する。

「穿刺します——あ、そうだ！水の長っている？」

太い針で膿瘍腔を突こうとし、手を止めた。

「は、はい」

呼ばれて返事をしたのは、先程フェイトを呼びに部屋に駆け込んできた女性だった。

「えっと、君が」

「水の長を務めています、アイシャです」

アイシャは何故呼ばれたのかわからず不安そうな顔をしている。

「アイシャ、膿が溜まっている位置を正確に知りたいんだ。身体の左半分には無い、右半分に異常に溜まった水分があるの、わかる？」

「やってみます」

アイシャは横たわるサマンサに両手をかざし、瞳を閉じて集中した。そして目を開けると、側の人間にバケツに水を汲んで来させた。アイシャが右手をあげると、バケツの水が宙に踊る。水は美しい軌跡を描くと次第に集まり、それはサマンサのシルエットをかたどった立体像になった。

「ここです」

アイシャの合図で、右の顔面の一部の水が塊で乳白色に光った。どうやら、膿の溜まりを表現している様だ。

「すごい・・・」

「3DCTレベルだな」

それは最先端の医療技術を知るコウとハルを感嘆させる物であった。アイシャの正確な立体的把握も役立ち、膿瘍から大量に排膿させる事が出来た。

コウが溜まった膿を流れ出させる為の管を留置する。

「ありがとうございます」

終了を告げると、部屋で心配そうに様子を伺っていたアーサーやジュリアらが歓喜の声を上げた。

終了後はアンビユーバックと呼ばれる一回一回手押しで空気を送る道具を用いて、意識がはつきりするまでコウとハルが交替で呼吸を助けることにした。

「サマンサは助かったのか？」

一部始終を見守っていた火の長アーサーらが近寄った。

「状態は落ち着ついたよ。まだ予断は許さないけどね」

コウが一定間隔でアンビユーバックを押しつつ、皆に病状を詳細に説明した。

そして後の看病を引き受けて、部屋にはコウとハルとフェイトが残った。

「コウくん、ハルさん、着いた早々すみませんでした」

フェイトが二人に深々と頭を下げる。

「いいよ、フェイト。オレら人命救助が仕事だからね」

「だけど危なかったな。炎症の拡大が並じゃない」

アイシャの水の長として魔術の能力は高い。治癒能力も並外れたものであるとフェイトは言う。

にもかかわらず、炎症の波及は致死的なものだった。

椅子に座り、膝の上で手を組んでいたハルが、口を開いた。

「この原因が自己免疫機能異常に関係してたら。ウエストの人間の短命に由来していたら」

「ハルさん？なんだよソレ」

ハルが重い口調で続ける。

「もしそれ自体が仕組みられたものならば」

「どういう意味ですか」

「フェイト、お前は治したいと思うか」

「……え？」

その時、部屋のドアが三回ノックされた。

外伝三 満月

街一番の修道院の裏には聖域と呼ばれる森がある。

澄んだ空気にたくさん鳥のさえずり、小川の流れる音色、フェイトはこの森が好きだった。

お気に入りの場所は、いつもの大木の枝の上だ。両手を広げた大人が三人でやっと囲める程の太い幹を持ったかなりの樹齢の木である。降り注ぐ柔らかな木漏れ日が、長い冬の終わりと春の訪れを喜んでいる様だ。

フェイトは春の風に似ている、と言ったのは誰であったか。

優しくて、力強い。

鼻歌を歌いながら、風の魔術で落ちている木の葉を踊らせる。

その時、列を成して踊る木の葉の最後尾の一枚が炎を上げて燃えた。

「またサボりか」

森の木の間から姿を現したのは、ラフな姿のアーサーであった。

「なんだ、アーサーですか。貴方こそ何しに来たんですか」

「サボりだ」

悪びれる様子もなく、しれっと答えみせた。

「補佐役の方がまた困っているんじゃないですか」

相変わらず自由奔放なこの火の長は、こうしてすぐ行方を眩ませ補佐役を慌てさせる。

「知らん。あんな堅苦しい場所は一日一時間で十分だ」

各属性の長は、長に就任すると同時に生活場所として修道院の一区画を割り当てられる。それは各々が過ごしてきたかつて慣れ親しんだ場所よりも居心地の悪さを感じる場合も多い。

「お前こそ、こんな所にいていいのか？次の風の長、まだ決まらな
いんだろ」

「そうですねー。でも私が長になるわけじゃないじゃないですか。私にはカンケーないです」

まるで他人事と言わんばかりに、フェイトは春の陽気にまどろんでいる。

ここ魔術都市ウエストでは、水、火、風、大地、光、闇の六つの属性の長がそれぞれの神に仕えている。そもそも長と言うのはこうだ。まず他の属性の長達はその属性の随一の能力者で尚且つ人格者を代表者として選出する。その者が修道院の礼拝堂で誓いを捧げ、神に選ばれし場合、身体の一部に紋様が浮き上がるという。その印を持つ者が長となるのだ。

そして先日、歳を召した先代の風の長が他界し、今は後継者選出の真っ最中なのである。

通常、代表者がそのまま神に認められ、選出に難航する事などあまり無い。しかし今回ばかりは、幾人もの能力者が礼拝堂で誓いを行っても、紋様が刻印される事はなかった。

困窮した長達は国中から風の魔術師を集め、片っ端から誓いの儀式を試すに至る。

「ここに来てアーサーに再会したのは嬉しいですけど、忙しそうです。私にはあの中は暇ですから」

フェイトとアーサーは育った地区が同じで、歳は少し離れているものの仲がよかった。

「まあな。お前にはこういう場所の方が似合ってるよ」

「そうでしょう。早く私の番を終わらせて帰りたいですよ」

呼ばれて来た割には、その人数が多く、中々順番が来ないのだ。

「まあそう言うなって。多分明日ぐらいには呼ばれるだろうよ」

「だいいいですけど」

「妹には会ったのか」

「サラですか、会わせて貰えませんか。いくら肉親と言っても、光と闇の長の許可が出ない」

声に怒りが滲んでいる。

光と闇の両属性を持つサラは、自分の能力が大きすぎてコントロー

ル仕切れない。暴走防止の道具が出来るまでは、と部屋に閉じ込められている。サラの能力が神に近いあの奇跡だの言われても、フェイトに言わせればただの監禁か幽閉だ。

「そう怒るなよ。サラにはコジユウロウが付いてるから。それより、今日は満月だ。今夜はとっておきの場所から拝ませてやるよ。そのマサムネにもな」

じゃあ夜に、と言ってアーサーは修道院に戻って行った。

「バレちゃってましたか・・・ねえ、マサムネ」

キュウと鳴いて、木の上からホワイトドラゴンのマサムネが降りてきた。

家を出る時にフェイトに着いて来てしまったので、仕方なくこの森に隠れて貰っている。

「マサムネも、サラやコジユウロウに会いたいですよね」

再びキュウと鳴くマサムネを、フェイトは優しく撫でてやった。

その晩の満月は美しかった。

アーサーがフェイトに用意してくれたのは、修道院の最も高い場所にある鐘楼のある所から見える満月と、こっそりと連れ出したサラとコジユウロウだった。

アーサーの予想を反し、フェイトが修道院に呼ばれたのはそれから五日目の事だった。

礼拝堂の重い扉を開けると、アーサーをはじめ、各属性の長が勢揃いしている。その中には風の長の補佐役ジュリアの姿もあった。

（・・・早く終わらせて帰りたい）

礼拝堂の赤い絨毯を歩き、祭壇の前に立たされると、その厳かな雰囲気は圧倒される。

祭壇の前でひざまずき、胸の前で両手を組んだ瞬間、突然一本の太い光がフェイトの身体を打ち抜いた。

「うわあっ！」

同時に右の上腕を激しい痛みが襲った。思わず腕を抑える。

「——っつ」

長達は目を見張った。それと同時に神に選ばれた事を悟った。フェイトは余りの痛みで気を失い、その場に崩れ落ちた。

「・・・ト、フェイト！」

目を覚ますと、そこにはアーサーに水の長アイシャ、それから補佐役ジュリアといった顔ぶれがあった。

「・・・どれくらい寝てましたか」

「十五分とこだ」

身体を起こし、少し痛む右腕を見て、フェイトは全て悟った。

「これは・・・」

「風の長に、選ばれたんだ」

右の上腕には、見たことのない紋様が刻まれている。

左手で擦ってみても、その紋様は取れない。

「お前がどう思おうと、これは決定事項だ。一週間後には就任式がある」

「・・・少し、一人にさせてください」

納得がいかなかった。

自分より魔術の能力が優れている者などいくらでもいるし、第一、人の上に立つ器では無いと自覚している。

信仰心は——無いことはない。しかし皆がする様に神に従事して生きるというよりは、風の神がいつもすぐ側にいるのを感じて生きてきた。

（適任者なら、他にいくらでもいるだろう）

夏が近づいたせいか、開いた窓から流れ込む風は、酷く蒸し暑いものだった。

一週間後、執り行う予定だった就任式は急遽大幅に延期された。

ノースからの献上品の命令の御達示があったのだ。その準備にウエスト中がてんやわんやとなった。

「献上品のお蔭様で就任式が延期されて喜んでんじやないの」

修道院の廊下で鉢合わせたジュリアが突っ掛かる。

「不謹慎ですよ」

「だったらもう少しやる気くらい見せなさいよ！」

「そんなの私の勝手です。好きで選ばれたんじゃない」

「それじゃ補佐役のこっちは迷惑だって言ってるの！」

フェイトが選ばれたあの日以来、ジュリアは酷く敵視してくる。フェイトは彼女が苦手だった。

そこにたまたま通りかかったアーサーが仲裁に入る。

「何やってんだよ、お前ら！本当にいい加減にしろよ！」

ジュリアはフェイトを睨むと、踵を返して去って行った。

「――フェイト、こんな所で喧嘩している場合じゃない。献上品略奪のノースの連中がサラの所に行った」

「・・・本当ですか！」

「様子を見に行こう」

フェイトとアーサーは駆け出した。

サラの部屋の前には人だかりが出来ており、掻き分け中の様子を伺うと、泣き叫ぶサラとそれを必死に抑える光の長と闇の長がいた。部屋には暴走したサラの力の為か、火花が激しく散っていて中に入れない。

「何があった!？」

アーサーが近くの野次馬を捕まえて事情を聞く。

「サ、サラ様のドラゴンが献上されまして・・・」

「なんだと?!」

「人以外の全ての献上を拒む権利は無いはずだ、と。問答無用でした。こんなの、あんまりです」

それを聞くや否やフェイトが駆け出した。

「そのドラゴンを、返してください」

ようやく追いついたフェイトが息を切らしながらノースの軍人を呼び止めた。

「200年前から拒否権は無いはずだが」

「お願いします、返してください!」

しかし軍人らは冷徹だった。

縛り上げたホワイトドラゴンのコジュウロウに銃口を突き付けた。

「屍でよければ返してやる」

「やめろっ・・・」

その瞬間、木陰から飛び出してきたのは、同じくホワイトドラゴンのマサムネだった。

驚いた軍人は思わず銃口をマサムネに向け、引き金を引いてしまった。

「マサムネー!」

フェイトが血を流すマサムネに駆け寄り抱き起こした。

銃弾は片目を掠っていたが、幸いにも命に別状はなさそうだ。しかし、失明は免れそうもない。

「貴方達は、何て事をっ」

フェイトが怒りに震えると、ノースの軍人達の間からから、短い黒髪を撫で付けた初老の男が現れた。鋭い眼光が印象的だった。

「マツイ大佐っ」

軍人らが男の名を呼び道を空ける。

「ほお、これは珍しい。二匹共連れて行け」

「なんですって・・・!」

「フェイトやめろ！」

空から現れたのはアーサーだった。

アーサーはマサムネ達の親のホワイトドラゴンに乗って町中を捜し、ようやくフェイトに追いついた。

「・・・アーサー」

「ノースの大佐に喧嘩売ってどうする！戦争でも起こしたら、お前が責任取れるのか！？立場を考えろ、軽率過ぎる！」

「・・・」

抵抗する術がなかった。マサムネとコジユウロウはそのまま連れて行かれてしまった。

アーサーはうなだれるフェイトを無理矢理修道院へと連れて帰った。フェイトは一言も喋らなかった。

フェイトの就任式は更に延期となった。

サラの精神状態が極めて不安定であったからだ。唯一の肉親であるフェイトと引き離され、最後の心の支えのコジユウロウを失ったシヨックは大きかった。

光の長と闇の長が付きっ切りで暴走しかけるサラの力の抑制に当たった。

次の満月の夜が来た。

アーサーはフェイトに呼び出しに応じ、あの鐘楼にやって来た。

「遅くにすみません」

そこには前までの何にも縛られないよく笑う明るいフェイトは居ず、暗い瞳をした青年が立っていた。

「フェイト・・・」

冷たい夜風が背中を駆け抜ける。

「――ノースに行こうと思います」

「！」

「合法的には無理なら、非合法でマサムネ達を助けに行きます」

口調に迷いはなかった。

「勝算はあるのか」

「・・・わかりません。だけど行くって決めました」

「何で俺に言う。止められる事が想像出来ただろう」

「頼みがあります」

アーサーは怪訝な顔をした。

「ノースまで連れて行ってください。アーサーを主に持つ、マサムネ達の親のドラゴンに乗せて貰いたいんです」
納得した。地上に行くにはノースは遠すぎる。

「生きて、帰れるか」

「・・・」

長い沈黙だった。

「約束するなら連れて行ってやる」

フェイトに計画があるとは思えない。しかし、この状態のフェイトは見ていられなかった。

「お前を信じていいんだな」

フェイトは暗い冷たい瞳を伏せ俯いた。

「・・・何も守れないのは嫌です」

アーサーは指笛を吹き、ドラゴンを呼んだ。鐘楼からドラゴンの背に飛び乗り、後ろにフェイトを乗せる。

「お前が居ない間のウェストは俺がなんとかするから、必ずマサムネ達を連れて帰って来い」

フェイトはアーサーの背中をしっかりと掴んでいたが、最後まで頷く事はなかった。

その白いドラゴンは、月の光を浴びて青白く輝きながら、黒い星の海を渡って行った。

遥か遠い北の街を目指して。

第十二話 ウイルス

ドアをノックする音で張り詰めた空気が一気に引き裂かれた。

「は、はい」

フェイトが慌てて返事をする。

「アイシャです。夕食をお持ちしました」

フェイトがどうしようかとハルを伺うと、ハルが立ち上がった。

「悪い。続きはまた今度な。――どうぞ」

そう言ってドアを開けた。ドアの前には食べ物に乗せた大きい盆を持ったアイシャが立っていた。

「先程は本当にありがとうございました。私の力不足です、お恥ずかしい」

アイシャは水の長として何も出来ずに、サマンサを死なせてしまう所であった自分を責める。礼を言いたくて、長であるアイシャ自ら夕食を運びに来たのだ。

既に先程の取り乱した様子はなく、そこに立つのは栗色の髪を編み込み、綺麗な石の髪飾りを付けた美しい若い女性であった。

「気にしないでよ。力になれて本当によかった」

コウがベッドサイドでアンビュバッグを押して空気を送りながら、照れた笑顔で答える。

会釈をして夕食の入った盆を置いて立ち去ろうとしたアイシャを呼び止めたのはフェイトだった。

「アイシャ、そういえば君の亡くなったお父さんって、大地の長でしたよね」

コウもハルもハッと顔を上げる。サマンサの前の代の長がアイシャの父親だった。

「え、ええ。それがどうかしたの？」

「歴代の大地の長が歴史を印していく石がありますよね。その石の事を少し教えてもらえますか」

「マナの石の事ね。あれは大地の長が代々その時代の事件とかを魔術で石に記憶させていくものなの。でも特に決まりとかないから、父はこんな日記みたいのでいいのかなーって言ってたわ。特に何もなかったら何年もしてなかったみたい。マメな性格じゃなかったし」

「えっ、ちょっと待って。今までの内容を参考にしないの？じゃあ今までの人が何を残してきたかは知らない？」

意外な答えにコウは眼をパチクリとさせた。

「アイシャ、今までの内容を知る事は可能なんですか？」

「もちろん可能よ。だけどそれはノースが禁止しているの。だからみんな先代の内容を敢えて知ろうとしないのよ」

「ったく、どこ行ってもあの時代を知ることが禁止かよ。ウンザリだな」

ハルはそう言うのと、盆の上の綺麗に切られた白い果物を掴むと、口に放りこんだ。甘酸っぱい、完熟前の桃の様な味がした。

「もちろん私よりサマンサの方が詳しいから、元気になったら教えてもらったらいいわ。でも光の長と闇の長には気をつけて。あの二人がノースとの連絡係だから」

そう注意を促すと、アイシャは何があればすぐ呼んで欲しいと言い残し、退室した。

「長って言ってもすげえ若いんだな」

ハルが次に緑色の四角くカットされた果物を口にした。メロンのようなものを期待したが、想像に反してそれは瓜のような青臭い味がした。

「長になるのに年齢は関係ないんですよ。普通は桁外れの魔力とか才能を持っているんです。だから何で私が選ばれたかわからないですよ」

フェイトが右腕の紋様を押さえながら苦笑した。

そんな暗い面持ちのフェイトを、コウが笑い飛ばした。

「じゃあ顔じゃね？アーサーもフェイトも男前だし。サマンサは腫

れてるからよくわかんねーけど、多分すげえ美人だろ。アイシヤとかめっちゃかわいいのな！」

「・・・コウくん」

情けない顔をするフェイトを無視してコウは続けた。

「フェイトはオレの命を助けてくれたじゃん。十分すげえよ。神サマだって、意味があってフェイトを選んだんじゃないかねえの？」

「・・・」

一瞬の沈黙の後、再び部屋がノックされた。今度入ってきたのはアーサーだった。

「フェイト、ちょっといいか」

「はい。ハルさん、コウくん、すみません。少しサマンサをお願いします」

二人は部屋を後にした。

アーサーはフェイトをあのかの鐘楼のある場所まで連れてきた。

先に切り出したのはフェイトだった

「・・・ノースへ無断で行った私の罰はどうなるんでしょうか」

フェイトは目下に小さく広がる町並みを慈しむ様に眺めた。

罰を受け入れる覚悟の出来た、清々しい顔付きだ。

「――多分、サマンサの状態が落ち着いたらお前の就任式だ」

「え？」

「よっぽどの事でもない限り、長を罰するなんて出来ないからな。

神が神を裁けないのと同じだ」

「でも・・・」

「――俺の魔術で、遠くの炎の周囲の映像を近くの炎に映し出して観る事が出来るのは知ってるな？」

「は、はい」

フェイトはアーサーが何の話をしたのかわからず、戸惑う。

「お前が行った後、他の長にはちゃんと説明しといた。“連れ去ら

れたはずのホワイトドラゴン達が、遠い地で行き倒れているのを俺が炎越しに発見した。それをフェイトが助けに向かった“ってな”

「……っ、アーサー！」

フェイトは思わずアーサーに飛び付き固く抱擁した。

「ありがとうございますっ！」

アーサーはそんなフェイトの頭をポンポンと叩いた。

「これでもお前を心配してるし大事なんだよ。アイシャだってサマシサだってお前を助けるし支えたいって思ってる。もちろん補佐役のジュリアもな。だからやってみろよ、風の長ってヤツを」

「アーサーは、初めから自信があったんですか」

「んなワケあるかよ。でも、火の神が俺を選んだって事が最大の自信にはなったな」

言ってアーサーはいつもの自信家の顔で笑った。つられてフェイトも笑った。

見上げると東の空に上弦の月が昇っていた。

一方、コウとハルは眠っているサマンサに付きっ切りの看病中だ。呼吸・循環管理でベッドの横に座っているコウの元へ、仮眠から起きてきたハルがやって来た。

「どうだ？」

「変わらないよ。寝られた？」

「多少な」

排膿はまだ続いている。熱は先程、解熱剤を注射して落ち着いたようだ。ハルはコウの横に腰かけた。

「なんか麻酔以外の治療してるハルさんって初めて見たかも」

先程の気管切開を思い出し、コウが呟いた。

「そうか？昔は色々やってたけどな。ここ数年はほとんどの時間が研究で、たまに麻酔っていう生活だったから」

400年前の医療の研究の事だ。コウが歯科医師になった頃には、

既にハルはこの研究に没頭していた。

「・・・ハルさんが禁忌の研究してまで治したい病気って何？誰の病気？」

コウがずっと聞きたかったが口に出せずにいた質問をつい投げかけてしまった。案の定、ハルは身を固くし俯いてしまった。黙って膝の上で組んだ両手をじっと見つめている。

「やっぱりオレには言えない？・・・ゴメン、忘れて」

すぐ尋ねた事を後悔した。無理に聞き出したかったわけじゃない。気まずい空気を変えようと、飲み物を取りに行こうとしたコウの背中をハルが呼び止めた。

「――マキ」

「えっ？」

「マキと、マキの母親。それからユキちゃんだ」

コウはハルの言っている意味が解らなかった。

「待ってよ。確かにおばさんは病気だけど――」

「母子感染するウイルスだ。マキもユキちゃんも、いずれ発症する」

「そんなの・・・」

そんなの誰も知らない。幼なじみのコウも聞いた事がない。第一マキもユキも知らないのではないか。

「俺には、治す責任があるんだ。治さなきゃいけないえ。治せないんなら、・・・俺なんか生きてる価値ねえんだよ」

「――ハルさん、言ってる意味がよくわかんない」

コウは混乱した。

ウイルス？ユキもマキも発症する？それが難病？ハルに責任？知りたくない暗い闇に足を踏み入ってしまったような、そんな思いだ。

「コウ、俺は――」

ハルが口を開いたその時、サマンサの固く閉じていた目がゆっくり開かれた。

「――おい、わかるか？」

ハルは一旦話を中断させ、サマンサに呼び掛ける。

虚ろな両目の焦点が次第に合わさってくる。

「コウ、フェイトを呼んで」

「わかった！」

コウが部屋を飛び出した。

「フェイトー！アーサー！ああ、もう！どんだけ広いんだよココは！」

コウがフェイト達の名を叫びながら廊下を走る。しかし、夜も遅く人気もない。広い修道院内を捜しまわる。

（・・・なんなんだよ、さっきのは）

廊下を駆けながら、頭の中は先ほどのやり取りを思い出してモヤモヤしている。

（ユキが、病気？難病？元気じゃん）

長い廊下を走り、何度か闇雲に角を曲がる。

（ハルさんに責任って！ハルさん、何をしたんだよ）

いくら思い出しても、元気なユキの姿しか思い出せない。確かにユキの母親は普段日常をベッドの上で過ごしている。しかし病気について詳しく聞いたこともなかった。

（意味、わかんねえ！）

次の曲がり角を曲がった所で、強い衝撃を受けてコウは尻もちをついた。一瞬何が起きたか理解に苦しんだが、目を開けると50歳前後の男性が自分同様に尻もちをついており、やっと状況を察した。どうやらこの男性とぶつかってしまったようだ。すると周囲を取り囲んでいた数人の連れが驚いて声を上げた。

「長！大丈夫ですか！」

「長！」

コウは目を点にした。

「——おっ、長っ！？」

夜中の修道院の廊下に、コウの叫びが鳴り響いた。

第十三話 免疫力

真夜中の廊下でコウがぶつかったのが光の長であることは、後からフェイトに聞いて分かった。

あの後、光の長が連れの人間にフェイト達を捜すように命じ、人手も集めてくれた。

サマンサはと言うと、気管切開していて発声出来ないが、翌日には筆談出来るほどになった。

容態も安定し一安心したコウは、朝の太陽を浴びに外へとやって来た。

テラスの手摺りに両腕を乗せ、澄んだ空気を肺いっぱい吸い込む。どうやらこのウエストという町はエネルギーの大部分を魔術により賄っているため、大気汚染がほとんどなく空気が澄んでいる。

高地に位置しているため肌寒いのはやむを得ないが、寒さを忘れてしまうほど気持ちのいい朝だ。

「おはよう」

後ろから声をかけてきたのは、昨夜の光の長だった。

「――挨拶が遅くなってすまなかったね。この所、体調が優れない日が続いていたんだ」

彼の話し方は、さながら寒い冬の部屋に差し込む暖かな陽射しだ。

「東から遙々来なすった、風の長の御友人だね。大地の長を助けて頂いてありがとう。彼女はまだ死ぬには少し若い」

男はコウの横に並び、手摺りにもたれた。この初老の男をコウは横目で見る。

切れ長の瞳と柔らかい眼差し、包み込んでくれる様な存在感。光の長という事を妙に納得してしまう。

「病気なんですか」

「寿命だよ。ウエストの人間の宿命というものだ。私ももう長くはないのだよ」

「そんな・・・」

「ウエストの皆は4、50になると体が著しく弱るのだ。急にな。そして体調を崩しやすくなる。治り難くなる。そうして、あつという間だ」

易感染性、免疫力低下。コウの脳裏に様々な言葉が過ぎる。短命の種族の宿命なのだろうか。対応策はないのか。

（フェイトも——自分達より遥か若くして逝ってしまうのだろうか）
「東の方よ。そんな顔をしないで欲しい。我々はそれを受け入れて生きている」

そう言って笑う光の長は清々しい程であった。

「死が怖くないのですか」

「もちろん怖いさ。しかし、きっと何年生きた所で、死というものは怖いものなのだろうね。たとえ、どれだけ長寿の種族がいたとしても」

コウは黙って頷いた。

「私からして見れば風の長はまだ若い。妹が全てを超越した力を持ち生まれたため、彼が長に選ばれし今も尚、己の秘めたる力に気付くはずにいる」

それに、と光の長は朝日を眺めながら続けた。

「父親と母親は修道院に移される妹に付いて家を出たのだ。まだ幼い風の長を残して。それ故彼は、人を、己を、信じる事がとても困難なのだよ」

光の長は視線を遠くからコウの方へと移す。

「あなた方に見せる風の長の表情を見て、正直驚いたのだ。一体何があったのか私にはわからないが、彼が人を信じられたなら、いい」
幼き心が負った傷が癒えるのは容易な事ではない。それでも、生きている限り癒えない傷は無い。

そして、かさぶたが出来るまで、傷を覆ってやる方法なんていくら

でもある。

「――信じて貰えてるかなんてわかんないけど。・・・オレがフエイトを信じてるから、多分大丈夫」

コウは照れた様に、しかし自信に満ちた顔で笑ってみせた。

慌ただしく二週間が過ぎた。

持参した抗菌薬の種類も少なく、血液検査なんて当然出来ない中、炎症は一時再燃したかに思われた。しかしコウの迅速な対応、毎日の洗浄に加え、アイシャの治療促進の魔術による手助けもあり、どうにかサマンサは持ち直した。

「ハルさん、翼状針取って」

「おう」

「サマンサ、抗生剤は夕方の方の分のこれが最後だから。はい、チクつてするよ」

サマンサはベッドに横になり左腕に抗生剤の入った点滴を受ける。

「――っ」

針先が皮膚を貫く時、サマンサが顔をしかめた。

「ゴメン、痛かった？」

「大丈夫だ、ありがとう」

すっかり腫れも引いて、気管カニューレも抜去され気切孔も閉じた。痩せてしまっただけはいるが、顔色は見違える程良くなっている。現在40歳前後だろうか。

若い頃は相当な美人であっただろう。やむを得ない状況だったとはいえ、口腔外より切開を行ってしまった事で傷が残る事が、コウは今更ながら申し訳なく思った。

「本当にコウとハルには世話になったな。いくらお礼をしても足りない」

点滴を受けているため起き上がれないサマンサは、首だけ廻らしハルとコウの方を見る。

「いいよ、気にしないでよ」

「早くマナの石の協力したいのだけど、まだ魔力が完全に戻らなくて……すまない」

フェイトからはサマンサは男勝りで強気な性分であると聞く。それが今は、体力が落ちているため魔力が思うように使えず気弱になっているのだ。

「それは全然構わない。むしろ禁止されているのに、俺らに協力して本当にいいのか？断るのも自由だぞ」

ハルは自分の研究に禁止事項を犯してまで他人を巻き込むのを少し躊躇する気持ちもあった。それに加え、知りたくない事実の存在が怖かった。

「いいんだ。マナの石の解読を禁止しているのはノースであって、大地の神ではない。アタシが仕えるのは大地の神だからな」

「サマンサ……」

「それに、ハルも東の禁忌を犯してまで全てを賭けた、大切な事なんだろう」

そう言って微笑むサマンサは、西日を浴びてとても美しく、大地に生けるもの全てを守る女神にも見えた。

「ありがとう」

その時ハルが余りに儂く笑い返すから、研究を終え全てが明らかにした後、そのまま消えてしまうのではないかと——コウは思わずにはいられなかった。

外伝四 光と闇

「お前の両親が、亡くなった」

「――そうですか」

深刻な顔つきのアーサーとは対照的に、フェイトは家の庭で薪を割る手を止めずにそっけなく返事をした。

「それだけか。何で死んだかとか、疑問に思うものじゃないのか」

「・・・何で死んだんですか」

あくまで事務的な会話をするフェイトに、アーサーは眉根を寄せる。

「お前の妹の・・・サラの力の、暴走だ」

「！」

フェイトの表情が初めて崩れた。

三歳の時、締め切られた家に風が吹いた。初めての魔術だった。

四歳の時、父の魔術教育が開始された。

五歳の時、飛ばされて木に引っ掛かった母の帽子を、風の魔術で取ってあげた。

六歳の時、七歳の時、平穏で幸せな日々が続いた。

八歳の時、妹のサラが誕生した。

九歳の時、両親がサラの不思議な力に気付き始めた。

十歳の時、サラが修道院の呼び出しを受けた。

光の魔術と闇の魔術、両方の能力を兼ね備えていたためだ。

両親は神に近い存在だと喜んだ。

十歳の成人式を終えると、両親はサラを連れて家を出た。

成人したフェイトは、一人になった。

「フェイト、いるか？」

十五歳になったフェイトを訪ねて来たのは、近所に住むアーサーだった。

「こっちですよ」

声が聞こえたのは頭上からだった。玄関から離れて屋根の上を伺うと、フェイトが顔をだした。

「何でそんな所にいるんだ」

「風のない家の中に、一人でいるのが苦手なんです」

来ませんか、と誘われアーサーも屋根にあがる。

「夕日が綺麗だったんです。もう沈みますよ」

「すごいな。こんなのが見れるなら、家の中にいるよりよっぽどいい」

夕日が沈みきるのを眺めて満足したフェイトは、アーサーを振り返った。

「すみません、そう言えば何の用事だったんですか」

「あ。うちの親が、夕飯食べに来てって言って。お前を呼びに来たんだったよ」

アーサーが苦笑いすると、二人は急いで屋根から降りて夕食に向かった。

夕食はウエストの伝統料理の、豆のシチューだった。

フェイトは食することに執着があまりない。いや、ないことは無いのだが、一人でいるとどうも億劫になるのだ。細い体を見て、アーサーにもっと食べろと怒られることも度々ある。

「おいしいです」

暖かい料理が久しぶりだった。暖かい料理は、寂しい心によく沁み

る。

「そう、よかったわ。大したものじゃなくて申し訳ないけど」

「おかわり、あるぞ。どんどん食べるといい」

「もっと食べろよ。それでもっと太れ」

アーサーも、アーサーの両親もフェイトに対し優しかった。そして、

フェイトの家庭の事情をよく理解していた。

アーサーはまだ食べ終わらないフェイトの皿に、追加のシチューを注いでいく。

「そんなに食べられないですよ」

皿にテンコ盛りになったシチューを、フェイトは美味しそうに食べた。

「遅くなったな、悪い」

夜道を歩きながら、フェイトに詫びた。

アーサーの家族に予想外に引き留められ、すっかり遅くなってしまったためアーサーが家まで送ると申し出た。

一度は断ったフェイトだったが、話したい事もあるしとアーサーが無理矢理ついて来た形になった。

「いえ、ありがとうございます」

この少し年の離れた隣人が、フェイトは好きだった。

「星が綺麗だな」

「――話って何ですか？」

満天の星空、そんな言葉がよく似合う夜だった。

「サラは元気か？」

「何言って・・・、私は何年もサラには」

「もう、そういうのはいいから。ちよくちよく会ってるんだろ」

「・・・はい。バレちゃってましたか。サラしか知らないはずだったのに」

「俺が修道院行った時に偶然、な」

「アーサーが、修道院に？」

フェイトが怪訝な顔をする。

修道院は一般人はあまり近寄らない場所だ。そして、フェイトの大嫌いな場所だった。

アーサーは言難いのか少し口ごもったが、意を決して切り出した。

「――長になる事になった。火の長に」

「！」

フェイトが立ち止まった。数歩歩いてアーサーが振り返った。

「フェイト？」

「本当ですか」

「この通りだ」

アーサーはスボンの裾を少し上げて左の足首を見せた。そこには長の証明となる紋様があった。フェイトは紋様から顔を背ける。

「・・・アーサーも、私から離れて行くんですね」

「っ、フェイト！」

「――やだなあ、冗談ですよ」

軽く言うと、フェイトはアーサーを追い抜いて歩き始める。

「向こう行っても頑張ってください」

そうしてフェイトはまた、一人になった。

十八歳の時、久しぶりにフェイトの元にアーサーが訪れた。

両親の死を知らせに。

幼少期に大切に育てられた記憶よりも、十歳で成人して捨てられた思いが憎しみを伴って心を占拠している。だから死んだと聞いてもどんな顔をしていいのか分からなかった。

しかし、その原因がサラの力の暴走とは――。

「アーサー、どういう事ですか」

フェイトが薪を割る手を止めた。

「お前がサラに会いに来た事がバレたんだよ。サラの力が安定しない今、お前の親や他の長はそれを禁止した」

「なんですって」

「まあ聞けよ。サラはどうしてもお前に会いたくて修道院を抜け出したんだ。聖域に、裏の森に迷い込んだサラは生まれたばかりの双子のドラゴンに出会った。しかしドラゴンは、仮死状態だった。そ

ここに捜しに来たお前の両親が出くわしてしまった」

「仮死状態のドラゴン・・・」

「なあ、フェイト。光と闇の魔術ってわかるか。元はそれぞれが生と死を司る魔術だ。連れ戻されそうになったサラはパニックに陥り、暴走した力が両親の命を奪ってしまった。更に不思議な事に、仮死状態のドラゴンは息を吹き返したよ」

「それが、サラの魔術のせいですか。サラは今どうしてるんですか！」

「・・・修道院の地下牢に幽閉されている」

「なんでっ・・・！」

言いにくそうに顔をしかめるアーサーに、フェイトは詰め寄る。

「地下牢は魔力を無効化する構造に出来ている。サラが落ち着くまでは出られない。誰も手がつけれられない、それほど危険なんだ」

「じゃあ私にどうしろって言うんですか！」

アーサーには何も非がないとわかってはいても、声を荒げてしまう。
「コソコソ会に行くんじゃないくて。正式に面会を申し出てはどうだ？」

「え・・・？」

予想外のアーサーの提案にフェイトは目をしばたかせる。

「今のサラにはお前が必要だ。俺からも上に話を通すから」

「アーサー・・・」

「今のサラは、もう見てられない」

フェイトは拳を握りしめ下唇を噛んで黙ってしまった。

三日間悩んだ末、フェイトは修道院へ行くことを決意した。

付いて行こうかというアーサーの好意を断り、フェイトは一人、修道院の地下二階にやって来た。

「サラ・・・？」

石で出来た螺旋階段を降りた先の薄暗い地下牢は、歩くだけで体中

に静電気が走った様な強い痛みを感じる。魔力は無効化されているはずだが、このような形で暴走した力が漏れているという。痛みは奥に行くほど強くなった。

「これは・・・」

最奥の広い牢の隅にうずくまるのは、まだ幼い風貌のサラだった。

「大丈夫ですか」

フェイトの声はサラの耳には届いていない様だ。サラの周囲には青白い火花が散っている。

「サラ！」

「お、お兄・・・ちゃん・・・。来ないで」

兄の存在に気が付いたサラは脅えた顔をして首を横に振った。

「来ないで！」

「何ですか！何で！」

サラは膝を抱えて一層小さく縮こまる。

「お兄ちゃんまで、死んじゃったら嫌だ！」

「どうもないから！死なないから、こっちへおいで」

フェイトは手を差し込む。鉄格子は冷ややかな感触だ。

「私は、大丈夫だから」

この心に深い傷を負った年の離れた妹を安心させてやる言葉が見つからず、フェイトは必死に手を伸ばした。

「大丈夫・・・ほら」

「お兄ちゃん！」

双眸に涙をいっぱいに溜めたサラは、兄に向かって駆け出した。

「サラは落ち着いたか？」

修道院を出た所で待っていたのはアーサーだった。

「ええ、まあ。待っていてくれたんですか」

「ああ、相変わらず優しいだろう」

「そういえば、そうでした」

言ってフェイトは笑った。久しぶりに触れるアーサーの思いやりが、やけに沁みる。

「送ってやるよ」

二人は並んで歩きだした。

帰り道、珍しくフェイトが自分の事を話し出した。

「――十歳の頃、修道院に行ったサラに初めて会いに行ったのは、自分を捨てた両親への復讐の為でした。両親もサラも憎かったんです。・・・サラに何をしようとしたかは聞かないでくださいね」

アーサーは黙って話を聞いた。

「だけどサラは、幼いながらも私を兄だと認識しており、私の訪問を喜びました」

フェイトが足元に落ちている小石を蹴った。

「それから月日を重ね、修道院でのサラの苦悩を知るようになり、サラへの憎しみはいつの間にか消えていました」

歩いては小石を蹴り、追い付いては再び蹴る。

「今では守りたいなんて思うんですよ。変ですよ、サラの方がよっぽど強い魔力を持ってるのに」

蹴っていた小石を、今度はアーサーの歩く方に蹴った。

「あのホワイトドラゴンの双子を引き取る事にしました。両親を許せた訳じゃないけれど・・・、両親の生命が入ってると思うと、なんかほっとけない。一匹は、サラが落ち着いたら預けに行きます。一匹ずつ育てようと思って」

サラの光と闇の魔術で、偶発的に奪ってしまった両親の生命と、恐らくはその生命を用いて息を吹き返した幼いドラゴン。数奇で残酷な運命だ。

「――名前はつけたのか」

アーサーは足元の小石をフェイトへ蹴り返した。

「はい。マサムネとコジウロウ――昔の英雄の名前ですよ」

それからのフェイトの生活は、アーサーの予想に反して何も変わる事はなかった。飄々と自活をし、やはり時に皆の目を盗んでサラに会いに行く。

ただ一つ違ったのは――。

「アーサー。今日もサボりですか」

「うわっ！フェイト、来てたのか」

補佐役や他の長の目を盗んで日光浴に励むアーサーを、今日もフェイトが発見した。

秘密でサラに会いに行く日は、きまってアーサーにも会いに来るようになった。

「サボってる所しか見ないですよ」

「つまんねえし、息苦しいんだよ、ここは。あー・・・お前も長になっしてくれりゃあ、ちよっとは楽しいのに」

溜め息混じりにアーサーが愚痴をこぼす。

「冗談じゃない、絶対嫌ですよ」

フェイトが笑った。つられてアーサーも笑う。

それはフェイトが風の長となり、コウ達に出会う日の、まだ二年も前の話――。

第十四話 マナの石

「これは・・・本当の事、なんでしょか」

「信じてても信じられなくても、これがマナの石の事実だ」

精神統一を解いたサマンサが立ち上がった。

周りに立ちすくむフェイト、コウ、そしてハルは、しばらくその場を動けずにいた。

話は二時間前に遡る。

まだ空も闇に覆われている早朝、コウ達は聖域と称される修道院の裏の森に呼び出された。

この間までの夏の陽射しを忘れてしまったかのように、朝の空気が冷え込む。

「早い時間にすまない。人が居ると少し困るからね」

聖域の入口で待つのは、少し厚着をした顔色の良いサマンサだった。

「もう体調は大丈夫なんですか」

「フェイト、ありがとう。お陰でこの通りもうピンピンしている」

サマンサは力強く頷くと、三人を森の奥へと促した。

魔力を持たないコウやハルでさえ、厳かな雰囲気圧倒されながら道なき道を進んだ。

三十分程度歩いただろうか。

突如森が開け、見る者全てを圧倒する佇まいの巨大な一枚岩が姿を現した。

「――これが」

『マナの石』

「この石が西の歴史の全てを見てきた。ハルは、いつの時代を知り

たい？」

ハルに迷いはなかった。

「400年前から200年前まで、戦国時代の歴史を教えて欲しい」
イーストでもノースでも、ここウエストでも知る事が禁じられている200年間。

その期間に何が起こり、何が隠されてきたのか。

「どんな事実を知ることになっても、後悔はしないね？」

サマンサが最後通牒を行う。ハルは拳を握りしめ、顔を上げた。

「当然だ」

覚悟を決めた顔であった。

「——了解した。さあ、時間がない。始めよう」

ハルの決意を受け取ったサマンサは、マナの石の前に腰を下ろし、目を閉じる。

「天にまします我らの大地の神よ。願わくば——」

サマンサが祈りを唱えながらマナの石に手をかざすと、石が白い光を放ちはじめる。

#先代が72歳で死去されたため、これより先は百十四代大地の長である私が引き継いで記録を残そう。36歳である。

目をつむったサマンサが淡々と読み上げていく。

「これが400年前の記録か」

「——おかしいですね。ウエストの民は短命で、72歳まで生きるなんて有り得ない。せいぜい40代、どんなに長くても50歳程度が限界のはずです」

フェイトが首を傾げる。

疑問は残るが、事実は事実。ハルが続きを促した。

「続けよう」

#40歳である。外の国で争いが始まった。詳しくはわからないが、この国に戦火が及ばないといい。

「これが400年前に始まった戦国時代の初期の幕開けか？」

「今のイーストとノースかな？ウエストは最初無関係みたいだね」
コウには現在あちこちで見られる小規模な紛争が思い起こされた。

#45歳である。東の医者が動乱の激化を知らせにきた。この山深い西の国にも北の魔の手が近づく時がくるのか。その時はこの修道院が難攻不落な要塞となってくれるであろう。

#46歳である。東の医者が薬を作りにやって来た。南への調達も、今の所問題は無いようだ。

「南?! 南ってハルさんが探していた薬の材料の事かな」

「当時の医療の中心が、イーストの医療技術とウエストの魔術で作られた血液製剤とは考えていたけど。材料の血液が南で調達されていたのか? 今は南方は砂漠ばかりだぞ・・・」
疑問は募る。

#55歳である。東と南、そして我が国の三国の同盟が結ばれた。南の力は強大だ。いかに北の軍事力が大きいと言えど、交戦に踏み切るのは困難であろう。

「・・・なんて事だよ」

「南にも国があったという事ですか」

「そんな話、聞いた事ねえよ!」

北の軍事国家により、東の医療国家と西の魔術国家が支配され、三国が統一されたと考えられていた。そして南には、近づく者を容易に死に至らしめる恐ろしい大砂漠が広がっている、と教えられてい

るはずだが。

#75歳である。私生活が忙しくあり、マナの石の記録が御無沙汰となってしまうた。情勢は一応は安定していると云えるか。

#85歳である。病を患った様だ。私も長くはない。恐らく今回が最後の記録となるだろう。しかし、私の亡き後も、後世の長が引き継いでくれるはずだ。

「これが最初の50年間の記録だ。続きを見ていくが、いいか？」

「もちろん。そのためにここまで来たんだ」

決意を固めるハルであるが、コウの不安は強まるばかりである。そして次の長の記録へと移って行く。

#えーっと、前の長が亡くなったから次はアタシが記録します。次の大地の長は、ピチピチの20歳です。何書いたらいいんだろ。かしこまるのは症に合わないからこんな感じで行きまーす。

「随分軽い長もいるんですね・・・」

フェイトはガツクリと肩を落とした。

#大変！ここに来るのをすっかり忘れてたー！前の記録が長になったばかりの20歳だから・・・30年？もうすっかり50歳のオバサンよー。子育てとか色々忙しかったのよ。国は、まあ安定してるかな。戦争は北と南がドンパチやってるけど。うーん、南の国の人たちは戦闘能力が高いけど、北の兵器の開発が進んだら、どっちが優勢かわからなくなってくるわね。

「この長の記録はこれだけだ。次は大体300年前からの記録になる」

「適当な長だな・・・」

ハルが脱力感に襲われる。

「いろんな長がいるんだね。でも、南の人たちは相当強かったってことなのかな」

コウが首を傾げる。北の軍事力が優れているのは現在も同じだ。

#先代が亡くなりました。いえ、殺されたんです。北が攻めてきた為です。今回は辛くも退ける事が出来たが、犠牲が甚大でした。私の使命に懸けても、この聖地を戦火から護らねばならない。

「さっきの長は、北の奴らに殺されたのか・・・ひでえよ」

コウが拳をギュッと握る。

「300年前、戦いが激化した時期だな」

戦国時代の後期に突入する。

#就任して三年が経ちました。相変わらず国の各地で犠牲者が出ています。それでも、南の武将の方々の助けが無かったら、この国は当の昔に滅びていたでしょう。『武将』というのは南でも特に力を持った人物の呼称のようです。

#最強の武将との呼び名が高い、上杉謙信殿が率いる部隊が、最も強大な北への抵抗勢力となっています。そして上杉景勝殿が東を、上杉景虎殿が西に駐屯して北へ応戦しているのです。同盟とは言えど、東や西が南の為に出来る事は、通例の薬作りを行う事くらい。力が無いというのは苦しく辛いものです。

#やはり南の方々には感服いたします。竜人族という名にふさわしく、自由自在に空を駆け、戦う様はさながら龍を見ている様です。我が国に攻め入る北の軍は全て景虎殿が撃退しています。

竜人族は、我々や北や東の人間とは比べ物にならない程、長寿です。

神は、この選ばれた民である彼らを味方する筈です。

#北の主力部隊が上杉謙信殿に撃退されました。同時に我が国への侵攻も中断された模様です。このままこの戦争が終結してくれればいいのですが。

#南の国の小さな町が一つ・・・僅か一日にして壊滅しました。空からの襲撃だったようです。爆発により手も足もでないまま、町は破壊されました。この攻撃で、上杉謙信殿が命を落としたそうです。こんなことがあって良いのでしょうか、信じられません。このため景虎殿達は一旦南へ戻って行きました。

#今日は東の医者がやって来ました。通例の薬作りの為です。しかし、東でも北の攻撃が激しくなっていると東の医者から伝え聞きました。今後はこの三国の共同作業が必要な医術は難しくなるのでしょうか。我々の魔術と東の医療、そして竜人族の血、薬作りにはどれか一つでも欠けては成立しないのです。

#今日も東の医者がやって来ました。今日は国民全員分の薬を持ってきました。通例の薬に少し手を加えた物で、予防接種と呼ぶそうです。なんでも、今後薬の調達が困難となっても問題ない様に、身体を丈夫にする注射と言っていました。

#国内で奇病が流行した模様です。奇病と言うのは、50歳以上の国民が風邪の様な症状をこじらせて次々と亡くなるのです。東の医者への注射の後からです。何か関係があるのかと、東に使者を送っても、誰一人戻りません。何か、大変な事が起こっているのでしょうか。

#東から使者が一人戻りました。瀕死の重傷です。彼から聞いた話

は到底信じられないものでした。

使者はどうか東の医者・・・高岡医師に接触したようですが、彼は北の命令で我々に新しく開発された病気を注射したと話したそうです。

わかりますか、東の寝返りです。西と南は裏切られたのです。

その病気は『新型のウィルス』と言います。私達には治し方などわかりません。なんと高岡医師も治す方法は分からないと言うのです。わかっているのは、年をとると死ぬと言うこと。それだけです。40歳から50歳以上の人間が、あらゆる種類の病気にかかり、そのまま治らず死にます。今後、若い者達がどうなるかはわかりません。これ以上の酷い裏切り行為を見たことがない、どう足掻いても許すことが出来ないでしょう。

何はともあれ、南の方々に一刻も早く知らせないといけません。もうこれ以上の犠牲者は出してはならない。

「この長の記録はこれが最後だ」

「え・・・？」

それが意味するのは。

「次が戦国時代、最後の長の記録だ。始めるよ」

#先代が南へ向かったけど、20年経っても帰って来なかったと聞いた。オレに長の紋様が印されたという事は、先代は恐らくこの世にはいないって事だと思う。自ら足を運ぶ必要はなかっただろうけど、正義感の強い長だったらしい。

#この国には50歳以上の人間はいない。北と東の人間の陰謀だと聞いた。オレらが生まれる少し前の話だから実感があまりわからない。だけど相変わらず北は南と戦争を繰り返している。

#南に新しい英雄が現れたそう。その武将の名を伊達政宗という。

さらにその家臣、片倉小十郎景綱。軍師役を務めている。

伊達殿らのおかげで南の反撃は凄まじいらしい。オレは見えてないけど、北の降伏も近いのではないかと言われている。

#一つの国が終わりを迎えた。

200年続いた長い戦争でも、終わる時はこうも呆気なく一瞬の出来事なのか。

視察向かったオレの補佐役が、南が壊滅する様を一部始終見届けた。それはかつての爆弾とは似て非なる物で、威力は何百倍、いや何千何万倍になるんだろう。

本当に短い時間だったらしい。爆発はたった三回だ。伊達殿、片倉殿は、一体どうなったのか。

・・・考える必要もない、絶望的なんだろうな。むしろ南に生存者がいるとは考えにくい。

彼らがあと百年早く現れていれば、時代は変わっていたのかもしれない。

#我が国の降伏が決定した。これ以上の犠牲を出さない、ただその一心で長全員の意見が一致した。長い戦いが終わったんだ。

#オレも45歳になった。どうやら長くないみたいだ。オレの友人も一人一人と死んで、もうかなり減った。

わかった事は、オレらの親達が注射された例の薬は、子供のオレらにも効果が続くという事。

#北により大陸が統一された。そして200年間、全ての戦いの記録と伝承が禁止された。北にとっても東にとっても、支配には不都合となる事象が多かったんだろう。

ただ、それでよかったと思う。オレらの子供達にまで、短くなってしまうと寿命と不幸な歴史を背負わせたくはない。オレがそうであ

るように、大切な人の死が訪れた時、必ず憎しみを抱いてしまうから。幸運にも、人は忘れる事が出来る生き物なのだ。

#今日で戦いの記録を終える事にする。これからの未来に希望が溢れていることを祈ろう。

だけどオレは忘れないでいたい。西の民の奪わた長い時と、南の武将と呼ばれたたくさんの英雄を。

オレが逝った後も、マナの石は覚えていてくれるのだから。

第十五話 火鏡

聖域から戻ると、朝食も取らずに各自部屋に戻って行った。その間誰一人、言葉を発することはなかった。

ハルは部屋に戻るとすぐベッドに潜り込んでしまったため、同室のコウは一人窓の外を眺める。

マナの石の記録は、余りに衝撃が大きすぎて受け止め方が分からない。

内容を知ったのを後悔してしまいそうな程だ。ただコウが一番引かかっている事は。

——『高岡医師』。西を裏切り、多くの命と時間を奪ったウイルスの開発者。

コウはハルのベッドをチラリと伺う。

（ハルさん・・・タカオカ・ハルアキ）

そしてウエストに来てからの、ハルとの会話を思い返す。

『母子感染するウイルスだ。マキもユキちゃんも、いずれ発症する』
『俺には、治す責任があるんだ。治さなきゃいけねえ。治せないんなら、・・・俺なんか生きてる価値ねえんだよ』

考えれば考えるほど分からなくなった。第一、ハルはどこまで知っていたのか。

（もー・・・少しはゆってよ！！）

だんだんとイライラ、モヤモヤしてきて、コウは窓辺から立ちあがった。

（オレの長所は、思い立ったら即行動、だ！）

ハルのベッドサイドまで来て、声をかけようと勇気を振り絞った。

その瞬間部屋の戸がノックされて、心臓が飛び出るかと思った。

「はっ、はいっ！」

思わず声が裏返った。

開けた戸の前に立っていたのは、先ほど別れたフェイトだった。

どうやらこちらにも、居てもたつてもいられず戻ってきたらしい。

「すみません。けど、どうしたらいいかわからなくて。コウくん、

ハルさんは・・・」

「あ、向こうで寝て・・・」

「――起きてる」

ハルが帰って来てから初めて声を発した。

テーブルを囲んだ三人を包み込むのは長い沈黙だった。

「・・・」

「・・・」

コウは何か喋ろうとグルグル考えている中、沈黙を破ったのはハルだった。

「フェイト、なんて言っているかわかんねえんだけど・・・。俺は、ウイルスを開発した高岡の末裔、みたいだ」

「――っ」

フェイトの顔が強張る。

「・・・ハルさん、知ってたの？」

「いや、でもウエストに来てから何となくそんな気はしてた・・・昔、家の書庫から古い研究記録を見つけたんだ。戦国時代の物だった。恐らくマナの石の記録にあった高岡医師の物だろう。当時の医療については解読困難な部分が多かったんだが、はっきり記されているのは実験中の事故についてだった」

「事故って？」

「実験室に忍び込んだ近所の子供が、誤ってウイルス感染してしまったんだ」

「その子供って、もしかして・・・」

「そう。マキ達の先祖だ」

「そんな・・・っ」

「このウイルスは免疫細胞に感染して破壊し、免疫不全を引き起こす。発病は40歳から50歳。彼は抗ウイルス薬の開発を血眼になつて行つたが、徒労に終わったようだ」

コウは酷い現実に関がガンした。フェイトは俯いている。

「フェイトの話や、サマンサの病状を見て、もしかと思つたよ。同じウイルスが大量に使用されたんだ。俺の先祖が犯した過ちは、罪なき人間の命をいくら奪つたら気が済むんだろうな。今までも、これからも。自分の血が憎くて仕方がない。高岡の子孫の俺が、こうしてのうのうと暮らしていたことなんて許されることじゃねえよ」

ハルは血が滲む程、拳を握りしめた。

「ハルさん・・・」

コウが言葉を失う中、ずっと黙っていたフェイトが初めて口を開いた。

「マナの記録は、確かにショックでした。高岡医師の行いや、それを命じた北や東を許せるわけじゃない。ハルさんが、高岡医師の末裔というの・・・正直驚いています」

ハルは奥歯が砕けそうな程噛み締めた。

「でも！ハルさんが自分の血が憎くても、私はハルさんが憎いわけじゃないです。戦国時代最後の大地の長の記録を思い出してください。彼自身は深く悲しみ憎んだけれど、子孫たちには憎しみを抱いて欲しくなかった。そうでしょう？」

ハルが突かれた様に顔を上げる。

「そんな顔をしないでください。治療法を見つけて治したいって思つてくれてるんでしょ？そんな人を憎める訳ないじゃないですか」

「そんなの、罪から解放されたい俺のエゴだ」

「エゴでもいいじゃんか。ハルさんなんて元から自分勝手に強引でマイペースで俺様で——」

「コウ、お前・・・」

言いたい放題言われるも、無理矢理イーストから連れ出して来た手前反論出来ない。

「でも、正義感が強くて曲がった事が許せないってのも知ってるし！だったら作ろうよ、抗ウイルス薬。オレも手伝うから！」

コウが机を叩いて立ち上がる。フェイトも頷く。しかしハルだけは首を横に振った。

「・・・駄目なんだ。抗ウイルス薬を作る為には、恐らく竜人族の血液が必要になる。南が滅びた今はもう――」

「なんでそんなすぐに諦めんの。行ってみようよ、南に！何か手掛かりあるかもしれないし」

「そうですね。そうしましょう」

えらく乗り気な二人を見て、ハルは緊張の糸が切れた様に脱力した。と同時に、自分を受け入れ、否定せずに変わらず側にいてくれる事に深く感謝した。

可能性はゼロに近くても、南にはやっぱり砂漠しかないのだとしても、やり残した事があれば必ず後悔する。

いざ、南へ――

しかし、ハル達の行く手を阻む、想像を越える恐るべき大惨事が起こったのは、同じ日の夜だった。

「――これは」

夕食を済ませ、すっかり日が落ちて暗くなった修道院の中庭を散歩をしていたアーサーだった。

火の魔術で作った火の玉を指先で弄びながら辺りを照らし、同時に暖も取れるという優れものだ。

「なんだよ、コレっ・・・」

アーサーが驚くのは火の玉に映る光景だ。

遠方の地でも、その場に炎があればその火を通して情景を知ること

が出来る。

アーサーの火の魔術の一つだ。

掌サイズの火の玉の光景に目を疑い、更に詳細を知るためにキャン
プファイアー並の火柱を生み出した。

「アーサー様！何をしてるのですか！」

中庭で燃え盛る炎に驚いた人が次々と集まってくる。

「うるせえ！いいからハルとコウ、あとフェイトを今すぐ呼んで来
い！」

辺りは騒然となった。

「何の騒ぎだよ、コレは」

「アーサー！どうしたんですか」

「なんかあったの？」

呼ばれて来た三人が火柱の前に集まる。

暗い闇を煌々と紅く照らしている。

「これが、見えるか？」

アーサーが炎の前で両手を合わせて意識を集中させる。

「アーサー、これは？！」

「え、何？なんか見えるの？」

フェイトは炎を見つめて驚いているが、コウとハルは何が何だか分
からない。

魔力を持つ者と持たざる者との差だ。

「ちょっと待て、今見える様にする」

アーサーが更に集中力を高めていく。

炎に映る光景に、集まった皆が衝撃を受ける中、だんだんとハル達
にも鮮明になってきた。

「町が、燃えてる？」

コウが呟く。

「これは、まさか、イーストか？イーストなのか？！」

ハルがアーサーにつかみ掛からんばかりの勢いで詰め寄る。

「方角は東だ。距離からして、恐らくイーストだろう。炎の規模は、俺が今まで経験したことのないレベルだ。そして、ほぼ間違いなく人為的なものだろう」

見覚えのある町並みが、無惨な姿で炎を上げている。黒い煙に破壊された建物、逃げ惑う人々。

コウとハルの頭を過ぎるのは、近年各地で起こるノースとの紛争と、今朝マナの石で知った北の攻撃の歴史だ。

「どうしてっ……みんなは……みんなは無事なの?!」

「分からない。だから、すぐイーストに」

一刻も待てない。何故こんな事になったかよりも、皆の安否がただただ気になる。出発の際の簡単な挨拶で、全てが終わってしまうなんて冗談じゃない。

「ああ、帰ろう!」

ハルが踵を返す。

「オレ、車取ってくるよ!」

走り出そうとしたコウの腕を掴んだのはアーサーだった。

「ちょっと待て! 何日かけて帰る気だ」

ウエストからイーストへの交通路は存在しない。車で帰るには一旦ノースまで引き返す必要がある。

「そんな事言たって!」

「送ってやる。地上に行くよりマシだろう」

「え?」

アーサーが指笛を吹くと、中庭の空を覆い尽くす様な影が現れた。巨大なドラゴンだ。

「早く荷物まとめて来い、行くぞ!」

出発準備の整ったハルとコウをアーサーがドラゴンに乗せた。

最後にアーサーが跨がると、ドラゴンの咆哮が辺りに響き渡る。

フェイトも付いて行きたかったのだが、ドラゴンに乗れる人数上、そして立場、今ウエストを出る事は難しかった。必ず後から向か

うと約束し、フェイトはコウ達に一旦別れを告げる。
大きな翼を持った白いドラゴンが夜空に舞い上がり、美しいウエス
トの町並みが目下に小さくなっていった。

外伝五 初恋

「マーキ！」

三年ぶりのイースト。

三年ぶりの大学病院。

肺に入る空気さえどこか懐かしい。

懐古の念と期待で少しくすぐったい様な気持ちを抑えながら研究棟に向かつて歩いていると、自分を呼ぶ声が頭上から降ってきた。

見上げるとちょうど逆光であったため、二階の窓にシルエットが浮かび上がる。それでも、何年経とうが顔が見えなろうが忘れられない人物、間違える筈がなかった。

「――ハル」

「おかえり！」

二人は研究棟一階にあるリフレッシュルームにやって来た。

窓際の机に、自販機で買った紙コップに入ったコーヒーを二つ並べて腰掛けた。

「髪伸びたな。キレイになったし、別人みたいだ」

何の臆面もなく、この旧友はそんな恥ずかしい言葉を浴びせてくる。

マキには、ハルの方が背が伸び声も少し低くなり筋肉が付いて男らしく、随分変わった様に思えた。

女性の扱いにも馴れたから、相手が喜ぶ言葉が軽く出てくるのだろうか。ぼんやりそんな事を考えた。

「・・・たんだって？」

「え？」

昔と比較してかなり雰囲気が変わってしまった友人を見て、うっか

りぼーっとしていたらしい。

「だーから。兵役行ってたんだって？ マキも」

「え？！ ええ、そうよ。昨日帰って来たところ。立場は軍医としてだったけど、一応一通りの訓練は受けたわ。剣も、銃もね」

「すごいな。俺が辞めるのと入れ違いになったのが残念だけだな」
そう、マキが赴いた時は既にハルが退役した後だったのだ。兵役を終えたハルはそのままイーストに戻らず国中を放浪していた時期がある。

「何でノース行こうと思った？」

”ハルが義務として三年間を過ぎても一向に戻らなかったから、逢いたい気持ちだけで北に向かってしまった。”

（――なんて、口が裂けても言えないわよ！ どれだけ重い女なのよ。若いつて痛い・・・）

「人生経験・・・かな」

ハルに見つからない様に小さく溜息をついた。

「俺は、こっち戻って来たのにマキが兵役行っていなくて、結構シヨックだったのよ？――聞いてる？」

「え？」

自分の若さ故の行動力を恥じて、ハルの話があまり耳に届いていなかった。キョトンと聞き返すマキに吹き出しながら、ハルは笑ってこう言った。

「だーかーらー。逢いたくて帰って来たんだってば。マキに！」

マキは目を丸くすると少し怒った様に眉を寄せた。

「ちよっと・・・しばらく会わないうちに、そんなに軽い男に育ってたの？」

「違うよ。でも少し大人になって、何が大事かくらいはわかるようになったって言うか」

「・・・なによ、ソレ」

マキの白い頬が紅く染まる。

「なあ。俺ら付き合おっか？」

「・・・」

「イヤ？」

「・・・別に嫌じゃないけど」

真っ赤な顔をしてマキはそっぽを向いてしまった。

嬉しくないわけじゃない。上手く表現出来ないのだ。一回り離れた妹と病気がちな母がいる手前、自分がしっかりしなきゃとか家族を優先しなきゃとか思っていたら、いつの間にかこんなに自己表現が苦手な女になっていた。

「―――すげー惚れさせてやるから期待しなさいって」

「バ・・・バカじゃないの」

「じゃあ決まりな。今日仕事終わったらメシ行こう」

じゃあ、と言ってハルは飲み終わった紙コップをゴミ箱に投げて手術室へと歩いて行った。

その日のマキは復職のための書類作成に追われた。やるべき事が山ほどあるのに、書き損じやら記入漏れやら、少しも仕事がかどらない。要は心ここに在らず、なのだ。だから当人もその理由は百も承知な訳で、いい大人である筈の自分を恥じた。

（十年近くも前なのよ・・・）

ハルが兵役へと赴き、疎遠となって十年近い。

（きつとあの頃とはお互い変わってしまったているのに）

ハルに喜んで貰いたくて毎日パンを焼いた十年前。決して褒められた出来では無かっただろうが、嬉しそうに完食してくれた日々が鮮やかに蘇る。

ノースへ行ってしまった事が寂しくて泣いた日もあった。

今はただ、無駄にプライドばかり高くなり人前で泣けなくなった。

少し大人ぶったこんな只の子供を―――。

（ハルはまた前の様にみてるんだろうか）

書類に滲んでしまったインクの染みは、マキの心にも不安という形

で広がって行った。

それからの二人は毎日の様に時間を見つけては食事に行ったりコーヒーを飲んだり、一緒に時間を過ごした。

本当にたくさんのお話をした。

ハルがノースで出会った大切な友人の事。実家の隣の歯科医院の息子の母親の事。兵役を終えて旅をした二年間。

それは空白の十年間を急いで埋めようとしている様にも見えた。

だからその日も、二人はいつもの様に大学病院内のカフェに来ていた。

閉店30分前の午後9時半。お互いに仕事が一段落し、温かいコーヒーで一息つく。中庭に面した窓の外には、銀杏並木がライトアップされ、黄金色のカーテンの様だ。

「お疲れ。って言っても、この後もまだ仕事なんだろう？」

「そうよ。外来患者の統計まとめくらいだけだね。つまらないデスクワークが山積みなの」

研修医でも入れば少し楽なのにね、と、二人は顔を見合わせて笑う。その時、人も疎らな静かな店内に聞き覚えのあるアナウンスが鳴り響いた。

『コード・ブルー、中庭。コード・ブルー、中庭』

コードブルーは“緊急事態発生、至急全員集合”を意味する隠語だ。

「こんな時間に？消灯後よ」

「中庭ですすぐそこだよな、行くか」

白衣を手にして二人は立ち上がった。

マキ達が現場に到着した時には既に人だかりが出来ていた。救命救急の医師や救急カー트를運ぶ看護師など、現場はせわしなく、また野次馬の数も多いため近付くのも一苦勞だった。

「・・・飛び降りか？」

病院の屋上から飛び降りたと思われる人物は、病院の患者衣を着用していた。頭部周囲の地面に血液が広がっている。

ハルが隣で口元を押さえて青くなっているマキに気が付いた。

「マキ？おい、大丈夫か？」

「ハラダさん・・・」

「知ってんのか？」

「私が、昨日・・・癌の告知をしたの・・・」

マキの両手が震えていた。

事態が收拾した頃には、もう日付が変わってしまっていた。

病棟と研究棟の屋上同士を繋ぐ渡り廊下にマキはいた。

「やっぱりここにいた」

「ハル・・・」

振り返ったマキの頭上には細い三日月が昇っている。

「ハラダさんは私が殺したも同然よね。今日初めて・・・この仕事辞めたいって思った」

泣いているのかと思ったが、自虐的な笑みを浮かべていた。

「助けなきゃ・・・いけない立場なのに。私がハラダさんの背中を押したのね」

「マキ、やめろ。マキは悪くない」

「だって！まだもう少し生きられた命なのよ！自殺なんて・・・！」
掌に爪が喰い込む程強く、手を握りしめている。それを見てハルは痛ましそうに眉根を寄せた。

「自殺は病死だ。病気がハラダさんを死なせたんだよ。少なくとも俺はそう思ってる」

「自殺は病死・・・」

「来いって。ほら、泣いていいから」

そう言っでぐいとマキの頭を肩口に引き寄せた。

「――っ、泣き方なんて、わかんなっ・・・」

「ハイハイ。辛かったな」

俯くマキが嗚咽を漏らす。

「ゴメン・・・少しこのままでいて・・・」

「いつでも、傍に居てやるから」

そう言っでハルは母親が幼子にする様に、背中をトントンと叩いてくれた。それはまるで子守唄のような心地好い響きを持って、傷付いた心に染み込んで行っった。

幸せな日々は、いつか終わりを告げる。

三年の平穏な月日は、あっけなくその言葉を現実のものとしてしまっった。

葉桜の美しい季節だっった。

「・・・ゴメン」

「ゴメンじゃ分からないわよ。別れるって、なんで！」

ハルが平然とした顔で、別れの言葉を口にした。

「――今は研究に集中したいんだ」

「そんなの・・・納得できない。・・・他に好きな人が出来たの？」

「俺には、マキ以上に大切な人なんて現れない。――でも、分かっってほしい」

「分からないわよ！」

怒りで涙が滲んでくる。こんなに感情的になる自分は想像つかなかった。何より顔色一つ変えないハルがとてつもなく腹立たしい。ちようど春の訪れと共にハルが研究に没頭しだしたのは知っっている。

それでも、まさか、こんな事になるなんて予想だにしていなかったのだ。

それでも、微かに震えるハルの握った拳に気が付いてしまい、これ以上の追求が出来なくなる。

「・・・研究が終わるのを、待ったらいいの？」

「駄目だ。待ってももう程、俺はそんなに価値のある人間じゃない」ハルの言っている意味がわからない。そして、研究というハルの言葉を信じきれない自分にも嫌気がさす。

「マキには、幸せになって欲しいから」

（ハルがいない幸せなんて・・・そんなの何も意味がないのに！）ぶつきたい気持ちがうまく言葉にならない。マキは唇を噛みしめた。

「・・・じゃあハルの幸せって何よ」

「マキが、元気でいることだよ」

そう言ってハルは悲しそうに笑うのだった。

訳が分からないまま、もうどうする事も出来なかった。

納得する事も、分かりあえる事も。

ただ、物分かりのいい自分という名の仮面を着けながら、一度も口にする事が出来なかった想いを心の中で復唱する。

（――好き。本当に好きだったのよ。ハル。昔も今も・・・）

しかしその言葉を口にすることは最後まで無かった。

ハルはマキを強く抱きしめた。そしてそっと離れると、マキに背を向け歩きだした。もう、振り返ることはなかった。

（もう、私は誰も愛さない――）

静かに涙がこぼれ落ちた。

こうして並んで歩いた二人の道は、再び別々の方向へと続いて行く。『死』が日常に存在するこの職場だからこそ、絆を引き裂くものは何も『死』だけではないのだと、今更ながらに思い出す。

しかし別の道を歩み出した足跡が、また近付けることがあるのだと

いう事を、この時まで二人は知らない。
そして、それはあと数年後、思いも寄らぬ形で二人に訪れるのだっ
た――。

第十六話 魔壙

ウエストを発ってから、夜明けが一度、夕暮れが一度訪れた。その間、コウ達を乗せたドラゴンは休むことなく飛び続けている。

「・・・一度降りて休むか。済まない」

アーサーがドラゴンの首筋を撫でながら、コウ達に詫びた。

「いや、さすがに限界だろ。無理させて悪い」

ハルは言うとは後ろで黙ったままのコウをチラと伺う。落下しないようにハルの服を掴んでいるが、心ここに在らずといった様子で遠くを見つめている。

「コウ、今は悩んでも何も解決しねえぞ。休める時はちゃんと休めよ」

「分かってるよ」

その日は地上に降り、荒野に降りて一夜を過ごした。不安なのか寒いのか、恐らく両方だろう。コウは眠れないのか何度も寝返りを打ち落ち着かない様子だった。それでも今日も朝はやって来て、再び三人は空を急いだ。

翌日から一つ変わったのは、空を行く時の並びを、コウを真ん中へと替えた事だ。それは日中少しでも休ませてやりたいというハルの口に出さない思いやりだった。黙って背中から毛布を掛けてやり、うたた寝しても落ちない様に支えてやる。それはこれから待ち受ける厳しい現実を予感している様だった。

それから三日三晩この大陸の空を横断した末、ようやく遠方にイーストの街が姿を見せた。

「アーサー、ここからは――」

「ああ、わかっている。高度を落とそう。近付き過ぎる前に降ろし

たらいいんだな」

「恩に着る」

イーストの周辺はウエストと異なり森が少ない。そのため身を隠すポイントがなく、この目立つドラゴンで接近する事は危険だと判断した。

「アーサー、忙しいのに悪かったな」

「・・・気をつけてウエストに戻ってよ。色々ありがとう」

「ああ。こっちも落ち着いたら連絡する。無茶して死ぬなよ。仲間の無事を祈る」

アーサーはコウ達を降ろすと、ウエストへと引き返して行った。

「歩くか。今晚中にイーストに」

「うん」

舗装していない足場は歩きにくく何度か足元を取られそうになったが、早足で先を急いだ。

「・・・ンだよこれ」

変わり果てた街を見て愕然とした。

崩れた建物の瓦礫、ひどい怪我を追い息絶えた人々。

「有り得ねえ」

目の前に広がる光景に現実味がなく、変わり果てた街の姿は長年慣れ親しんだものとは掛け離れていた。

「コウ、お前んち近いだろ。急ぐぞ！」

「う、うん」

ハルは青くなるコウの腕を引いて走り出した。

（無事でいろよ、みんなっ・・・）

微かな希望も打ち砕き、コウの実家の歯科医院も、隣家のマキ達の

実家のパン屋も、半壊の損傷を受けていた。

「ユキ！親父！誰かいないの！？」

瓦礫を退かしながら家の中を捜しても、幸か不幸か何も見つけることは出来なかった。

「コウ、パン屋にも誰もいない」

「じゃあ、みんなは何処に・・・？」

「――なあ、お前んちの二台目の訪問診療車、ねえよな？」

「あっ・・・！」

一台目はウエストに置いてきた。だが、ガレージには二台目も見当たらない。広いガレージにはハルが出発の時に乗って来た二輪が横たわるのみである。

「運が良ければどっかで無事かもって事？」

「ああ、可能性は十分にある。――コイツが動けば・・・」

ハルは倒れた二輪を起こし、セルモーターを回す。すると久しぶりに再会した主人に答える様に、エンジンが力強くかかった。

「よし！コウ、大学行ってみるぞ！メット無いからしっかり捕まれよ」

「うん、急ごう！」

辺りが闇に包まれる中、ハルのバイクだけが煌々とヘッドライトを点して大学までの坂道を駆け上がった。

暗闇に浮かぶのは全壊した研究棟だった。

「ここが一番ひでえな」

「なあ、何でこんな事になってんだ？この街に何が起きたんだよ？！」

生まれ育った街とは全く異なった姿が信じられない。

「空襲だろ、ノースのな」

「空襲！？ハルさんは何でそんなに冷静に落ち着いてるんだよ！」

冷静に返すハルに思わず苛立って声を荒げる。

「冷静？俺が？どこが。ハラワタ煮え繰り返ってんだよ」

「ハルさん……」

「研究棟はもう無理だ。病棟の方に行くぞ」

敷地内をバイクで走り、病院玄関までやって来た。

「こっちは半壊ってどこか。患者はどうしてんだ？入り口は……開かないか」

言ってハルはガラス製の動かない自動ドアを蹴破る。病院中に響き渡る様な派手な音を立ててガラスが割れ、通行が可能となった。

「外来は壊滅か……」

瓦礫を避けながら奥へと進む。

電力が落ちているのか院内は完全な闇であり、コウの家にあった懐中電灯のか細い光だけを頼りに進む。

「何人死んでんだよコレ……」

「生きてる人間の気配がない」

あまりの惨劇に目を覆いたくなる。知り合いも恐らくかなりの人数が亡くなっただろう。

吐き気を催す中、ふと違和感を覚えた。

「でもおかしくない？元々いた患者や職員の数に比べて遺体が少ないよね」

「歩ける奴は、ここから脱出を図るだろう。ここに留まるのは危険すぎる」

「簡単に移動出来ない重症患者は？」

「俺なら……モノがあるICUに集めるな」

「そこだ、早く行こう！」

崩れかけた階段を昇る。

階段でなんとか三階までたどり着くと、半分開いたICUの入り口

から薄暗い光が洩れていた。

「・・・明かりが」

「気を付けろよ」

人間、気を付けろと言われる程、やらかしてしまうもの。コウは足元の崩れた壁の破片を蹴飛ばしてしまった。

「誰っ!？」

叫び声と共に飛び出して来た人物に銃口を向けられた、コウ達は両手を挙げた。

薄暗い部屋であり、相手の様子が伺えないが、銃の構え方からして素人ではなさそうだ。

「こっちは丸腰だ。何もしねえよ」

「そっちこそ誰?ここで、何をしてるの?」

ハルとコウは相手を刺激しないように落ち着いて話し掛ける。すると思わぬ返事が返ってきた。

「――ハルに、コウ?」

「え・・・?」

「――マキか?」

ゆっくりと銃を持つ両手を降ろし呆然とするのは、歯科口腔外科医局長であり、隣家のパン屋の娘であるマキだった。

「マキさ・・・」

コウが言葉を発しかけた瞬間、ハルが横を過ぎ、マキを強く抱き竦めた。

「――無事でよかった」

「・・・ハルっ・・・みんなが」

ハルにしがみ付いて震えるマキの姿は、コウのよく知るものと異なりとてもか細くかよいものに映った。

「怪我はないな。落ち着いて、今まで何があったか話せるか?」

「・・・ええ」

ハルから離れて一呼吸置くと、マキはゆっくりと話しだした。

「突然だった。一週間位前から、研究棟に大勢の武装集団が押し寄せたわ。ノースで起きた爆弾テロとマツイ大佐暗殺未遂の報復ですって。病院長を出すように要求があったけれど、病院長は行方をくらまして現れる事はなかった。他の要求も一切呑まなかったですよ」

ハッとハルが顔を上げる。爆弾テロとマツイ大佐の暗殺未遂。あの時のノースでのホワイトドラゴン奪回の出来事から作り上げた偽りとしか考えられない。

（そうか・・・あの時、マツイ大佐が言った”好都合”って、この事か！）

嵌められた事にやっと気付き、ハルは憤りを隠しきれない。

「その三日後この病院を中心に爆弾の雨が降り注いだわ。もちろんノースの仕業よ」

あとはハルの想像した通りだった。生存者は多くは無かったが、生き残った職員や病状が軽症の患者あ病院外へ避難していった。そのため、現時点でこの病院に残っているのは運よく生き残った数名の重病者と数名の医師だけだった。

「一応自家発電が生きていたのね。けれど、もういつまでもつか・・・。食糧も医療機器も減っていくだけだし、この病院の倒壊の可能性も十分大きいわよ」

「マキさん・・・ユキの行方はわかりますか？」

「家の方には居なかった？私はこの病院から一步も出られてないの」「家には居なかった。多分コウの親父さんと一緒に避難してるんだと思うんだが」

居なかったという事は死亡という最悪の状況は回避されたという事か。マキは少しほっとした顔を見せた。

「でも、避難ってどこに・・・。この街はもうどこも危険なのよ。それに私たちの家はこの大学を越えないとどこにも行けない」

「ああ・・・。恐らく、街の外に出たんだと俺は考えてる」

「でもハルさん。街の外に出ても、ノースしかないよ。そんな所には行かないだろ」

コウやマキの家はイーストのはずれに位置している。そこまで行つてコウはハルの意図する所が理解出来た。

「まさか・・・」

「そうだ、行けるのは南しかない」

ウエストで知った南の滅びた国の存在が頭によぎる。ノースがイーストを襲撃をした目的は分からないが、まずはユキ達を捜すのが先決問題であろう。

「マキ、俺らは捜しに行くわ」

「私はここに残るわ。放っておけないもの」

「そうか。そう言うと思った」

二人は顔を見合わせ、そして再開して初めて少し微笑んだ。

「コウ、ユキを頼んだわよ」

「任せてください。マキさんこそ、気をつけて」

歩きだそうとするハルの後ろ姿を、マキが小さく呼びとめた。

「ハル・・・私、人を殺した。ノースの軍人を――」

ハルは振り返り、動じることなく言い放った。

「俺は十年以上前に、人を殺した。マキだけじゃねえよ」

固く抱擁し、大丈夫大丈夫と背中を撫でた。

「ユキと再会するんだから、ちゃんと元気でいろよ」

そう言うハルは歩きだし、顔の横でヒラヒラと手を振って見せた。

（ハルとも、ちゃんと再開できるわよね・・・？）

マキの問いは言葉になる事はなく、空虚に漂っていった。

第十七話 砂漠

大きい石や岩だらけの道は、二輪には最悪だった。

「ねえ、道わかって走ってんの!？」

「わかるわけねーだろ! テキトーだ」

ハルの運転テクニクは相当なものだったが、それ以上に足場が悪い。思うようにスピードも出せない。

「マキさん、大丈夫かな。あんなに弱ってる所は初めて見た」

「そうか? 基本強がりだからな、あんなもんだ。でもアイツは大丈夫だよ」

その言葉通り、ハルのマキへの心配は深刻なものではなさそうだった。その口ぶりから固い信頼が窺える。

「――ハルさんって、マキさんと付き合ってたの?」

「・・・まーな。大昔の話」

素直に答えるとは思わなかった。コウは自分で聞いたという驚いた。

「何で別れちゃったんだよ。今でもあんなに大事そうにして」

「ウイルスの事を知ったからな。――俺はそこまで神経図太くねえんだよ」

「でも・・・」

「ほら、黙ってねえと舌咬むぞ」

バイクが道を跳ねる様に走る。

(だからマキさんはハルさんの研究にいい顔しなかったのか・・・)
余計な事を考えていると、ハルがバイクを急停止させ、コウは危うく振り落とされる所であった。

「・・・オイっ! 何だよ急に!」

ハルは何も言わずにバイクを停めて、その場にしゃがみ込んだ。

「見ろよ。轍だ」

雨の少ない荒野である事が幸いしたのか、地面にははっきりと車輪の跡が残されていた。おそらくコウの父親の車の物だろう。

「親父達がこの辺りを通ったって事？」

「読みが当たったかもな。急ぐぞ」

再びバイクを走らせた。

どれだけ急いだ所で、夜は誰の上にも平等にやって来る。

「日没後は走れねえな。自殺行為だ」

ハルは水辺で焚火を始めた。火を起こすと、いつの間に狩ったのだろう、野生のウサギを捌いていた。

「ハルさんってこういうサバイバルに馴れてるよね」

薪を拾って来たコウが感心して呟いた。ハルに比べると温室育ちもいいとこだ、と自覚している。

「だてに二年も放浪してねーよ」

ぶっきらぼうに言い放った二年間、それが六年間の軍での生活を突如辞めイーストにも戻らず行方を眩ませていた時期であることは、コウでも察しはつく。

何が原因で突然退役し旅に出たのかは、まだコウは聞かせてもらっていない。だが、いずれ話してくれるだろうと、気長に待つことにした。

「車ん時と違うからな。喰いもんも寝る場所も自分で探さなきゃなんねえ」

「しばらくは野宿かあ。・・・南には何があるんだろうね」

「さあな。99%何もないだろうけど。でも俺、結構悪運強いんだ」
そう言ってハルは大きくあくびをした。

「しっかり寝とけよ。体力勝負だからな」

そう言ってハルは一枚だけの毛布をコウに投げ、さっさと眠りについてしまった。

一週間もすれば箱入り息子だって野性に帰ることができる。

日に日に、コウは見違える程順応し、逞しくなっていって行った。狩りや火の起こし方を覚え、水の濾過や食物の保存方法を学んだ。しかし二人が南下する程、環境は過酷な物へと変化を遂げていく。石や岩が多い道から、細かい砂の砂丘が広がるようになった。日中の気温も高く、また昼夜の温度差も大きい。ハルの提案で太陽の高い時間帯は砂を掘って休む事にした。

「やっぱり南は砂漠が広がってんじゃん」

この日は運良くオアシスに巡り会えたため、二人は目一杯水を浴びた。ここに来て植物の有り難さを知る。

「あれ？そんな所に傷あったけ？お腹んトコ」

コウが引き締まったハルの右脇腹にある20センチ程度の傷跡を見つけた。傷口のいびつさから、手術の跡ではないくらい察しがつく。

「あー・・・古傷だ。もう十年以上前になるのか。大したモンじゃねえよ」

「ふーん・・・」

「気になる？」

「ちよつとはね。でもハルさんが自分の事を話したがないのは知ってるから、無理な詮索はしないつもり」

言ってコウは得意げにニツと笑った。

「――今回の事、全部が終わったらゆっくり話してやるよ」

「マジ？どうしたの？天変地異とか起こるよ」

ハルの意外な答えにコウは目を丸くして驚いた。

「ねーよ」

人懐っこく飄々としながら、どこか他人に対して壁を作るハルの、何かが変わりつつあった。

「――明日は、何かあるといいね」

「ああ」

そう笑うハルの顔はとても穏やかだった。

日の出。

行けども行けども、広がるのは代わり映えのしない砂漠。

「ハルさん、大丈夫？」

寒い夜の間二人が纏っていた毛布を、日の出と共にコウが日よけの為にハルの頭の上から支える。

「カラダ、アツくない？」

ふと触れたハルの肌が熱を持っていた。

「ん」

多少オーバークイ味なのは否めない。だが、今は弱音を吐いている場合ではない。前に進まなければ。

「砂は、見飽きたよな」

ハルが眩き、砂丘を掛けぬける。

「休む？」

「あの丘を越えたらな」

辺りでも群を抜いて高い丘の上でバイクを停めて、二人は息を飲んだ。

「――こりゃあ」

見下ろすと、何もない砂漠に突如現れたのは、場違いな程の木々の緑と、崩れかけた古い石の遺跡だった。

「行ったみようよ」

「そうだな」

バイクを走らせた。

その遺跡は想像していたよりも遙かに遠く、近づいてみるととてもなく巨大なものであった。

コウは見上げ立ち尽くした。

「なんだコレ……。ハルさん、すごくない？ハルさん？」

黙っているハルを怪訝に感じ横を窺うと、ハルが青い顔をして口元

を抑えている。

「ちょっと、大丈夫?!」

コウが呼びかけるが、ハルは膝を着いてそのまま倒れ込んだ。

「ハルさん!?!」

横たわるハルにコウが駆け寄る。

(アツい・・・!)

触れた肌が熱を持っている。

(汗を全然かいてない? 熱射病か?)

コウが休めそうな場所を捜して辺りを見渡す。

(遺跡の中か・・・。ああ、もう。こういう救急対応こそハルさん
だろ! オレは歯医者だったの)

コウが移動しようと、ハルを抱えるためにしゃがむと、コウの上に
影が落ちてきた。

「―――どうかなさったかね」

「えっ!?!」

突如降ってきた声に、コウは心臓が飛び出るほど驚いた。

第十八話 政宗

「誰・・・？」

声の主に驚き振り返ると、コウの目に飛び込んで来たのは初老の男だった。

「具合が悪いのかね・・・？中で休ませよう」

右目を黒い眼帯の様なもので覆ったその男は体格がよく、ハルを軽々と持ち上げた。

「あの・・・」

「付いてきなさい」

男はハルを抱えたまま、崩れた石塔を避け中に入って行った。

「――涼しい」

意識を手放す前の頭痛や吐き気、怠さが嘘の様にすっきりしている。目を覚ましたハルの目に映ったのは石の天井だった。体には薄い布が掛けられている。

「ここは、何なんだ」

倒れた時の記憶ははっきりしており、自分がいるこの場所が、突然現れた遺跡の中だということは想像がついた。

ふと右手に覚えた違和感に目をやると、そこには見覚えのある点滴が固定されていた。

「――どういう事だ？」

自分たちは医療器具や薬は持っていなかったはずだ。

疑問符だらけの頭に追い打ちをかけたのは、そこに現れた人物だった。

「ハル先生、目が覚めた？」

「――ユ、ユキちゃん?!」

マキの妹のユキだった。少し日に焼けた気もする。

「今コウくん呼んで来るからね、待ってて」

言ってユキはパタパタと走って行った。

（無事だったんだな、よかった。———そうか、この点滴はコウの親父さんの訪問診療車のヤツか）

過酷な環境による疲労が思ったよりも蓄積していた様だ。点滴と休養で体が見違える程軽い。そしてユキがいると言う事、その事実が心まで軽くした。

「ハルさん！気分はどう？」

コウが笑顔でやって来た。その後ろから続いて入って来たのは、先程倒れたハルを助けた、黒い眼帯の男だった。勿論ハルにその時の記憶はない

「俺は大丈夫だ。それより、何がどうなったのか教えてくれ」

「うん・・・オレもイマイチ理解出来てないんだけど」

コウと男は、上半身を起こしたハルの横に腰を下ろした。

眼帯の男の口から飛び出してくる話はどれも、俄に信じ難いものばかりであった。

「じゃあやっぱり此处は、かつて北に滅ぼされた南の国の遺構だって事なのか？」

「そうなるな」

男は表情を変えずに淡々と話す。よく見るとこの男、腕などの身体の表面に鱗の様な凹凸が見られる。背の所の服も盛り上がっており、違和感を覚えた。

（砂漠に住んでる人間の変異か？）

ハルは用心深く男の様子を窺った。

「で、アナタは何物なんだ？こんな滅んだ国の遺跡で、何をしていたんだ」

男は黙り、一呼吸置くと、逆に質問を返した。

「それを聞くんらば、先にそちらから素性を明かしたらどうだね。何せ200年間、誰ひとり訪れる事の無かった土地だ。立て続けの来客に警戒するのは当然だろう」

「それもそーだな」

ハルは頷き、今までの経緯をイチから丁寧に話した。自分の先祖の作り出したウイルスの治療法を求めて西へ向かった事。その途中、北でドラゴン奪回を試みた事。西でのたくさんの出会い、そしてマナの石の事実。北のイースト侵略。南への逃亡。男は相槌を打ちながら聞いていた。

「大変な思いをされたな」

「それで。そちらさんは？」

男はじつとハルを見つめると、信用をおけると判断したのか落ち着いた口調で話した。

「私の名は――」

――伊達 政宗

「ん？」

「えっ?!」

聞き間違いかと思い、コウとハルは聞き返した。しかし返ってくる言葉は同じであった。

「あの英雄と同じ名前ってこと？」

「私はあの戦いの生き残りだ。君らの言う人物と、おそらく同一人物だろう」

「だって200年も前の話だよ？」

コウは目を丸くする。ハルも怪訝な表情を浮かべる。

「我々は君らの種族より遥かに長寿なのだよ。竜人族と言って、この肌と・・・」

言って政宗は背に羽織っている布を取り払った。

「・・・翼？」

背中に、ドラゴンの翼に似通ったものを認めた。

「我々の血にはドラゴンの血が混じっていると伝えられている。翼は退化して飛ぶ事はできないのだがね」

「じゃあ、小十郎さんは？ここにいるの？片倉さん」

その言葉に政宗は目を見開いて驚いた。そして俯いた。口元は笑っているようにも見える。

「・・・その名前を聞けるとはな。小十郎は死んだよ。あの戦いで、私を庇って命を落としたのだ」

「そっか・・・ゴメン」

コウが申し訳なさそうな顔をした。

「何故謝る。私は嬉しいのだよ。こうして200年の時を経ても、誰かが彼を覚えていてくれている事がな。本当に大事な友人だったのだ」

初めて政宗は笑った。

「ここには何人くらいの人竜族がいるんだ？」

「八人だ」

「そんだけ?!」

「それでもよく生き残ったという程だ。それほど北の攻撃は凄まじかったのだ」

竜人族の心と身体に負った傷の深さを思うと、胸が潰れそうになる。国を失い、大切な友人を失い、彼はそれでも200年間生きて来た。その長い時間を想像するだけで眩暈を覚えそうだ。

「さあ、血が要るのだろう。私のを使ってくれ」

「有難う。研究が成功するか分からないけど・・・」

「構わない。私も西の国が、北の呪縛から解放されることを望むよ」
そう言うと、政宗はナイフを取り出し、手首にあてがった。

「ちよちよちよ、ちよっと待って!」

「オイ!何してんだ!」

政宗は止められた事に意外そうな顔をする。

「何故だ。必要なんじゃないのか」

「針とシリンジ持ってっから!今採血するから!手首なんか切るん

「じゃねえよ」

ハルが怒鳴り、コウが慌てて近くの救急カートから採血のキットを取り出す。

「おかしいな反応をするのだな。我々の時はこうして西の者に血を与えていたからな。竜人族は治癒が早いのだ」

「だからって、痛くないわけじゃねーだろ」

「まあ、そうだが」

そう言うが、政宗はコウにおとなしく腕を差し出した。

その晩、ハルとコウはどちらからともなく、外へ出た。

「ちよっと中を歩くか」

「うん」

ユキやコウの父親達とも無事に生きて再会することが出来た。竜人族の生き残りとの出会い、血液を貰う事が出来た。全てが順調であるのに、不安と嫌な予感募る一方だ。それにはイーストの現状と、ノースの攻撃が終わっていないだろう事から来るものだろう。

「ハルさん、これからどうすんの」

「え？」

「・・・いや、いつまでもハルさんの後をついて行くだけじゃ、駄目だなんて思って」

ハルの答えを待たずにコウが話を続けた。

「オレはイーストに帰りたいと思って。イーストの今の現状を把握して、力にならなきゃいけない。それから」

コウはずっと気になっていたが口にするのを恐れていた事があった。「母さんに会って、話がしたいんだ。イーストが空襲にあったんだよね。母さんって空軍大佐じゃん。関わってないって考える方がおかしいよな」

それはハルも確かに引かかっていた。だが、コウ達のいるイーストを攻撃するぐらいなら、自害しかねない人物であるとハルは認識

している。

（・・・もしかしたら、コウが思っている以上に、ユイさんは大変な事になっているかもしれねえ）

「奇遇だな。俺もユイさんに会いに行こうと思ってた」

「でも、ハルさんはウイルスの研究を急ぐんじゃないの？」

「バーカ、この事態が収拾しないことには研究場所もないだろ。それに、お前にもやり方を伝えておくつもりだ」

「え？何で」

「俺にもしもの事があつた時のためにな」

コウが眉根を寄せてハルを睨む。

「縁起でもない事言わないでよ」

「万が一のためだって。俺だって死にたくねーもん。だけどこのご時世じゃ何があるか分からねえからな。これで薬が作れなかったじや洒落になんねえよ」

言うどハルは伸びをして数歩先を歩く。

「夜はやっぱ寒いなー。そういや、ユキちゃんと話は出来たか？久しぶりの再会だろ」

「・・・話はしたよ。でもハルさんがマキさんにするみたいに支えになれてるかかって言ったら微妙」

コウがまた自分自身の力不足にヘコンでる事に気付く。

（――だいたい遅しくなってるんだけどな。気付いてねーのな）

ハルはまた悩むコウをみてなんだか可笑しくなった。コウの場合、自分を卑下する事で成長することが多い。だから今はあえて励ましたりしない。

「――難しいよな」

それはハル自身へ向けた言葉でもあった。生きる事も自分の正義を貫く事も難しい。だけどせめて、一つだけ願いが叶うなら――。

この場所は大陸のどの町よりも星が瞬いている。
それは大昔に失った沢山の命の輝きなのだろうか。そう思わずには
いられない夜だった。

第十九話 四

砂漠の朝日はこんなにも眩しいのだろうか。

それとも、この地から人間がいなくなったことで世界は美しくなるのだろうか。

それを思うと人間がこの地球にもたらした有益な事象が一つでもあるのか、甚だ疑問に思えてならない。人間の存在は例えるなら癌細胞だ。無秩序な増殖は本体が死滅するまで留まらない。

だけど、人間だって地球を破壊したかったわけじゃない。どの時代も必死だったのだ。

だからと言って癌細胞の存在を肯定する者はいない。誰一人と。

「ハルさん、何してんの」

「美しい日の出だなーって」

このところの習慣で朝早く目が覚めてしまったコウは、手持ち無沙汰となり散歩に出歩いていた。

そこでぼーっと朝日を見つめるハルに出くわしたのだった。

「そんなにロマンチストだったっけ？」

「あ？ 麻酔科のロマンチストとは俺のことよ」

「・・・カテゴリー、狭っ」

とは言ったものの、特別することも無かったためコウも並んで腰掛けた。

「―――ねえ。今日ここを出ようか」

「そうだな。南でやる事は沢山ありそうだが、優先順位は東と北だ。ここには、全てが落ち着いたら戻ってくるか」

コウが切り出した話は、ハルも考えていたことだった。政宗に聞きたい事や南について知りたい事は数え切れない程ある。しかし今は

やるべき事がある。

「うん。でもユキ達は・・・」

「ああ、しばらくここで頼むつもりだ。――コウ、お前も残ってもいいんだぞ。一緒に来て、万が一死んだりしても俺は責任取れねえ」

コウはハルの方を見ず朝日を眺めながら答えた。

「取らなくていいよ。オレ死ぬつもりないから」

「・・・」

「ハルさんは何でも責任感じ過ぎ。どうせ今回のイーストの空襲だって自分のせいだとか考えてんだろ。それ違うから。」

イースト侵略のきっかけに、ハルの計画したホワイトドラゴン奪回計画が利用されたのは事実のようだ。そしてハルが自分を責めない筈がない事を、コウは知っている。

「世の中のほとんどの事がハルさんには責任ない事だよ。意外に世界は勝手に廻ってんだって」

ハルは目を見張った。

「死にたくたって、簡単に死なせてやらねーからな」

ハルが真顔で沈黙している気配を隣で感じていたと思ったら、ハルは急に笑い出した。

「なんだよ。人が真面目に――」

「いや、お前にソレを言われるなんてな。よくわかってんなー、俺の事」

「・・・どんだけ一緒にいると思ってんだよ」

ハルはしばらく黙っていたと思うと、切り換えた様に、あーあっと伸びをした。

「いい男に育っちゃって、俺は寂しいよ」

「自分の事になるとすぐそうやって茶化すよな。いいよ、でも覚え」といて

言ってコウが立ち上がった。

「行こ。みんな起きて来てるかも」

裾の砂を手で払い落とすと、自分達が寝泊まりしていた方の遺跡に向き直った。

この石で造られた巨大な遺跡はおよそ1キロメートル四方の回廊に囲まれている。回廊は朽ちて崩れかけているが、よく目を凝らすと細かい美しい彫刻が隅々まで彫り込まれているのがわかる。そして中心に位置する急勾配の石段の先には、本堂となる中央の大きな祠堂がある。これもかつての戦争の爪痕を残したまま長い年月に風化されてしまった様子が窺える。

大きな祠堂は神の為であるので立ち入る事は出来ず、コウ達はその周囲の幾つか存在する小さな祠堂の一つに寝泊まりしていた。

政宗が言うには南の民は皆、信仰深い一神教だったという。唯一の神である竜神が中央の祠堂に奉られている。

それに対してウエストには各属性の神が存在する多神教であり、ノースはその時の元帥が現人神として軍神と崇められる。

一方、イーストは無宗教だった。コウもハルも神頼みくらいはするが、信仰心というのは正直よくわからない。普段信じている物は、己とたまに他人、それから検査データ、そして結果。いくら祈ったって治らない病は治らない。死ぬものは死ぬ。医者には神じゃないから、万能じゃない。助けるなんておこがましい。働き出して1、2年もすればその位嫌でも気付く。

それでもコウは思う。ノースでの訪問診療で出会った患者達の沢山の笑顔、サマンサの救命、――やはりこの仕事が好きだと。戦争によって街は破壊され、もう前の様に働く事は出来ないにしても。

「コウ？」

「――ハルさん、帰ろうか」

だが、もし運命の女神がいるならば、よほど無慈悲なのだろうか。朝焼けが美しい砂漠に響き渡るのは、この場に似合わない高音のエンジン音だった。

「なに?! 何の音?!」

驚くコウの隣で、ハルには聞き覚えがあった。

「上だ! 早く、その陰に隠れるぞ!」

咄嗟にコウの腕を引っ張り、石楼の陰に身を潜めた。

「ノースの戦闘機だ」

「は!?!」

「危ないっ!」

コウを庇う様にしつ身を伏せると、戦闘機は中央の祠堂目掛けて爆撃を行った。唸る様な地響きとともに、祠堂は倒壊した。その振動でハルに石楼の一部が崩れて降り注ぐ。

「――っ」

「ハルさん! 大丈夫?!」

「・・・当たり前だ。それよりユキちゃん達が心配だ。あの戦闘機もこれで終わりって訳じゃねえだろ」

大丈夫じゃなさそうな苦悶の顔を浮かべて肩を押さえながらハルはヨロヨロと立ち上がった。

「ホントに大丈夫?」

「いいから行くぞ」

二人はユキ達の泊まっている祠堂に急いだ。

こちらも先程の爆撃の地鳴りで外壁が崩れ落ちているが、ユキの母親や父親、コウの父親も、誰ひとり怪我は無かった。

「ユキ、無事でよかった! 親父も、おじはさんやおばさんも怪我ないな」

コウが皆の具合を確かめる。

「うん大丈夫。びっくりしたけど」

「お前達も大丈夫か?」

コウの父親も、コウ達を気遣う。

「――怪我はないかね」

そこに入って来たのは政宗だった。

「ああ、そっちも大丈夫みたいだな」

政宗はハルを見て驚いた。

「肩が――」

「大丈夫だったの。なんでもねえ」

見透かされてバツの悪そうな顔をする。

（――左手は使い物になんねえな。鎮痛薬でどこまで持つか……）

正直このままではバイクの運転は厳しい。それに先程の戦闘機。万が一、この場で白兵戦にでもなれば分が悪すぎる。

「それより、さっきのは北の戦闘機だろ？ よくああいった爆撃とかあるのか？」

「……あるわけないだろう。あの戦い以来だ」

政宗は苦い顔をした。

「俺らが来たから……だよな」

「ハルさん！」

先程話した事を聞いていたのかと言わんばかりにコウが咎める。

「北は何も変わつとらんだよ。破壊と侵略と支配を繰り返すだけなのだ」

政宗は苦渋に満ちた表情を浮かべる。

「政宗さん達の存在は北に知られてるの？」

「知られていない筈だが、もはやそれも分からんな。さっきのが君らを狙ったものなのか、それに乗じて我々を根絶させる目的なのか――それより今は此処を離れ何処かに避難する事が先だ」

そうこうしている内に、政宗達のいるこの祠堂に爆撃に驚いた他の竜人族達も集まって来た。

「政宗様、ご無事で！」

「政宗様！」

皆、似たような鱗の様な肌と翼を持ち、そして政宗の身の安全を一心に案じていた。

「ああ、全員無事だな。よかった」

「はい、でも祠堂が・・・」

「気にするでない。皆が無事なら、竜神様もきっとお許しになってくださるだろう」

「政宗様・・・」

「それよりもここからの避難が先決であるぞ」

とは言ってもここは南の砂漠の真ん中。そして交通手段も車が一台にバイクが一台。陸の孤島という表現が似つかわしい。

「ねえ、政宗さん。避難ったって何処行くの？逃げ場なんか・・・」
祠堂から出て歩きながらコウが尋ねる。

「こういった遺構は此処だけではないのだ。小規模な物が砂漠中に散在しているはずだから、半日も歩けば他の遺構に辿り着くはずだ」
砂漠歩きは体力を奪われる。政宗は薄い布で作られたローブを皆に渡した。

本来なら昼間の移動は不向きであるし、ノースに見つかる可能性も高い。だが今は言ってる場合ではない。事態は一刻を争う。

病気のユキの母親は、ユキの父親が他の者の手伝いの申し出を断り、自ら背負うと言った。

「行こう。北の戦闘機が戻らない内に」

一行は砂漠へと歩きだした。

どのくらいの時間が経ったのだろうか。南中時刻となり、太陽の日差しが照り付ける。ハルはコウに鎮痛薬の筋注を頼み、バイクを押して歩いていた。しかし二時間ごとに筋注を頼む程、肩の怪我が痛いらしい。それを見兼ねてコウがバイクを押す事とした。

「見渡す限り砂漠しかないねー。てかハルさん大丈夫？」

「俺を誰だと思ってるの。これくらい何でもねえよ」

ローブで隠れており怪我の状態は分からないが、ハルの額には大量の脂汗が滲んでいた。

「・・・強がり」

「ああ?!」

竜人族は砂漠に適応した生態なのか、単に砂漠に慣れているのか、平然とした様子だ。しかしユキ達の負担は非常に大きい。それを察した政宗が歩みを止めた。

「皆の者、砂漠での無理は禁物だ。一旦休むとしよう」

周囲に日陰など無い為、皆で穴を掘りはじめた。

「ユキちゃん、平気？」

ハルは肩を押さえながらバイクに寄り掛かり、それでもユキ達を氣遣った。

「大丈夫って訳じゃないけど、お父さんやお母さんの方が大変だから。弱音吐けないよね。ハル先生こそ怪我、痛い？」

逆に心配されてしまい、苦笑いしながら頷いた。

「でも俺、痛みには強いから」

隣で穴を掘っていたコウが手を止めてため息をついた。

「何でバイクなんか持って来たの？運転出来るような状態じゃないくせに」

「あー・・・それは」

ハルが口ごもり、言葉を探していると、あの高音のエンジン音が重く鳴り響いた。

「嘘、マジかよ!」

見上げたコウの目に映ったのは、先程とは比にならない沢山の戦闘機だった。

「やっぱりな」

「え？」

まるでこの事態を予測していた様なハルの口ぶりにコウが振り返る。

「コウ、みんなを頼むぞ。ちゃんと隠れとけよ」

言ってハルはバイクに跨がりエンジンをかける。

「ハルさん!」

制止の声を振り切り、自ら囿となるためハルを乗せた二輪が走り出

した。

そして空を覆うノースの脅威の、その内の一機がハルの存在に気が付いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1509v/>

新歯界展望

2011年11月21日07時00分発行